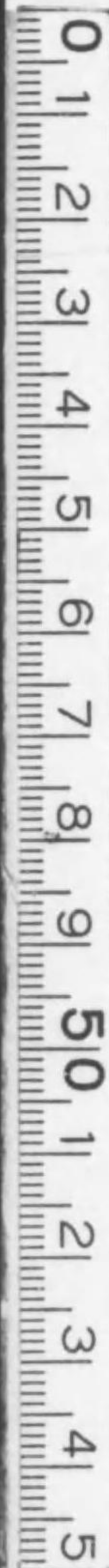


370-125



1200601170517



始



西田幾多郎著

意識の問題



岩波書店刊行

370

125



I種

W



1200601170517

改版の序

カントが一度形而上學を排斥し、事實の問題と價值の問題とを峻別して以來、一途に形而上學は過去の學問と思はれ、體驗の内省は、なべて心理主義に陥るの恐あると思はれる傾がないでもない。併し形而上學が爾く容易に葬り去ることができ、るや否やは疑問であり、又所謂新カント學派の人々があまりに論理に偏して、深い體驗の内省を缺いて居たといふことは、殊更に問題を局限し、明にすべきものを明にしなかつたといふ弊がなかつたかと思ふ。

東都大震災の後再刻の日

著者

序

此書は余が嘗て著せる「自覺に於ける直観と反省」の終に於て達した立場から、主として意識の問題を論じて見たものである。余はかゝる問題を攻究することによつて、精神科學の基礎概念を明にしたいと思つたのであるが、尙徒らに問題を提出したといふに過ぎない。

此書に於て、余が實驗心理學に反對するものの様に思はれるならば、それは誤解である。實驗心理學が嚴密に其立場を守るかぎり、余は此學の價值と功績とを認め、るに躊躇するものではない。唯、此學が何處まで、精神科學の基礎として、すべての深い問題を解決し得るか、は疑なきを得ない。加之、余は心理學は他の科學にもまして、哲學的反省を要するではないかと思ふのである。

此書、固、一つの習作に過ぎない。思想の未熟なるは云ふまでもなく、或は前後一致しない様な所もあるであらう。偏に讀者の同情ある理解を冀ふのである。

大正九年一月

西田幾多郎

目次

意識とは何を意味するか	一
感覺	三一
感情	六〇
象徴の眞意義	九五
意志	一〇二
經驗内容の種々なる連続	一二三
意志實現の場所	一七六
意志の内容	一九七
關係に就いて	二五二
意識の明暗に就いて	二六六
個體概念	二八四
ライプニッツの本體論的證明	二九四

意識とは何を意味するか

我々はおのづから或物とか或事柄とかが自分に意識せられて居るとか居つたとかいふことを知つて居る、従つて此等のものと意識せられなかつたものとを區別する。物が意識せられるとは如何なることを意味するのであらうか。

物が我々に意識せられると否とは物自身に何等の變化もないと考へることができる。例へば数理とか物理現象とかいふものが我々に意識せられると否とは数理とか物理現象とかいふものに何等の關係もない。嘗に此等の對象が意識作用と關係のないのみならず、意識現象の性質として考へられて居る赤とか青とかいふものも表象自體として意識作用を超越して居ると考へることができる。赤とか青とかいふものも意識せられることによつてその性質を變じない意識作用は表象自體に何物をも附加しないのである。

普通には色とか音とかいふものは精神現象の性質であると考へられて居る。エーテルの波動が眼底を刺戟して色と感じ、空氣の振動が内耳に入つて音と感せ

られる。色とか音とかいふものは外界刺激が感官に觸れて生理的刺戟を起し、此刺戟が腦中樞に傳はり、之に伴うて起る精神現象の性質と考へられる。精神と物體との間に因果的關係を考へ、甲の物體の作用によつて乙の物體に變化を生ずる如く、種々の感覺的性質は外界刺激の作用によつて起されたる意識現象の性質に過ぎぬと考へられるのである。赤とか青とかいふのは意識現象其者の性質であつて、此等の性質を離れて意識現象なるものはない。赤の感覺とか青の感覺とかいふ外に意識といふものがあるのではない。此等の具體的意識現象以外に意識の性質とか意識作用とかいふものを考へるのは、物體現象の背後に物力を考へると同じく、抽象的思惟の作用に過ぎないと考へることもできる。

青の感覺、赤の感覺、空間知覺、時間知覺等、其他種々なる個々の意識現象を離れて意識といふものはない。恰も電磁氣の現象を離れて電磁氣がないと一般であると同考へる人もある。併し此等の語は嚴密に考へて見なければならぬ。我々は赤とか青とかいふものを感ずることもできれば、之を記憶表象として想起することもできる、又之を思惟對象として考へることもできるのである。之を以て見ると、

赤とか青とかいふのが直に赤の感覺、青の感覺ではない。赤の感覺には赤の外に何物かが加はらねばならぬ、即ち意識の對象と作用とは區別せねばならぬ。赤の感覺作用とか知覺作用とかいふものが赤ではない、寧ろ知覺せられるもの、想起せられるものが赤いのである。赤といふのは意識の對象の性質であつて、意識作用の性質ではないと云つてよい。無論、斯く意識の對象と作用とを分つて考へるのは思惟の所作に過ぎない、具體的意識現象には此の如き區別はないとも云ひ得るであらう。意識現象は物理現象と同じく具體的出來事と考へられる。併し今赤の經驗が青の經驗に變じたとする、我々は之を赤の感覺が青の感覺に變じたと解することもできれば、外界に於て赤の光が青の光に變じたと解することもできる。之を感覺の變化と考へれば、すべてが直接經驗の事實として誤なきものと思ひ、之を外界に於ける物體現象の變化として説明するのは推論であつて、時に誤ることがあると考へる。併し物理現象とは所謂客觀的立場から我々の經驗を統一したものと云へ、我々の感覺的經驗を離れて物理現象があるのではない、物理現象とは感覺的經驗の變化に對する一種の解釋である。翻つて所謂心理現象なるもの

を考へて見て、それが果して心理學者の考へる如く直接經驗の事實その儘で何等の思惟の加工をも混じらないと云ひ得るであらうか。赤の感覺が青の感覺に變じた場合、我々は之を意識内の現象として之に就て十全なる知識を有する直接經驗の事實と考へて居るが、外に對して立てられた内は所謂外と同じである、所謂我は物と同じく外界的である。固より現今の心理學者は我といふ如き實在を考へないであらう、一々の精神現象を其時其時の出來事と考へて居る。併し若し此考を徹底するならば、精神現象の再起といふことは全然不可能とならねばならぬ。記憶とか意識統一とかいふことは如何にして説明することができらうか。赤の感覺が青の感覺に變つたといふ意識は如何にして可能なるか。嚴密なる意味にて一度限りの出來事は何等の實在性をも帯びることはできぬ、その間に何等の結合をも考へることはできぬ、心理學的法則を考へるのも無意義となるであらう。赤の感覺が青の感覺に變じたといふ場合、之を單に一度限りの出來事の連続と見るならば、心理的實在とは如何なるものであらうか。出來事とは何物かの上に於ての出來事でなければならぬ、何物かはその基礎とならねばならぬ。現象の背

後に所謂實體の如きものを考へる必要はないとしても、此等の現象が何等かの意味に於て獨立し、それ自身の法則を有するならば、出來事の單なる連續以上のものでなければならぬ。物理學に於ても種々の現象を出來事と考へるのであるが、其背後に種々の力とかエネルギーとかを考へることに依つて物理的實在が成立するのである。苟も客觀的實在として我々の認識對象となるものは、自然科学的實在の如く現象間の不變的關係といふ如きものか、歴史的實在の如く種々の現象を個性的に統一する如きものかでなければならぬ。若し個々の要素を實在と考へるとしても、物理學者の所謂原子の如きものか、ヘルバートの所謂 *Ideen* の如きものを考へねばならぬ。ツントに依れば現今の實驗心理學は主意説であつて、個々の精神現象を出來事と見做し、物理現象と同じく實驗法を用ゐて之を研究すると云ふが、それにしても現象と現象とを關係せしめるものがなければならぬ、此等の現象を統一する根本概念がなければならぬ。物理現象に於ては空間、時間、運動といふものが此等の根本概念となるのである、空間的延長といふものが物理現象の根本的性質となるのである。心理現象を考へるにも、何等かの意味に於て此の如

き基本概念がなければならぬ。然らざれば心理現象の關係を考へることも不可能である。心理現象なるものを他と區別して考へることもできないであらう。

意識は誰かの意識である、或人に意識せられるといふことが意識現象の特徴と考へられる、これが意識現象の我々に直接と考へられる所以である。併しこの或人といふのは何を意味するか。現今の心理學では、現象の背後に我といふ如き實在を考へない、自己同一の意識は統覺作用に伴ふ一種の感情と考へられて居る。此感情が不變なるが故に自己も不變と考へられる、此感情が失はるれば二重人格の如き現象を呈するのである。右の如く考へるならば、我といふのは所謂意識現象の結合點であつて、或人に意識せられるといふことは或一點に結合せられるといふこととなる、意識現象は或人に意識せられるといふことは一つに統一せられて居るといふこととなる。併し此の如き統一といふ語の意味も嚴密にしなければならぬ、意識現象は如何なる意味に於て統一であるか、意識統一とは何を意味するか。意識現象の統一とは物體の原子の如き實質的一者であるとは今日何人も考へないであらう、併し單に意識現象が相互に關係するといふに過ぎぬならば、物

理現象も互に相關係するのである、一つの現象が他の現象に影響を及ぼす所に物理的法則が成立するのである。意識統一とは單なる相互作用以上のものでなければならぬ。精神現象に於ては關係其者が實在的であるのである、精神現象は多にして一、一にして多であると云はれるのは之によるのである。

物體現象は空間、時間の上に於て相働くのであるが、空間、時間は物體現象にあらざることはいふまでもない。嘗て考へられた如く物質はエーテルといふ連續體の渦動であると考へれば、物體現象の背後に於ても一つの連續體が實在すると考へることもできるであらう。併し此の如き統一は實質的一者である、一原子の實在性と同様である。精神現象に於ては、これに反し、要素の實在性と共に、全體の實在性が保たれ得ると考へられる。例へばジュームスの云つた様に、我々が或一つの文章を順序的に意識する時、その一語一語の意識に於て全體の意味が含まれて居ると考へることができる。又ヴントなども意識現象に於ては新なる綜合的意識現象が成立するも要素的意識現象は尙その實在性を維持すると考へて居る。氏が心理的因果律を自然科学的因果律と區別して、創造的綜合となすのは之に由る

のである。如何にして精神現象に於ては綜合的全體が構成的要素に對して實在性を維持することが出来るか。綜合者が被綜合的要素と同列の實在としては自己の實在性を維持すると共に、他に對して綜合的位置を取ると考へることはできない。例へば前に云つたジームスの考にしても、文章自體 *Satz an sich* ともいふべき意味の意識は一語一語の意識に比して一層高次的と考へられねばならぬ。ジームスは根本的經驗論の立場からは *compositum* といふ如き關係語によつて表はさるる意識も經驗であると云ふが、單に意識せらるると云へば同じ様に思はれるかも知らぬが、その意識内容の異なる如く、意識せらるるといふことの意味が異なるらねばならぬ。ブレンターノ學派の所謂作用に於て異なるらねばならぬ。ウントの考にしても氏の所謂精神的要素と表象と、又は表象と聯想や統覺などはその地位を異にするものでなければならぬ。右の如く考へ得るならば、意識現象に於て全體が部分に對して有する實在性は高次的のものであるといふことができる。即ち意識に於ては一層高次的なるものが實在となるといふことができるのである。無論多くの心理學者は此意識を單に強度に於て弱きものと考へるであらう。自覺

せられぬ一種の意識と考へるであらう。併し單に強度に於て弱いといふことは他に對して綜合的地位を取るといふ理由にはならぬ。單に弱き感覺と見るの外はなからう。無意識的意識といふのは單に強度の弱いものではなくして性質的に異なつた意識でなければならぬ。一般の心理學者に承認せられない説ではあるが、余は所謂ヴェルツブルク學派の説の如く、意味の意識は決して不明瞭なる意識ではないと思ふ。無論一般の心理學に於ても、無意識的意識がそれだけとして綜合的地位を取るといふのではなく、無數なる過去の經驗内容を代表するものと考へるのであらうが、如何にして斯く一つの要素が無數なる他の經驗内容を代表することができるか。若し之を聯想の法則に依るといふならば、表象と表象とを結合するミイデイヤムとなるものは何であるか。普通に考へられるごとく之を腦細胞の作用に歸するならば、精神現象に於ては自然現象と異なつた統一が實在であると云はれなくなる。之を表象其者の力に歸するならば、ヘルバルトの表象力學說 *Vorstellung mechanismus* の如きものとならねばならぬ。併しヘルバルトの考へた様に表象がそれ自身の力を有し互に相制 *hemmen* すると考へるならば、此の如き表象

分に比して、一層實在的と考へられねばならぬ。精神現象は此の如き内面的發展なるが故に、其綜合的全體は要素に對して一層高次的なる實在と考へられるのである。否要素よりも全體が實在的と考へられるのである。意識現象は誰かに意識せられて居る、誰かの意識でなければならぬといふのは之に由るのである。ゲンツが意識現象を出來事と見做し、意志を以て精神現象の根本的形式と考へるのも、同一の理由によると考へることができる。物體現象に於ては、その統一者は現象の背後に即ち經驗の外にあると考へられる、これその間接經驗と考へられる所以である。之に反し、精神現象に於ては、統一作用其者が經驗に現はれるのである、思惟の對象自身が經驗の内に働くのである、精神現象に於て對象が内在的と考へられるのは之によるのである。精神現象は恐らく價值關係といふものを離れて考へることはできぬ、精神現象に於ては規範が直に動因となる、精神現象を單に自然科學的法則によつて考へるのはその本質を否定するものである。嘗に永久真理の法則が直に充足理由となるのみならず、作用が作用自身を維持し、外に本體論的統一を要しないのである。例へば數學的證明の過程に於て一つの命題より他の

命題に移る時、他の力の助をかる必要はない、それ自身に十分なる内面的必然によつて推移するのである。勿論可能的なるものが實在的となるには何物かが加はらねばなるまい、實在的作用の説明には矛盾律の外に充足理由の原理 *la principe de la raison suffisante* を必要とすると云ひ得るであらう。併し兎に角精神現象に於ては可能的なるものの中に直に充足理由をふくむと考へられねばならぬ。意識現象は或人に意識せられて居ねばならぬといふ、或人とは此の如き作用の統一者でなければならぬ。我々の眞の自己とは理想と現實との結合點である、ライブニッツのいふ如き永久真理と充足原理との結合點である。ライブニッツのモナドは此の如き意味に於て眞に精神現象の根本的方式である。我々が意識現象を内面的とか直接とか考へるのも此性質によるのである、作用其者の中に作用の原因を寓すること、此現象をして内面的とか直接とか考へしむるのである。此の如き内面的推移の少しにても斷絶せる所には、意識は兩斷して二つの意識と考へられるのである。

精神現象は内面的必然によつて推移する作用の現象であるといふには、多くの

反對を考へることができらう。思惟作用に於ては、或は右の如く考へ得るかも知れぬが、我々の精神現象の推移は必ずしも内面的必然によつてのみ推移するものとは考へられない。我々の精神現象の推移には多くの偶然性があると考へることができ、而して此等の現象が或人に意識せらるるといふことによつて統一せられて居るのである。我々が或物を見、次に之と全く關係のない他の事を考へた場合にも、此等の出来事は「私の意識」によつて統一せられて居るのである。斯く云ひ得るならば、意識とは意識内容に附加せらるる何等かの性質であるとも考へられる。例へば光に照らさるることによつて種々の色が明となる如く、意識は種々の内容を照らす光の如きものとも考へられるのである。併し右の如き意味に於て意識せられたものと然らざるものとを區別するのは如何なる性質によるのであらうか。意識は往々説明のできない單なる感覺の如きものと考へられるかも知れぬが、我々は感覺作用を意識することもできれば思惟作用を意識することもできる、否、感覺も意識であれば思惟も意識である。此等の作用がすべて意識であるといふならば意識といふのは此等の現象に共通なる性質でなければならぬ。

而して此等の作用に共通なる性質はそれぞれの立場に於ての内面的必然の推移といふことである。然るに之にも拘はらず此等の作用の背後に於ける偶然的統一が一つの意識として考へられるのは意志の作用によるのである。意志に於ては互に偶然的なる内容が内面的必然を以て結合せられるのである。意志は偶然的なるものの必然的統一である。此場合にも意識は内面的必然の推移であるといふ考を改める必要はない。我々が互に偶然的と思はれる作用を統一して「私の意識」と考へるのは意志作用の内面的統一に依るのである。一より他に移る時、偶然と考へられるのは立場が異なるが故である。如何にして偶然的なるものが必然的に結合し得るか、偶然的なるものの必然的統一とは矛盾ではなからうかといふ疑問も起るであらうが、意志的統一の必然は道德的當爲の必然である。道德的規範が充足理由の原理として働く所に意識現象の根本的事實がある、他の意識現象も此姿を映したものと考へることができ、此事實が我々には意志自由の確信として現れて來るのである。斯く可能より直に現實に移る自由の作用を除去すれば感覺は物質的性質となり、思惟は單に永久の真理となるのである。

意識を右の如く解するならば、意識せられなかつたものが或人に意識せられるとは如何なることを意味するかを考へて見よう。現今の純論理派の主張に従へば、意味とか存在とかいふものは全然我々の主観的作用を超越して、或主観者が之を意識すると否とは意味自身、存在自身に何等の關係もないと考へねばならぬ。併し一方から考へて見れば、かく客観的といはれるものも我々の思惟の對象である。無論此等の對象と思惟の作用とは別物であると言ひ得るでもあらうが、此等の對象との關係を離れて思惟作用といふものを考へることができらうか。前に云つた如く要素的感覚の單なる結合は思惟作用となることはできぬ、時間、空間を超越した意味が統一作用として働くこと考へることに由つてのみ、思惟作用なるものを理解することができるのである。純客観的なる意味とか存在とかいふものと思惟作用とは全然離して考へることはできぬ。意識せられなかつた純客観的の意味とか實在とかいふものが意識せられるといふことは、此等のものが思惟作用として我々の意識内に働くといふことである。主観的には我々が思惟作用に移り行くことである。感覺的經驗によつて外界を知ると考へるときその實

我々は感覺の作用から思惟の作用に移り行くのである。現今の新カント學派の考へる様に、感覺とか事實とかといふことがすでに思惟の所作と考へねばならぬならば、我々の意識の根柢には感覺以上の或物を認めねばならぬ。心理學者が具體的なる意識現象は單なる知識ではなくして、知情意の三方面を具すると云ふのも之によるのである。斯くして我等の意識の眞の起源は所謂自然科學的因果關係よりも一層深き所に求めねばならぬ。意識の起源には所謂物體の世界があるのではなく、意味の世界、可能の世界があるのである。意識現象は意味の因果律によつて起るのである。若し此の如き因果の形式を意志的因果律と云ひ得るならば、意識は意志的因果律によつて起ると云ひ得るでもあらう。意識は感覺の形に於て始まるのではなく、意志の形に於て始まるのである。意識の起源には可能より現實への直接の推移がなければならぬ。ライブニッツの神に於ての様に、可能的なるものが直に實在的でなければならぬ。充足理由の原理は之を現はすものと考へることもできる。勿論此の如き考を認むるには種々の困難もあるであらうが、我々が赤の感覺を意識するには色の世界がなければならぬ。色の理念が働かね

ばならぬ。色の感覺の背後にはエーテルの波動の世界があるのではなく、色の本質の世界があるのである。所謂自然科学的存在の世界は意識の世界に比して第二次的である。我々が存在の世界を知るといふことと意味の世界を知るといふことはその意義を異にして居なければならぬ。後者は意識の根柢となり前者は却つて其上に建てられるのである。意識の眞の起源を右の如く考へるならば意識せられなかつたものが意識せられるとは何を意味するか、意識作用と意識對象との間に如何なる關係があるか。現今の純論理派の言の如くならば、對象と作用との結び付き様はないのであるが、此の如き分析の前に綜合がなければならぬ。意識の直接の背後は無限なる可能の世界である、ライブニッツの極微知覺 *Perceptiones* も此の如き可能の世界を意味して居らねばならぬ。可能と實在とを分つのは意識せられた世界に於てである、意識界に於ては可能は直に實在でなければならぬ。我々の意識は意志として無限なる可能の世界に連なつて居る、モナドが極微知覺に於て宇宙を知るといふ如くに、我々は意志に於てすべての可能界を知ると考へることもできるのである。意志は意識の具體的基礎である、意識は意

志の基礎に於てのみ可能である、意志は意識の極限點である。意志に於て主客合一し、意識は眞實在たる物自體に接觸するのである。例へば我々が一直線を意識するとせよ、極限點とは我々の分析によつて達することのできない超感覺的なる思惟對象である、而も我々が一直線とか運動とかいふものを意識するのである。此場合、一々の點が極限點として意識せられねばならぬ、一々の點に於て理想と現實とが相接觸して居らねばならぬ、一々の點の意識は意志でなければならぬ。勿論純論理派の考の様に連続といふ如きものは純なる思惟對象としてそれ自身に獨立し、思惟作用として意識せられると否とは對象自身に何等の關係もないと考へることもできる。永久眞理の中には充足原理を含んで居らぬ、永久の眞理が實在的となるにはライブニッツが *"Da rerum originatione radicali"* に於て云つて居る様に *"including reason"* が加つて來なければならぬ (*rationes non necessitant, sed inclinant, Gerh. VII. 302.*)。永久の眞理と永久の眞理との結合は余の考では知識のアブリオリとアブリオリとの結合であつて、そこに限定があり、實在がある、實在は此意味に於ての *compossible* である。純論理派の如き考へ方では、此の如き結合にはライブニッツの充足理由の

原理の如きものが外から加つて來なければならぬと考へるのであるが、ライブニッツが「Monadologie. 44.」に於て云つて居る様に、永久の真理の中に於て何等かの實在性があるならば或存在(quelque chose d'Existant et d'Actue)に於てその基礎を有せねばならぬ。固より之を自然科学的存在の意味に解するならば大なる誤謬に陥るのであるが、或一つの真理が真理として己自身を維持するには、或一種の力を有たねばならぬ、而して斯く一つの真理が他に對して己自身を維持するには、即ち一種の實在性を有するといふには之を他と關係せしめるものがなければならぬ。我々は真理の力を認めると共に真理の體系を維持する一種の主體 *subjectum* を認めねばならぬ。或一つの命題が真理として立せられるには、すべての命題の主語として如何なる意味に於ても述語とならない主體がなければならぬ。此意味に於て真理はそれ自身に於て立つ生きた一つの個體である。すべての命題の眞の主語を「Reality」と考へねばならぬといふのも之によるのである(Leibniz)。ライブニッツにては永久真理の原理と、充足理由の原理との内面的關係が明でないが、種々なる真理のアブリオリを結合するものは意志のアブリオリである、換言すれば種々なる

作用を結合するものは意志の作用である。意志のアブリオリの上に於て他のアブリオリは成立つ、永久真理に實在性を與ふるものは充足理由の原理である。*con possibile* は單に *possible* の無限なる和ではなくして、可能をして可能たらしめる基礎でなければならぬ。ライブニッツがスピノーザに逢つた時、最も完全なるは存在す、*Quod ens perfectissimum existit* と論じて無限なる性質は一主體に結合することが出来る、何となれば二つのものが *incomparable* といふには二つのものを分けて見なければならぬ、然るに此の如き性質は分つことができぬと云つたといふが、此の如き主體は絶対無限の意志でなければならぬ。

以上論じた如く意識作用とは意味から意味への内面的推移である、意味の内面的推移といふのは意味其者が一つの力として他の意味を惹き起すのである。意味はすべて實現せらるべき傾向を有つて居る、即ち意識せらるべき傾向を有つて居る、之なければ意味は意味自身を保つことはできない。此の如き傾向が我々の所謂精神作用といはれるものである。併し意味が他の意味を惹き起すといふこと即ち意味の内面的推移といふことは無限なる意味が一つの主體に統一されて

居ることを意味せねばならぬ。限定されたる或一つの意味から他の意味が出て来ることはできない、或一つの意味が限定されるにはその背後に他の限定の可能を含んで居る、即ち一層具體的なる基礎に於て限定せられるのである、*ob+ject*の上 に於て限定せられるのである。此の如き可能界の主體の上に立つといふことが意味自身が力を有することであつて、内面的推移といふのは此の如き基礎に於て含蓄的であつたものが顯現的となるのである。意味は此の如くして内面的に推移するのである、これが意味の働く方式である。意識現象に於ては統一作用が實在的であるといふのは之によるのである。意識せられたものと意識せられな いものとの區別は *actual* と *possible* との區別となる、而して現實は *compossible* である。我々は極微知覺に於てはすべてを意識するといふこともできる。我々が一つの直線を意識した時、極微知覺に於て無限なる分析の可能を含んで居ると考へることができる。我々の現實の自我は何時でも可能界の主體たる先驗的自我に連なつて居るのである。所謂意識の闕の如き考によつて無意識から離された意識は考へられた意識である。具體的意識はライブニッツが現在が過去を負ひ未來を孕

むといふ様に (*en consequence de ces petites perceptions le present est gros de l'avenir et chargé du passé, que tout est conspirant*) 無意識の部分を含んで居なければならぬ。意識の中に無意識を含むのが内面的推移である、我々が意識と無意識とを區別するのは兩者統一の立場に依るのである。併し *possible* と *compossible* とは單なる程度の差ではない、後者は前者の單なる總和ではない、之には *inclining reason* が加はらねばならぬ。單に思惟對象たる意味と作用として働きつゝある意味とは區別しなければならぬ、現に動きつゝある意味と然らざるものとを區別しなければならぬ。意識現象に於て直覺が根本的と考へられるのは之に由るのである。多くの心理學者が感覺を意識の根本作用と考へるのも此故である。思惟にてもその全體が先づ直覺的に現れ来るのである。此の如き直覺は内面的推移の根柢たる具體的全體即ち *ob+ject* を表はすものである、意味が意志の支配の下に来ることを示すものである、永久の眞理と充足理由の原理との結合を示すものである。意志作用の原理たる充足理由の原理が意識の根本的原理でなければならぬ、之によつて有限の中に無限を含み、意識の中に無意識を藏し、作用から作用に移ることができるので

ある。

余が今一種の色を経験する、否そこに一種の色の経験がある、之を「私の経験」であると考へる時、此経験は主観的と考へられざるを得ない。併しこゝに一種の色の経験が現存するといふことは單に主観の力によるのではない、我々は又是に於て外界に光線なるものを想像せざるを得ない。加之、色を單に主観的と見るも其性質は多くの主観に共通と考へられねばならぬ、即ちフッサールの本質 *Wesen* といふ如きものが考へられねばならない。色の経験は主観的といふも、色の経験の存在及變化に對して所謂自己は何等の力を有するのではない。経験それ自身が一種の客観性を有つて居る、物理的現象といふも此變化を離れてない。我々は此等の経験の變化を時間、空間、因果の範疇に當嵌めて自然界を構成するのである。眞に與へられたる直接の経験其者は意味其者の内面的發展である、客観の中に主観を含み主観の中に客観を含む *Tatsachung* である。此意味に於て精神現象は物理現象に比して一層直接であり具體的であると云へる。物理界といふのも主観を離れたものではなく、カントの所謂先驗的自我の統一によつて成る一つの意識對象

界と考へることとできる。所謂自然界といふのは一般的ではあるが抽象的なる認識主観の統一によつて成立せるものであつて、意識現象といふのは此立場から翻つて具體的なる直接の経験を見たものである。或一つのアプリアオリの上に立つ對象界から、翻つてアプリアオリを對象とする意志の世界を見たものである、或一種の價値の上に立つ客観界から翻つて價値即實在の世界、意味即事實の世界を見たものである。此處には目的論的原因と道德的必然とが支配するのである。此の如き方向を逐うて自然界から具體的體驗の世界に至る順序は、物力の世界から生命の世界に至り、生物の世界から意識の世界に至り、意識の世界から歴史の世界に至り、更に時空を超越して絶對意志の對象界に入るのである。心理學者の所謂意識界とは絶對意志の對象界と自然科学的世界との接觸點である。

純粹直観の世界は全然客観的でもなければ全然主観的でもない、即ち全然物體界でもなければ全然精神界でもない、それ自身に動的なる具體的経験はおのづから主観、客観の両面を備へて居る。我々は経験内容に就て區別することができただけ、それだけ種々の對象界を有すると共に、種々の精神作用を有するのである。

思惟内容と感覺内容を分つことに由つて、一方に命題自體と表象自體との對象界ができるとともに、一方に思惟とか感覺とかいふ作用が考へられねばならぬ。作用といふのは種々なる經驗内容をその結合點から見たものである。併し斯く種々のアプリアオリの上に立つ經驗を作用として、此等の作用を結合する一層根本的な經驗も亦一つの具體的經驗として主觀客觀の兩方面を有つのであるから、その對象界はおのづから二重となり、直接には意識界即ち人格的歴史の世界となり、間接には自然界となり、而して自由の意志がその主觀的作用となるのである。何となれば意識界は既に作用の結合として自然界に對しては主觀的であるが、更に絶對自由の意志の立場から見れば客觀的である、絶對自由の意志は人格と人格との結合點である。此の如き絶對自由の意志の對象界が我々の所謂直接の實在界である。ライブニッツのモナッドの世界とは此の如きものと見得るであらう。意志の立場から見ると、所謂作用の結合に無限の仕方がある、無限のモナッドがあると考へらるるは之によるのである。此の如き作用の結合の仕方の無限なるが如く、そこに無限のモナッドがなければならぬ。ライブニッツはモナッドは皆同一の世界であ

るが、其見方 (*différents points de vue*) によつて互に異なるといふ (*Monadologie*, 57.) 例へば一つの圓の射影が無限なる圓錐曲線の變化を起す如きものであると云つて居る (*Theodicee*, 357.)。作用の種類は同じいとしても之を結合する仕方に無限あると考へることができ、即ち意志は自由である。無限なる意志の *type* は無限なるモナッドの見方として、之によつて無限のモナッド、無限の實在界が成立つのである。(ライブニッツのモナッドは余の所謂意志の對象界の實在である、余はかゝる考から、タルドの "*Monadologie et Sociologie*" 中にある *toute chose est une société, toute phénomène est un fait social* といふ考に興味を有するのである。) 我々が或物を意志するといふのは一つのアプリアオリの上に於てするのである、即ち一つの作用に於てするのであるが、作用の束たる一人格の意志としては、他の無限なる作用との關係に於て立つ、即ち極微知覺として他の無限の作用と關係するのである。

以上論じた如き譯であるから、物體現象の特徴を延長とすれば即ち所謂空間的であるとするれば、之に對して精神現象の特徴を意味即作用たる自足的發展と考へることができるのであらう。物體現象の空間的といふに對して精神現象は單に

時間的と云はれるのであるが、時間といふも單に無意義の連續といふ如き形式はヘルグソンの所謂同質的時 *le temps homogène* であつて、之を以て精神現象を物體現象から區別することはできぬ。眞に具體的な時間とは自足的發展でなければならぬ。種々なる經驗の變化及び相互の關係の物理的解釋は言ふまでもなく、マイノングの對象論 *Gegenstandslehre* の如きものも、單に對象間の客觀的關係と見られるであらう、意識現象は此等の經驗内容の共立關係 *compossible relation* でなければならぬ。此意味に於て意識現象は實在的であり、心理學は實在の學である。而して此の如き共立關係を現すものは意識の統一 *unity of consciousness* である。意識現象は意識の統一に於て成立つ、少くとも統一の可能的傾向を有して居らねばならぬ。或經驗が意識現象と見做されるのは此傾向を有することに依るのである。純なる一つのアプリアオリの上に立つものは單なる對象界である、他の意味との結合に於て意識現象となるのである。(心理學者が意識は誰かの意識でなければならぬとか、意識に於ては對象が内在的であるとかいふのは、之を意味するのである)。心理的法則といふのは右の如き約束の下に於ける意味の關係の法則でなければならぬ。

らぬ。此の如き意識統一も身體といふ物體的條件の下に立つといふのが普通の考へ方であるが、我々は却つて意識の方が一層根本的な實在と考へねばならぬのである。無論右の如き統一は恰も極限點の如く到達することのできない點であらうが、之なくして意識の成立はできない、意識成立の *simpliciter* である。向に云つた如く意識の根本的形式が意志と考へられ又直覺的と考へられるは之に由るのである。

余は純粹心理學ともいふべきものは右に述べた如き立場の上に立つものでなければならぬと思ふ。此點に於て心理學は自然科学とその立場を異にして居ると云ひ得る。無論此の如きことは心理學者は疾くに之を知ると云ふでもあらうが、今日の心理學はその説明に於て十分その立場を明にして居らぬではなからうか。例へば聯想と統覺との區別を統一的表象の明瞭と不明瞭とによつて考へる如きも、嚴密に考へれば精神現象を外から見たものであつて、眞に意識現象としての内面的區別が考へられて居らぬと思ふ。精神作用の區別の如き却つてブレンターノやマイノングなどの考へ方が純心理的といふべきではなからうか。情緒

の説明の如きも所謂實驗的研究といはれるものよりも、スピノーザのエチカに於ける情緒の説明の如きものが却つて眞に意識としての情緒の本質に觸れて居るのではなからうか。徒らに經驗といひ事實といふも、すべての實在の經驗とか事實とかいふことが同一意義に於て論じ得るや否やは深く考へて見なければならぬ。併し余は決して現今の實驗心理學の價值に就て異議を挾むのではない、唯、現今の實驗心理學を以て唯一の心理學となすことに對して尙多くの疑を存し、且つ今日の心理學に於ける立場の混淆に就て嚴密なる批評を要すると思ふのである。

感 覺

精神現象は通常縦に知情意と分ち、横に精神的要素と其結合とに區別する様である。其結合には直覺的なるものと意識的なるものとを區別することができ、例へばゾントの精神的化合物と聯想及統覺との區別の如きものである。縦の區別は精神現象の性質的區別といふべく、横の區別はその單複の程度的區別といふべきである。横の區別に於て從來の心理學では精神現象の意味内容に對する價值的見方を混へたと思はれるが、現今の實驗心理學では全く自然科学者が自然現象に對すると同一の態度を以て精神現象に對しようとする。従つて心理學的研究に於ては一切の價值的見方や概念の實體化的傾向を去らねばならぬ。ゾントが主知主義の心理學を排斥するもの之に由るのである。氏に従へば、聯想心理學もヘルバルトの「表象力學」も要するに表象の實體化を免れないが、氏の所謂主意主義の心理學は精神現象を何處までもその具體的狀態に於て見ると云ふのである。

氏の精神現象の區別も此見方に基けるものであらう。併し精神現象の本質を形成すると思はれる意味的關係を棄てて精神現象の深い理解ができるものであらうか。精神現象の深い理解は内省的考察に依らねばなるまい、精神現象の分類に於ても斯く云ひ得るであらうと思ふ。

精神的要素 *psychische Elemente* とは如何なるものであるか。ヴントの云ふ所によれば一つの要素 *a* が第一の場合に於て *b*、*c*、*d* と共存し、第二の場合に於て *b*、*c* と共存するならば、*a* なる要素を獨立と考へることができる。例へば一つの音が或時は或方向に、又或時は他の方向に聞かれ、又或時は或音と共に、或時は他の音と共に聞かれた場合、此音を抽象して一つの要素と考へることができるといふのである。精神的要素とは此の如き分析を何處までも進めて得たる結果である。此の如き分析の仕方は化學者が化合物を分析すると何等の變もない様であるが、精神的要素とは物質的要素の如く獨立せる實體ではない、或人の意味として、即ち „*einem Bewusst*” としてその實在性を有するのである。單に經驗内容を區別するといふのみでは、その區別せられた經驗内容を客觀的と考へることもできれば、主

觀的と考へることもできる。區別せられた一種の音が時と場所との關係を離れ、單に他の音に對して己自身の性質を維持する點に於て一種の客觀的存在と考へることもできる。今日の物理學では音を空氣の振動と考へるのであるが、空氣の振動といふのも、要するに右の如き考へ方によつて經驗内容を客觀化したものに過ぎない。或一つの表象的經驗に就ても、ホルツァーノ學徒の考の様に三つのものを區別しなければならぬ。即ち主觀的作用としての表象、表象自體、及び之に對する客觀的存在といふ如きものを區別することができる。獨立として區別せられた一種の經驗内容が感覺として精神的要素と考へられるのは、或個人の意識として意識統一に屬するものとしてでなければならぬ。或經驗内容が一つの意識中心に屬するといふのは如何なることを意味して居るであらうか。意識せられるといふことは意味が直接に働くといふことである、意味と意味との關係が直に實在的となるといふことである、意識作用とは *substanzlose Tatkraft* 即ち本體なき働きである。我々が内界經驗といふのは此の如き統一の範圍を指すに過ぎない。經驗内容の變化が内面的必然の理由によらずして、少しでも外から動かされたとき考

へられる時、もはや精神現象ではなくして、物體現象と考へられねばならぬ。青い色が赤い色に變化した場合、我々は之を青いものが赤いものに變つたと云へば物體現象となるが、斯く考へられる前に色は色自身に依つて互に區別せられねばならぬ、これが意識現象である。物體現象に於ては、性質は隠れた本體の性質として實在性を有するのであるが、意識現象に於ては性質其者が實在性を有するのである、意識は主體なき實在である。ブレンターノがスコラ學者に倣うて、精神現象の特徴を *die intentionale Inexistenz eines Gegenstandes* 即ち *immanente Gegenständlichkeit* となすのも同様の意義である。この對象といふのは外界の實在であつてはならぬ、外界の實在が精神内に入り様はない、要するに意味である、經驗内容を意味するのである。對象の内在とか内在的對象性とかいふことは、要するに意味が働くといふことに外ならない、意味が内にあるとか外にあるとかいふのではない、意味が生きて居ると云ふことである。意味がそれ自身で實在となるのが意識現象である、或人に意識さるといふのは此の如き意味の共存的關係 *compossible relation* に入込むことに過ぎない、或人とは此の如き關係の中心である。

我々の直接經驗に於ては、一々の經驗内容が實在であり力である。例へば一種の線とか色とか云つても、藝術家の眼には直線はその各點に於て *eine Durchdringung der Geraden und der Kurve* であり、すべての色は *eine Tendenz nach Weiss und Schwarz* を含んで居る、加之一々の線や色はそれ自身に固有なる感情を有つて居るのである。直接の經驗に於てはその一々の點が意味の共存的關係 *compossible relation* に於て立つのである。此故に多くの人々の云ふ如く意識現象が直接の具體的經驗である、一々の内容が即作用となり、主體なき働きなるが故に、意識現象は内界經驗である。意識現象を右の如きものとして、これを分析して意識的要素を得ようとするには、何處までも右の如き立場を守らねばならぬ。赤とか青とかいふものが或物の性質としてでなく、それ自身に於て實在性を有するものとして見られねばならぬ。此處に物理的分析と心理的分析との區別がある。物理的分析に於ては赤いもの、青いもの、鳴るもの、響くものとして之を實質的に分つのである、所謂分割 *partition* である。心理的分析は之に反し、此等の性質其者を實在として之を區別するのである。心理現象は本體なき性質、働くものなき働きである。物體の原子は空間に於

ける不可入性 *Undurchdringlichkeit* に於てその實在性を維持するが、精神的要素は區別性 *Unterscheidbarkeit* によつてその實在性を維持すると考へられるのも之に由るのである。物質的要素の獨立を維持する爲め空間的關係といふものが考へられるその相互の變化を説明するため物力といふ如きものが考へられる如く、精神的要素の成立する舞臺として意識といふものが考へられ、その相互の關係を説明するため種々の意識作用が考へられるのである。區別性 *Unterscheidbarkeit* も意識の一作用と考へられるのであるが、經驗内容がそれ自身によつて互に相分つことが直にその區別性である。 *Unterscheidbarkeit* とは内容自身が力を有つことである。かかる場合、之を *Substantialitätsbegriff* によつて、赤いものと青いものとかいふ様に考へるから、此の如き本體と現象と互に相分離し、之を統一するため、空間といふ如き外面的形式が考へられると共に、外面的作用たる物力といふものが考へられるのである。之に反し、*Aktualitätsbegriff* によつて内容其者を實在と考へることから、或人の意識といふ如き内面的關係の形式を生じ、意識作用といふ如きものが考へられるのである。精神現象と物體現象との分れるのは經驗内容を *Substantialitätsbegriff* に

よつて考へるか、*Aktualitätsbegriff* によつて考へるかに由るのである。一つは經驗内容の背後に之を考へることによつて統一し、一つは統一を經驗内容其者の中に求めるのである、即ち内もなく外もなくゲーテの云つた如く *beides mit einem Male* である。我々が意識作用として考へるものは現實概念の種々なる範疇である、識別作用といふのも其一に外ならない。

Substantialitätsbegriff と *Aktualitätsbegriff* との關係は根本的には之を「甲は甲である」といふ自同律の體驗に於て求めることができる。考へられた「甲」が實體概念の基となるのであるが、此の如き思惟對象は判斷作用の體驗と離れて考へることはできない、後者の體驗が *Aktualitätsbegriff* の基となるのである。後者に於ては一即多であつて、内容其者がそれ自身に於て變化するのである、即ち一層具體的な實在の形式を取るのである。識別作用とは經驗内容其者の此の如き内面的發展である。カントは、*Analogien der Erfahrung* に於て、*Grundsatz der Substanz* より *Grundsatz der Kausalität* に行き、更に後者より *Grundsatz der Gemeinschaft* に至つて居るが、ヘーゲルの論理に於て示唆せらるる如く、*Gemeinschaft* 即ち *Wechselwirkung* の極は内面的必然の因果律即

ち意味の實在に達せねばならぬと思ふ。ロツェが相互作用を實在の形式と考へることから、遂に精神現象を實在となす唯心論に達せざるを得なかつたのも、同一の理由に基くのである。此故に精神現象に於てはいつでも統一が實在であり、全體が實在であるのである。

物體現象と精神現象との區別を右の如く考へ、前者は實體概念に依つて現象の背後に隠れたる或物を考へるといふことは多少誤解を受けるかも知れない。今日の物理學者は現象の背後に不可知なる何物をも考へない、因果關係といふものは現象と現象との間に於ける函數的關係に過ぎないと云ふでもあらう。余も勿論之を知らないのではないが、爲に精神現象も物體現象も同一性質の函數的關係によつて考へ得ると思ふならば、それは却つて誤であらう。物理學に於ける如き函數的關係の考へられるには先づ經驗内容が量化せられねばならぬ。量的に考へるといふのは之を外から統一することである、經驗内容を純粹思惟の對象と變ずることである、經驗内容を離れて見ることである。内容を離れるといふことは之を無視するといふのではないが、内容の變化を他の語によつて言表す

のである。勿論自然科学的知識は必ずしも數學的なるを要しない、單に經驗的法則 empirical laws の程度にあるものも多い。併しこの場合に於ても、我々は之を單に經驗内容の性質的變化の法則とは考へない、或性質を有つた物と物との關係と考へるのである。精神現象に於ては之に反しその變化は全く内容其者の變化でなければならぬ、従つて純粹に性質的と考へられるのである。經驗内容を對象化して「赤いもの」と云へば内容は物の性質となり、赤の感覺と云へば性質其者が實在的となるのである。併し嚴密に云へば意識現象が性質的であるといふのは尙實體概念の考へ方を脱して居ない、意識現象とは經驗内容の純なる動的状態である。或一つの經驗内容が他の束縛を脱してそれ自身の自由に還つた時即ち自覺した時、それが精神現象であるのである。或は精神現象も之を反省して見た時、既に我が認識對象の世界に屬し、他の自然現象と何等の區別もないと考へる人もあるのであらう。併し余は内容を物の性質として考へると内容自身を實在として考へるとは、その間に相違があると思ふ。無論以上の如く論ずるものの、意識現象を意味の實在として物體現象から區別すると共に、之を單に意味といふ如きも

のと區別しなければならぬ。我々の感覺とか思惟とかいふものと表象自體とか命題自體とかいふものとは同一ではない。精神現象は一種の實在である、單なる内容ではなくして働く内容である。精神現象の心理的分析と意味の分析とはその性質を異にすることは云ふまでもない。

二

普通には感官に依つて種々の感覺を區別するかの様に思はれるが、感官が精神現象の區別の基となるのではない。心理學者は嚴密に經驗内容其者の性質によつて精神現象を區別しなければならぬ。色と音とは其眼によると耳によるとに關せず、經驗内容其者の性質に於て全然相異なつて居るのである。心理學者は嚴密に右の如き立場を守つて、我々の經驗内容を分析し所謂精神的要素に達するのである。斯くして今日の心理學に於て、先づ光覺、音覺、香覺、味覺、壓覺などに大別し、更に一々の感覺に就て精細なる區別を立てるのである。光覺の如きに至ては其數三萬五千を下らぬと考へられる (Titeloner)。此等の區別は何處までも經驗内容

其者として考へられたのであつて、外界刺戟の性質によつて考へられたのではない。例へば灰色は白と黒との混合であり、董や紫は赤と青との混合であるかの様に考へられるが、嚴密なる心理學の立場に於ては、かかる考を許すことはできぬ。灰色は白や黒と同じく單一なる感覺である、橙黄や紫は赤や黄と同じく單一なる感覺でなければならぬ。唯、白と黒といふ如き著しき對立をなすものが *Orientio-
punkt*として擇ばれるまでである。ツントのいふ如く一々が性質的單位 *qualitative Einheit* でなければならぬ。その背後に何等かの外界的統一を考へれば、もはや精神現象ではなくなるのである。

併し單に性質的單位といふのみにては所謂表象自體の如きものと區別することはできない。精神現象の本質は内容其者が働くにあるのである。即ち内容其者が力を有するにあるのである。余はフエヒネルの感覺的識別 *sensibile d'scrimination* の如きものが單一なる内容其者の働く形式であると思ふ。物體現象の要素たる原子間に於て物力的關係を考へる如く、精神現象の要素たる性質的單位は互に識別的關係に於て立つと考へねばならぬ、單なる性質的單位ではなくして一々が

funktionelle Einheiten でなければならぬ。内容其者が内容其者として純粹にそれ自身から働くのが識別作用である。精神要素とは識別力を有つた表象自體である。(ヘルバルトのシャールレンとは此の如きものを本體として考へたものであらう)。キュルペの云ふ如く、識別は内容の外に立つ比較の能力ではない。唯 "We have different experiences and experience them differently" といふことである。我々が同一の經驗内容から出立して一方に物體界を構成すると共に、一方に精神界なるものを構成するのであるが、其第一歩は識別の範疇である。識別は内面的作用の最初の階級である。感覺と識別とは離すことのできない概念である。我々の精神が感覺に於て物體と接すると考へられるのは、それが一方に於て物體界の構成に向ふに反し、一方に於て精神界の構成に向ふ出立點なるが故である。勿論感覺的識別に於ては内容は尙 *Aussereinander* の状態に於てある、ヘーゲルの語を以て云へば統一が消極的である。併し物體現象に於ては内容は全く無力であるが、感覺としての内容は内容其者が力を有つて居るのである、即ちそれ自身の中に統一の可能性を有つて居るのである。ライブニッツがすべての表象が *complex* であるといふのは此故であ

る、小知覺に於てはすべてを含むと云つてよいのである。我々は直接の經驗に就て種々の内容的本質 *Wesen* を區別し、一方に之を對象化して物の性質と考へると共に、一方に之をその原形のままに感覺と見るのである。動的靜靜的動なる具體的經驗はいづれの點に於ても此兩方面を有つて居る、甲は甲である」と云ふ自律的判斷に就て見ても、その「主語甲」と「述語甲」との對立の状態が識別の状態であり、かく見られたものが意識内容即ち感覺である、之に反し「同一的甲」は物である。

表象自體は直に精神的要素ではない、感覺とは表象自體がそれ自身の中に識別力を有つたものである。單なる表象自體の研究はマイノングの所謂 *Sowien* の學即ち對象論となるであらう。心理學は内容を識別的關係に於て見たものでなければならぬ。此意味に於て心理學は作用の學である。此の如き識別作用を影響するものは心理學に於て感覺論の研究對象となる。例へばキュルペのあげた (1) *attention* (2) *expectation and habituation* (3) *practice and fatigue* の如きものである。若しマイノングが "Bemerkungen über die Farbenköpfer mit das Mischungsgesetz" に於て云つた様に、意識の中にも先驗的部分があり、色の先驗學といふ如きものが成立し得ると

するならば、色其者の性質的關係の研究は心理學ではない。心理學の問題とは色の性質を何處まで識別し得るかとか、此識別を如何なる原因が如何に影響するかといふ如きものでなければならぬ。恰も幾何學は純粹直觀の學として心理學と全くその基礎を異にするものであるが、種々の線や形の意識の問題が心理學に於て論せられるのと同様である。勿論幾何學と同一の程度に於て色の先驗學といふ如きものの成立することは不可能であらうが、アブリオリといふのはプラトールのイデヤの如く經驗の構成力であるとするれば、色の經驗の根柢にも此の如き一種のイデヤを認めることもできるであらう。少くとも色自體と色の意識とを區別して考へることができ。若し右の如く考へるならば、純粹の心理學的研究對象とは如何なるものとなるであらうか。前に挙げた感覺を支配する三條件の如きは生理的心理學の研究を進むれば、生理的原因に還元せられてしまふかも知れない。所謂心理學的研究は一方にマインツの對象論の如きものに進むと共に、一方には生理學の如きものに還元せられると考へることもできる。感覺的識別の背後には一方に判斷といふ如きものを考へることができると共に、一方には自然

科學的因果を考へることができ。識別とは此兩者の接觸點である。意識の領域は對象或は本質が何處まで存在と結合するかによつて定まる、我々の光覺に三萬五千あるといふのは此程度を示したものと異なる。勿論此の如き意識作用の範圍が生理的條件によつて限定せられ、其變化が生理作用によつて支配せられると考へるならば、意識は全く身體の附屬物としてそれ自身の實在性を失ふこととなるのであるが、内容それ自身が力たる意識の内面的因果は所謂物理的因果よりも根本的である。ライプニッツ以來唯心論者の考へた如く意識の統一の上に物體界が成立つ、内面的因果の上に外面的因果が成立つ、内面的因果の底は我々の理智の錘の達することのできない深みである、*durée pure, durée interne*である。或は此經驗を反省し分析すれば、*フッサールの本質的關係*といふ如きものに還元することができると云ふでもあらう。併し *real* は *ideal* の單なる和ではない、*conpossible* は *sum of possible* に或物が加はらねばならぬ、而して此處に加はるべき物は我々が人格的といふ語によつて理解する或物である。余が嘗て云つた如く人格とはアブリオリの結合である、可能なるものの共立的關係である。認識對象となることのできない、

限定することのできない人格的或物は或は無内容なる概念とも考へられるであらう。認識対象となり得るものは盡く所謂本質的關係の中に入り、然らざるものは認識することはできない、意識の因果に就ては何等の豫期を有つことはできぬ、此缺陷を充すため生理的因果が考へられるのである。併し物體現象を統一する自然科学的因果關係も之を分析すれば本質的關係に還元せられ、物とか力とかいふのはその背後に考へられた不可知的或物である。我々は二様の共立的關係を考へることが出来る。一つは人格的統一の上に於ける共立的關係であつて、一つは物體的統一の上に於ける共立的關係である。併し後者は前者を假定して其上に立つ、後者は思惟作用と名づけられる一主觀的作用の對象界に過ぎない。我々の意識界といふのは之に反し一層具體的なる見方の對象界である。意識統一は無内容と考へられるのであるが、我々は對象を意識すると共に之を意識すること意識するのである、此點に於て意識の統一は物體的統一より積極的である。識別といふのも此の如き人格的統一の初級である。

普通の心理學に於ては感覺の性質といふ如きものも論せられるのであるが、色

其者とか音其者とかいふものの研究は恐らく嚴密なる意味に於て心理學の研究範圍であるまい。畫家の色に對する態度、音樂家が音に對する態度は數學者が數に對する態度と變らない。いづれも之をそれ自身に法則を有する客觀的對象として見るのである、*veritas æternitas* として見るのである。數が心理的と云はれぬと同一の理由に依つて、色自體も音自體も心理的とは云はれない。此處でも *quid facti et quid juris* との區別を嚴密にせねばならぬ。意識我 *Bewusstseinsich* と呼ばれたる一中心に基く内面的作用の範圍内に於て色や音の如何程の種類を如何程にまで識別し得るかとか又此等の内容がその共立的關係に於て如何に變せられるかといふ如きことは純粹心理學の問題であらうと思ふが、*Farbenkörper* に於て考へられる様な純粹に色と色との性質的關係の如きものは寧ろ純粹心理學以外のものではなからうか。心理學の問題の中心は意識我に於ける内容の結合即ちその共立的關係の問題でなければならぬ。識別的關係はその *sine qua non* である。心理學の感覺論に於てはキェルベの云つて居る如き *sensitivität an I sensiblen Discrimination* の問題の如きものがその中心とならねばなるまい。斯くして此問題は考へ方によつ

ては一方に生理學的研究と密接の關係を有つて來る。何となれば身體は意識我の射影なるが故である。我々は此變化の深き説明に於ては哲學的に進むにあらざれば、自然科學的に即ち生理學的に進まねばならぬのである。併し之を他に依つて説明し得ると否とに關らず、意識は意識としてそれ自身の領分を有つて居るのである。alter image, contrast などより幻覺や錯覺に至るまで、それ〴〵生理學的説明があるとしても、兎に角直接經驗の事實としてそれ自身の變化の法則を有つて居るのである。種々なる心理學的法則といふのは右に述べた如き内容の共立的關係の法則である。充足理由の原理は矛盾律の中に求めることはできぬ、内容の共立的關係の變化は内容自身の中に求めることはできぬから、此等の變化の背後に意識我なるものが考へられ、心理學的法則は此條件の下に於て現象を支配する法則と考へられる、即ち心理學的法則は内容自身が内面的結合を成す爲めの法則である。ディルタイは普通の心理學に反して beschreibende und zerlegende Psychologie を説いて居るが、普通の心理學といへども物理學などと異なつて、矢張り内容の内面的統一を離れたものではない、氏の所謂 Typus の學、Struktur の學である、體驗を對象

とした學問である、唯その體驗の最も一般的な成立條件を論ずるを以て氏の心理學と異なつて居るのである。識別といふ如きことも體驗の初級である。或は意識内容の本質的關係は盡く本質學 Wesenwissen hinsichtlich に屬し、所謂意識我の本質といふ如きものも畢竟之を合理化し得ると信するならば、所謂意識はその獨立の實在性を失ふ様になるとも考へられるであらう。例へば或一つの數學の問題を考へた時、その眞なる部分は數學的眞理の必然に屬し、その誤つた部分と推論の順序方法などが心理學的説明を待つと云ふこととなるかも知れない。併し此部分が實在の創造的部分である、エラン・ヴイタールの尖端である、實在は意志である。心理學は意志の奥底に向つて反省して行くのである、充足理由を求めつつ行くのである。普通の心理學といへども此方向の初歩である、聯想心理學といふもこの説明の初階たるを失はない、此點に於て心理學は自然科學と異なつて居る。普通の心理學は之より反對に生理學と結合するのであるが、右の方向を正しく進めばディルタイの所謂 Typus & Struktur の心理學の如きものに達せねばならぬ。所謂心理學者の誤は心理學を以て凡ての精神科學の基礎であるかの様に考へるにあるのである、

デルタイの云ふ如く眞の Götterbilder のあるべき場所へ *Larven* を置かんとするに
あるのである (*Das Erlebnis und die Dichtung*)。心理學は物理的因果の學ではなくして
内面的因果の學である、創造的意志の學である。心理學的説明の基にはいつでも
人格的或物がなければならぬ、心理學の場合ではそれが最も一般的であるといふ
に過ぎないのである。

三

以上論じた如く感覺とは識別力を有つた表象自體である、表象自體が相互の識
別的關係に於て立つ時、それが感覺となる、即ち表象自體が識別的自我の中に入り
來つたものが感覺である。主觀の方から云へば感覺は識別的自我の作用とも云
ひ得るのである、識別的自我が感覺界の魂であると云つてよい。今日の認識論者
の考の如く我々の客觀界とは直接經驗の内容を思惟によつて構成したものとす
れば、ナトルプの如く感覺とは *letzte materiale Grundlage der Erfahrungskenntnis, an sich nur das*
Unbestimmte, erst zu Bestimmende = x, positiv aber das Bestimmbare oder die gegebene Möglichkeit

eben der Bestimmungen, welche die objective Erkenntnis gemäss den Gesetzen der synthetischen Einheit
vollzieht といふべきであらう。直接經驗の内容を「すべての現象に於て感覺の對象
たる實在者は内包量即ち程度を有つ」といふ知覺豫料の原理に當嵌めて、此方向を
推し進めて行けば、内包量は更に物力となり、物理的世界に進むのであるが、翻つて
之を元の立場に於て見れば、それが感覺となる。此の如き逆の立場に於ての統一
が精神作用となる。斯く考へればナトルプの考の如く客觀化的方向の種類のある
だけ、それだけ精神作用の種類がある譯である。余は此點に於てナトルプの考
と布伦ターノ學派の人々の對象的關係によつて精神作用を分つ考とが結び付
くことができると思ふ。實驗心理學者は布伦ターノ學派の心理學は概念を實
體化するものとして之を排するのであるが、純粹心理學の立場に於ては意識現象
に内在的なる意味内容の區別を無視することはできぬ。何となれば意識現象に
於ては意味即實在なるが故である。精神現象は經驗せらるるものの經驗ではな
くして、經驗するものの經驗である、意味の實在性に依つてのみ經驗が成立するこ
とができるのである。主觀とは經驗内容の統一者である。

現今の心理學者もその知識に對して批評的なる否とに關せず、精神的要素として感覺の性質的區別を立つるに當つて、右の如き立場を守つて居ると云ふことができる。種々なる感覺の區別及びその細別の如きも現在、我々の意識に於て幾許の表象自體が識別的關係に於て立ち得るかを示したものである。併し感覺が性質の外に強度を有つとか又は種々の屬性を有するとは如何なることを意味するのであらうか。先づ感覺の強度 *Intensität* といふことに就て考へて見よう。心理學上に於ける量の概念は物理學上に於ける量の概念と異なつて居ることは心理學者自身も認めて居る。元來性質的たるべき精神現象に嚴密なる意味に於て量の概念の用ゐらるべき筈はない、量的に考へるといふことは意識内容を客觀化することである、之を對象化することである、知覺の豫料の原理に當嵌めることである、(數學的物理學は之によつて成立するのである)。心理學者自身も感覺の強度といふのは一種の性質と考へて居るのである。併し感覺の強度といふことを單なる一種の性質と見做すのも固よりその當を得たものではない。意識の強度とは判斷に對する意識内容の *claim* である、リプスの云ふ如く我々の *Auffassungstätigkeit* に

對する内容の *Zumutung* である。コーエンは感覺を *Anspruch* とするが、強度とは感覺が識別的關係に於て己自身を維持する力である。此點に於てヴェントがウェーバーの法則を統覺的結合の法則となすにも意味を認めることができる。すべてそれ自身に於て獨立なる實在は連續的でなければならぬ、即ち強度を有し力を有せねばならぬ。而してライブニッツが *imo extensionis prius* と云つた如く、意識の強度は物力の強度よりも一層根本的であると考へることもできる。物理學者が物體の力を計るのも我々の感覺の強度を基とするのである。重量や溫度を秤や寒暖計に依つて計るといふも、要するに精確なる視覺の判斷に訴へるに過ぎない。意識の強度は物の強度を計るのである、意識の強度によつて物理的強度が成立するのである。意識現象はすべて一般者 *das Allgemeine* のおのづからなる分化發展である、その背後には何時でも一般者がある、意識の強度とは此の如き一般者の發展の力を現はすものである。意識現象に於ては性質即強度である、性質とは經驗内容が單に其者として靜的に考へられたもので、強度とはその動的状態である。表象自體は強度を有することに依つて感覺となる。我々の直覺に於ては性質が強度を有つ、

畫家はすべての性質を強度的に見るのである。物體現象に於ては之に反し質と量とは分れて二となる。熱とか光とかいふ性質を量的に考へるのである。質と量とは互に外面的である。勿論、向に云つた如く physical measurement が内包量に依るのみならず、物理的量其者が主觀の構成によると云ふことができるのであるが、物理學的考へ方に於ては一般なるものと特殊なるものとは直に結合しない、即ち質と量とは直に結合しない。精神現象に於てはヘーゲルの概念に於ての様に部分が一々全體の意義を有つて居る。精神現象はアプリアオリとアプリアオリとの結合、作用と作用との統一である。質即量である。物理的世界に於ては量と質と分れ、量其者が獨立に實在性を有するが故に、數學を應用することができるのであるが、精神現象に於ては之と同一の意義に於て數理を應用することはできぬ。併し物理的量が一方から見れば主觀に依存すると云ひ得ると共に、心理的量とは一方から見れば小なる立場から大なる立場への傾向、特殊的部分から一般的統一への推移、即ち客觀的傾向と云つてよい。而して我々の自我の最大統一は先驗的自我の統一にあるとすれば、リュブスの „Zuuntung“ とは畢竟物理界を構成する先驗的自我への

求心的傾向と云つてよい、精神量と物理量とは此點に於て結合することができるのである。我々は此先驗的自我の統一を通じて全經驗を反省し、之を物體界に射影して見ることができ、而して自我に對する „Zuuntung“ なる精神量を物質量に對應することができるのである。

右に述べた如く感覺の強度とは意識内容の力である、感覺をして感覺たらしむるものはその強度を有するに依るのである。然らざれば感覺は單なる表象自體と擇ぶ所はない、感覺とは強度を有する表象自體と云つてよい。それでは感覺の性質が種々の屬性を有するとは何を意味するか。例へば色覺は Farbenton の外に Farbhelligkeit とを有するといふのは如何なることを意味するのであるか。赤の感覺はその色調の外に飽和度と光度とを有つて居るのは事實である、即ち赤の感覺はその色調の方向に配列し得ると共に飽和度や光度の方向にも配列することができ、向に云つた如く感覺は表象自體が實在的となつたものと云ひ得るならば、我々が色覺に於て色調と飽和度と光度とを概念的に分析し得るといふことから、色覺を更に此等の要素に區別し得ると考へられるかも知れぬ。

併し嚴密に考へれば或一の色調に於て微細にその飽和度や光度を異にせる感覺は、その一々が異なつた感覺と考へねばならぬ。或一つの感覺が色調の外に飽和度や光度を有つといふことは一つの點が三次元に於て見られる如く、一つの感覺が種々の方向に於て比較し得るといふことに過ぎない。他面から考へれば一の感覺は種々なる性質的次元の結合點と考へることもできるであらう。勿論物體をも種々なる性質の結合と考へることができ、我々は之を物が性質を有つといふ。併し精神現象の統一と物體現象の統一とはその範疇を異にして居るのである。物體現象に於てはその統一は外面的である、時間、空間に依つて結合されるのである。之に反し精神現象に於てはその統一は内面的である、空間、時間による統一ではなくして性質的類似の統一によるのである。色覺が色調、飽和度、光度を有つといふのは、時と場所とによる外面的結合ではない、色其者の性質による内面的結合である。此故に物體現象に於ては概念的統一は全く非實在的と考へられねばならぬのであるが、精神現象に於ては概念的統一は實力を有すると考へることができ、余は此點に於てライブニッツが *des idées simples* が無いといふのは一面の

眞理を認め得ると思ふ。無論ライブニッツの考へた如き *le vert nait du bleu et du jaune* といふ如き理由を以て緑を複雑と考へることはできないが、一つの感覺は種々なる次元に於て推移の傾向を有つといふ意味に於て複雑と考へることができるのである。一つの點や線が解析幾何學に於て種々の意義に解せられるのと一般である。緑の色覺は心理學的には單一なる感覺であつて黄と青との混合と見ることができぬ、即ち不可分的であらうが、性質的區別の體系に於ては種々の意味を有つと考へることができ、實在的には單一であるが意味的次元の上に於て多様であると考へることができ、而して精神現象に於ては意味は實在的である意味的關係は物理現象に於ける力學的關係の如く根本的である、識別的關係といふのは意味の力學的關係である。ヘーゲルは「美學」に於て *Einheit unverschiedener Bestimmungen* として概念は具體的であると云ひ、人とか青とかいふ表象も區別を其中に含むと見られる時、概念となると云つて居る (*Wie z. B. die Vorstellung „blau“ als Farbe die Einheit und zwar spezifische Einheit von Hell und Dunkel zu ihrem Begriffe hat, n. s. w. Aesthetik, I. S. 137.*)。精神現象は此の如き概念の實在と考へ得るのである。すべて實在は

一般者 *das Allgemeine* のそのづからなる發展である、一つの獨立の體系でなければならぬ。經驗内容即ち純なる性質が單なる表象自體ではなく、感覺的性質としてそれ自身の實在性を有するには、それ自身の中に分化發展の動機を有する一般者でなければならぬ。換言すれば純なる性質的一般者 *das qualitative Allgemeine* がそれ自身に發展したものの、即ち具體的となつたものが感覺的性質である。感覺的性質の屬性といふのは此の如き性質的一般者の發展の種々なる方向に過ぎない、即ち性質的一般者の *Momente* である。感覺の強度といふのは之に反し種々なる性質的一般者の統一點たる自我に對する *Quantität* である、性質的統一が更に深且つ大なる自我の統一の一部分となつた時、感覺は強度を有するのである。感覺は強度を有することに依つて、即ち性質的強度 *Grad* となることによつて眞に具體的な精神的要素となると云つてよい。單に量的なる物理現象が抽象的なるが如く、強度なき感覺は精神現象として抽象的なることを免れない。具體的精神現象は性質的強度でなければならぬ。

精神的要素として考へられる感覺には必ず物體的條件が伴ふと考へ得るも、物

體現象から精神現象が生ずるのではない。精神現象は物體現象に伴ふといふのは精神現象は何時でも物體界に投射して考へ得るといふに過ぎない。ライブニッツのモナドが *repräsentation, expression* をその本質の一と爲すが如く、獨立にして自動的なる我々の自我は *repräsentler* の力を有つて居らねばならぬ、自ら働くものは己自身を *repräsentler* するものでなければならぬ。此の如き反省の方面が物體界である。我々は反省的自我の統一を通じてすべての經驗を物體界に映して見ることが出来る。感覺は斯くして成立する物體界との接觸點である。平面的なる物體界と立體的なる精神界とが結合する境界に於て感覺は立體的方向に位するのである。

感情

一

感情は感覺と同じく精神的要素と考へられる。ヴントは客觀的經驗内容の要素が感覺であつて、その主觀的要素が單一感情 *einfache Gefühl* であると云つて居る。試にヴントに依つて感覺と感情との異同を比較すれば、感情も感覺と同じく二つの屬性を有つて居る。感情の性質と云へば *ernst, heiter, traurig, düster, wehmütig* といふ如きものであつて、その強度とは感覺の場合と同じく *schwach, stark, mäßig stark, sehr stark* といふ如きものである。此點に於ては感覺も感情も同様であるが、感覺の強度は同一性質に於て零から最大強度に變するに反し、感情は *Innifferenzpunkt* から相反せる兩方面に變する。例へば高き音と低き音とは感覺としては單に區別であるが、感情に於ては反對である。次に單一感情は單一感覺に伴ふのみならず、構成せられた表象にも伴ふ、例へば *Harmoniegefühl* の如きも單一感情である。終りに感覺の性質は互に *disputat* であるが、單一感情はすべてが一つの *zusammenhängende*

Mannigfaltigkeit を成すといふのである。

感情の性質に關しては、ヴントは從來の心理學者が單に快樂と苦痛の二種となすに反し、*Last und Unlust, Erregung und Beruhigung, Spannung und Lösung* の三方向を區別して居る。併しヴントの三次元説 *The tridimensional theory of feeling* に就ては有力なる反對者が多い。例へば、*テイチナー* は論理的に心理的に又實驗的にこの説の誤謬を指摘して居るが、心理的に見れば、ヴントの所謂 *excitement and depression, tension and relaxation* は決して單一なる要素ではない、其中に常に有機感覺特に *kinesthetic sensation* を含んで居る。此等の精神現象はその感覺的方面に於て種々の *muscular attitudes* を含み、之に快か不快かの感情の伴ふものに過ぎぬといふのである (*Richener, A Text Book of Psychology, Part I, § 72*)。ヴントは又之に反し自説を固守して、情緒の要素たるべき氏の所謂三方向の如きものが既に感情の要素の中にあるべき筈である、多くの心理學者が快不快の二種に限るのはそれぞれ内容を異にする感情の *Kollektivbegriffe* を具體的狀態と考へるに過ぎない、感情を筋覺などと同一視すれば美學や倫理學に對して心理學は何等の説明を與へることはできぬと云つて居

以上述べた如く感情は感覺と同じく性質と強度とを有する一種の精神的要素であるが、種々の點に於て感覺と其類を異にすると考へられる。實驗心理學者は此等の現象を論ずるに自然科学者が自然現象に對すると同一の態度を以てするのであるが、余は精神現象の性質として、かかる場合に於ても深い内省的見方を要するではないかと思ふ。感情は感覺に對して主觀的と考へられる、ヴントも云ふ如く感覺は客觀的經驗内容の要素であつて感情は主觀的要素である、感情と感覺とを區別すべき本質的特徴はこの「主觀的」といふ一語にあるのである。ヴントが感覺と感情とを區別する種々の特徴の如きも此根本的性質に依つて明にすることができらるであらう。併し物の本質を理解するには、單にその種々なる方面に於ける特徴を比較するのみではなくして、深くその内面的性質に入らねばならぬ、特に精神現象に於ては爾考へられるのである。實體概念 *Substanzbegriff* によつて成る自然現象に於ては種々の方面より見た性質の枚擧にて可なる場合もあるであらうが、*Aktualitätsbegriff* によつて成る精神現象に於ては單に種々なる性質を列擧

するのみではなくして、深くその内面的性質に入らねばならぬ。内面的といふことが精神現象の本質を成して居るのである。ヴントは喜 *Freude* の情緒を心理的に説明してその *Grundcharakter* では快樂であるが、その経過に於て感情の高まると共に *exzitierend* となり、過度の強さに於ては *deprimierend* となると云つて居る (*Grundriss, 10te Aufl. S. 214.*) 意味を實在化すると思はれる古き心理學をすてて、嚴密なる實驗心理學の立場から情緒を解釋すれば、右の如きものとなるかも知らぬが、我々の喜とか悲とかいふものは此の如き外面的記載によつてその本質を盡し得るであらうか。喜とか悲とかいふ情緒の本質は全體としての特徴の上にあるのである。すべて精神現象は生きた一つの内面的作用としてその實在性を有するのである。精神現象の本質を明にするには此實在性を明にせねばならぬ。而して之を明にするにはその動的性質を考へねばならぬ。動的性質を考へるには、之を其全體との關係に於て見なければならぬ、即ち内面に於けるその生成的條件を考へて見なければならぬ。而して意味即實在なる精神現象に於ては、意味の働きを離れて之を考へることはできないであらう。余はかかる考からして寧ろスピノーザが「情

緒の定義」に於て Joy (gandium) is pleasure accompanied by the idea of a past thing which sur-
passed our hope in its event. とか Love (amor) is pleasure accompanied by the idea of an external
cause. とか云つて居るのが、却つて一層情緒其者の内面的本質を明にして居るで
はないかと思ふ。單に識別的關係を以て意識の根本的形式となす實驗心理學の
立場からしては、右の如き説明はスコラ哲學の遺風に過ぎないと考へられるかも
知らぬが、精神的實在の本質たる綜合的全體を説明するには所謂實驗心理學的見
方の上に尙一步を進めねばならぬ、即ちその全體を成立せしめるものの根柢に入
らねばならぬ。而して此の如き説明に進むには生理的説明を通じて生物學の如
きものに入るか、然らざれば例へばデュルタイの所謂 *Beschreibung und Zergliedernde
Psychologie* の如きものを通じて歴史や哲學と結合せねばならぬ。精神現象として
は後者がその本質を明にするものであると思ふ。

二

感情と感覺との位置關係に就ては心理學者の間に種々の説があるであらうが、

多くは感情は感覺に對立し、之と同列的なる精神的要素と考へられて居る。色、音、
香味などの外界刺激は我々に對して一種の感覺を生ずるのみならず、我々は之に
對して種々の感情を有つと考へられる。感情とは我々の自我の状態の意識であ
る、感情はその主觀的なるを以て、客觀的なる感覺と區別せられる。ツントの云ふ
如く、感覺は客觀的經驗内容の要素であつて、感情は主觀的要素であると考へられ
るのである。我々の主觀を對象界に投射して一種の自然物の如く考へるならば、
主觀は客觀と同列的となり、感情は感覺と同列的なる精神要素と考へることがで
きるであらうが、此の如き主觀は對象化せられた主觀であつて、眞の主觀ではない、
眞の主觀は對象化することのできない、却つて對象を維持する主體 *subiectum* でな
ければならぬ。意識的自我の主觀的といふのは此意味に於てでなければならぬ
とするならば、感情と感覺とは單なる同列的なる精神的要素と見做すことはでき
ない。感情が主觀的要素として感覺と區別せらるるならば、主觀的といふ語の意
義を明にせねばならぬ。

我々の自我を反省し、之を知識對象界に映して他の自然現象と同列的と見るな

らば、感覺が物の性質と考へられる如く感情は主觀の性質と考へられるかも知れぬ。併し一方から見れば種々なる感覺が我の感覺として主觀的と考へられるのみならず所謂實在界も先驗的自我の統一によつて成立する對象界と考へることもできる。此の如き主觀は之を反省することはできない、何となれば此主觀が反省するのだからである。此の如き統一は被統一者と同列的に見ることはできぬ、同一列のものが他を統一することはできないのである。精神現象の自然現象と異なる所以は此の如き統一の實在性にあるのである。我々の自我とは此の如き統一の中心點である。自我は種々なる作用の結合點である。感情が主觀的といふのは此の如き統一の意識としてでなければならぬ。嘗て云つた如く感覺は表象自體が識別的關係に於て立つものとするとするならば、感情は此の如き關係を成立せしむるものの意識である。此意味に於て感情は感覺と其類を異にした意識である。感情は感覺に比して一層高次的なる意識である。感情に注意を向ければ感情は消滅すると考へられるも之が爲である、強ひて之を同列的に見れば有機感覺の如きものとなるのである。感情が感覺と同列的なる精神的要素と考へられるの

は、實驗心理學者が精神現象の本質たる内面的性質に注意を拂はないからである。余は此點に於てブレンターノ一派が對象的關係 Gegenständliche Beziehungによつて精神現象を分類する考に同意したいと思ふ。此見方よりしてブレンターノの云ふ如く、感情は對象間に於てではなく、對象に對する關係其者の中に反對を含むといふ點に於て寧ろ判斷に類すると云つてよい。感覺は識別力を有つた表象自體として單なる作用と考へられるが、感情は作用の結合である、作用の作用である。而して意識現象に於ては、統一が進めば進む程、即ち主觀的となればなる程實在的となるのである。

意識の背後には必ず含蓄的なる或物がある、意識はいつでも *satyrt* である、含蓄的なる全體が顯現的となる、即ち一般者が己自身を分化發展するのが意識の發展である。斯くの如き場合に於て一般者 *das Allgemeine* はいつでもその特殊なるもの *das Besondere* に對して高次的立場に立つ、例へばシュープスの *psychic fringe* の如きものに於ても、文章の一語が意識に上つた時、文章全體の意味を表す *fringe* は單なる部分的意識と同列的ではない。同列的なるものは全體を代表することはで

きぬ。若し此の如き區別は意味の區別として之を排するならば、氏の所謂 *hingeb* の如きも一種の有機感覺のごときものに還元せられねばなるまい。ジームスが根本的經驗論の立場からさとか *form* とかいふのも一種の經驗であるといふが、經驗といふ語は盡く同一意義と考へることはできない。具體的意識にはいつでも己自身の中に非顯現的な部分がある、對象化することのできない部分がある。意識は之のあるによつて自發自展的である、獨立である。自然現象に於ては現象と本體とは互に外面的であるが、意識現象に於ては現象其者の中に本體がある、力がある、有限の中に無限があるのである。これは矛盾である、併し自己の中に矛盾を含むことが意識の實在である。單一なる意識は意識として成立することはできぬ、「赤」の意識は「非赤」に對立することによつて成立し、此對立を成立せしむる統一者はその孰でもないと共に又此對立を離れたものでもない。此の如き統一者が主觀的作用である、此作用に對して其中に含まれるもの、即ち被統一者は *intentionale Gegenstände* となる、即ち所謂内容 *Inhalte* となる。無論右の如き主觀的作用を更に反省して一層大なる作用の内容となすこともできるかも知れぬが、同じく統一といつ

ても純なるアプリアオリの統一とアプリアオリのアプリアオリ即ち統一の統一とを區別することができる。此の如き統一の統一が自己である、此の如き統一の經驗が意識現象である、而して此の如き方向に向つて亦、統一の上に統一を考へることができるのである。向に感覺は表象自體が識別的關係に於て立つもの、即ち表象自體の識別力を有つたものと云つたが、己自身の中に識別力を有つ表象自體とは、單なる表象自體ではなくして動的アプリアオリでなければならぬ、即ち作用自身でなければならぬ。識別的關係とはアプリアオリとアプリアオリとの關係、即ち作用と作用との關係である。意識現象とは此の如き統一の體系である。

意識は一般者の統一によつて成立するといふことは、換言すれば意識は一般者が己自身を限定すること、即ち對象化することであつて、意識は一般者の自己實現である、と云ふことを意味する。此の如き對象化の方面即ち限定の方面が知識である。純なる一つのアプリアオリの上に立つものが意味の世界と考へられ、アプリアオリの連結の上に立つものが實在界と考へられる。併し意識が大なる統一に進むには、それ自身の中に深く入らねばならぬ、意識は肯定と共に否定の方面を有つ、

外展の方面と共に内展の方面を有つて居るのである。例へば「赤」の表象に對して「非赤」の意識は既に同列的の意識ではない、一つの判斷に對して假定 *Annehmen* の立場は更に大なる立場である。此の如き内展的方面の對象が所謂意識現象である。而して此の如き方向を追うて如何なる意味に於ても對象化することのできない剰餘が感情であると考へることが出来る。何等かの意味に於て對象化することのできるもの、即ち限定し得るものは知識となる、たとひ明に限定し得ぬとしても何等かの意味に於て限定の可能性を有つものは尙無意識として知識の部分に屬するのである。唯すべてを限定し盡くして如何なる意味に於ても限定のできない剰餘が感情と考へられる、即ち感情はすべてのアブリアオリのアブリアオリとして、すべての作用の統一作用として我の状態、我の態度である。およそ或一つの立場に對して包容的にして大なる立場といふのは、前の立場に對しては無限定にして自由なる立場である。感覺に對して表象は無限定にして自由なる立場である、即ち現在に感覺しないものを表象することが出来る。記憶とか想像とかいふのは表象作用に比して更に自由なる立場であり、思惟に比してはマイノングの假定と

いふ如き立場は更に無限定なる自由の立場である。すべて高次的なる立場は次的なる立場の否定を含む、我々は或一つの立場の否定を意識する時、既に高次的立場の上に立つのである。高次的立場は次的立場を *antreiben* したものである。具體的なる意識現象に於ては高次的立場がいつでもその背後に含まれて居る。心理學者が意識はコントラストによつて成立するといふのは之に由るのである。感覺の背後には表象が含まれて居り、表象の背後には記憶が含まれて居る、少くとも含蓄的には無限に高次的なる立場が含まれて居る。現在の意識とは作用の結合點である。物力は無限の外界に連なる如くに精神作用は無限の内面に連つて居る。我々の情意とは右の如き考へ方によつて總ての知的作用を超越して無限に自由なる高次的立場である。知識の錘を以てして達することのできない深底 *Bühne* である。或は知的對象となり得ないもの、何等の意味に於ても限定し得ざるものは無内容と考へられるかも知れぬが、我々が知識の限定を意識する時、既に知識以上の立場に立つて居る。精神現象に於ては此の如き高次的立場即ち統一が實在的であるのである。美的感情に就てのカントの所論に従へば、限定的判斷

作用とは特殊を一般の中に包攝する作用であつて、反省的判斷作用とは特殊なるものが先づ與へられ、之に對して一般なるものを見出す作用である、而して或物の概念は其物の存在の根據としてその目的と考へることができ、すべて目的の到達には快感を伴ふのであるが、美感とは純なる反省的判斷作用即ち自然の形式的合目的性に伴ふ感情であると云ふのである (Kritik der Urteilskraft, Einleitung)。² 一般から特殊に行くといふのは余が所謂外展の方面であり、特殊から一般に行くのは余が所謂内展の方面である。反省的 reflectierend に物を見ることは、物をその具體的根柢に返つて見ることであり、内的對象として見ることであり、一つのアプリアリの上立つ對象をその元に返つて見るといふことは之を作用として見ることであり、自然の合目的見方といふのも此種の見方である、即ち精神現象の範疇によつて自然を見るのである。斯くして感情とは反省的判斷作用に伴ふ意識である、感情は作用の統一の意識である、限定的認識作用の具體的根元と云ふことができる。一般者から始まつて一般者に還ると考へられる意識は感情より始まつて感情に終ると考へられるのである。知識の内容と形式とを峻別し、内容を以て一概に受

働的と考へたカントは形式的判斷作用に伴ふ感情にのみアプリアリを認め、我々の直接經驗は元來受働的ではない、我々の純なる知覺は今日の藝術論者の云ふ如くそれ自身に於て動的である、眼の知覺にも耳の知覺にも純なる部分がある。單に形式的判斷作用のみならず、すべての知的作用は純なる作用として美的感情を伴ふのである。藝術家の眼には線は直線と曲線との Durchdringung であり、色は種々なる Farben の結合であると云ふが、物をその純なる状態に於て見る藝術家の眼には、色も線も盡く作用の連続として見えるのである。これ即ち美的意識であつて、此處に純なる美的感情が成立するのである。美的感情は認識以上の神秘境からの物の發生に伴ふ感情である、因果律を超越した發生の意識である。

三

余は感情について大體の考を述べた。感情は感覺と次元を異にした精神現象である。此處に感情の本質がある。すべて精神現象は意味即實在であつて、Achtungsbegriff に依る實在である。感覺といへども勿論此本質を具へて居る。感覺

と單なる表象自體との異なる所は此點にあるのである。併し感覺の據つて立つ所の識別的關係といふのは意識的統一の内容を極小にしたもので精神現象成立の初級である。更に表象となり思惟となれば、統一の内容が積極的となり能働的となる、即ち精神現象が愈其本質を現することとなるのである。感情は此の如き考によつて種々知力の統一と考へることができ、即ちアプリアリのアプリアリと考へることができ、Rimbaudが A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu の *Un coup de Baude-
laire* が *Les parfums, les couleurs et les sons se répondent* と歌ふ時、その融合は感情の基礎に於てでなければならぬ。感情は受働的であると云はれるのであるが、ゲーテが自己の生涯を詩化することに依つて、その苦惱を脱したといふ様に、我々は情に依つて知を包容し、之を超越して自在となることができるのである。

感情を右に述べた如きものとして、感情の内容とは如何なるものであるか。感情は知識と違ひ、其内容が不分明であるといふのは一般の考であるが、敏感なる藝術家の感情が科學者の知識に比して、必ずしも不分明とは考へられない。感情の不分明といふのは概念的知識に表はすことができないといふに過ぎぬ。感情其

者の意識が不分明なのではない、感情の意識は知識のそれに比して、却つて繊細微妙であると云ふこともできる。此の如き感情の意識内容とは何であらうか。すべて精神現象の特徴は対象の内在といふことであつて、知覺には知覺の対象があり、思惟には思惟の対象があり、之によつて種々の知覺や思惟が區別せられるとするならば、感情の対象とは如何なるものであらうか。或は純主觀的なる感情は何等の客觀的対象をも有たない、それが感情の本質であるとも云ひ得るであらう。併し微細に識別せらるる感情には據つて以て區別せらるべき何等かの内容があると考へざるを得ない。縱、その対象は知識のそれと其類を異にするものとしても、感情にも一種の内在的対象があると考へざるを得ないであらう。勿論、多くの心理學者の考へる如く感情を單に合成物として、その微細なる色合はすべて知識的要素の差違に屬するものとするれば、感情其者の性質としては快不快といふ如き抽象的概念によつて表はさるべき二種の區別しかないと云ひ得るでもあらう。併し意識現象は單なる合成物ではなくして一つの統一でなければならぬ、意識現象の實在性は其要素にあるのではなくしてその統一にあるのである。特に感情

に於ては、ヴントも云つて居る如く構成せられた表象に伴ふものも單一感情である。例へば Harmoniegefühl の如きも感情の結合ではなくして一つの感情である。感情が此の如きものであるとするならば、感情には無限に性質上の差異がなければならぬ。

我々が物を知るといふことは之を限定することである、如何なるものなるかを限定することに由つて物を知ることができ、判断は此の如き限定の形式である。併し限定にも種々の意味があり、必ずしも同一の意義に於てのみ限定といふことはできぬ。或一つの立場に於ては限定することのできないものも、更に一層高次のなる立場から之を限定することができる。例へば、有限数であつても、その数多き時は直覺的に限定することができないにしても、我々は之を知ることができぬとは云はれない。無限数とは我々が達することのできない、即ち消極的に考へるの外ない数であるが、我々は分離的要素の立場を超越して、分割作用其者を認識することに由つて、即ち認識対象を客観から主観に移すことに由つて、無限数を有限数と同一の法則の下に取扱ふことができる。カントルの集合論は斯くして起つ

たものである。マイノングの云ふ如く「赤」の表象に對して「非赤」の意識は「赤」の表象と同列的ではない、一層高次的なる意識である。單なる表象の立場からは、無限定にして無内容なる意識と考へられるかも知れぬが、高次の立場に於ては明に限定せられた意識となることができ、思惟に對してマイノングの假定の立場は無限定であるかも知れぬが、無内容とか不明瞭とかいふことはできない。「圓い三角」といふ如きことも無内容の意識ではない、明に内容を有つて居るのである、背理と思はれるのは内容があるからである。すべて或物を限定するといふことは之に對する反限定の立場を含んで居る。而して此反限定の立場は前の立場に對して同列的ではなく、その具體的根元たる高次の立場への關係を含んで居る。否定的判断が肯定的判断よりは一層高次的と考へられるのも之によるのである。是れは是れと同列的ではない、高次の立場への階段である。高次の立場からは前に反限定として消極的に考へられたものが、積極的内容を得ることとなるのである。向にも云つた如く感情とはすべての意識内容を知的に對象化した剩餘である。知識的には無内容であり無限定であると考へられるかも知れぬが、高次的なる感情

の立場に於ては限定された明なる内容を有つたものである。意識現象に於ては
一々の内容が作用であつて、此等の作用を統一する最高のアプリアオリは人格的統
一であるから、感情の内容は人格的統一の内容である。人格といふのは單なる抽
象的概念ではなくして、種々なる作用の動的統一である、種々なるアプリアオリの力
學的關係である。感情とは此の如き動的統一の上に現はれ來る意識内容である。
心理學者が感情を研究するのに *Ausdrucksmethode* を用ひ、表現によつて感情の性質
を分つのも之に由ると考へることが出来る。恐らくは廣義に於ける表出運動な
くして、明晰なる感情はないとも云ひ得るであらう。感情の内容を明にするもの
は表出運動である。特に藝術的動作は我々の感情に明晰なる内容を與へるもの
である。手のないラファエルは恐らくは不明瞭な感情以外に有つことはできま
い。表出なき感情は混沌たる快不快の感情の如きものであらう。藝術家は彼自
身の感情を明にする爲に製作するのである。ディルタイは、*Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn* に於て普通の所謂心理學的法則は抽象的であつて、具體的なる
實際の精神生活に於ては、表象は一つの *Leben* であり、*Vorgang* であり、それは生じ發

展し消滅する、而して斯く形像を内心化し内心を形像化するものが神話、哲學、特に
詩の根源である、此活力は不可解ではあるが、それ自身の法則を有し、此世界が滅し、
人類が再生するも *Faust*, *Richard*, *Hamlet*, *Don Quixote* の如き型はいつも繰返される
であらうと云つて居るが、多種多様な藝術はすべて我々の豊富なる感情の内容
を現はす言語に外ならない。純なる感情は靜的な快不快といふごときもので
なくして、人心の奥深く潜める動く或物である。快不快といふのは反省せられた
結果に過ぎない。我々は判斷作用と名づけられたる意識の中に含まれた意味内
容に就て真とか偽とかいふ如く、作用の結合たる人格的統一の内容に就て快とか
不快とかいふ價值判斷を下すのであるが、真偽の内容の豊富なる如く快不快の内
容も豊富である。快とか不快とかいふのは抽象的な種族名に過ぎない。或は
快不快の感情其者に種々の内容があるのではなく、感情の内容とは之に伴ふ知的
對象に過ぎぬと云ふかも知れぬが、判斷の内容が單に表象の結合によつて盡され
ない如く、感情の内容も單に知的對象の結合によつて盡されない。結合の上に現
はれたる創造的或物がその内容となるのである。感情の場合に於ては之を廣義

に於ける想像作用と云つてよからう、想像作用は廣き意味に於て作用の結合と考へてよい、アブリオリと云つてよい。例へば「甲は甲である」といふ判断を翻つて見るリ、ケルトの所謂 *homogenes Medium* はカントの *Einbildungskraft* である、*Die* たる一つの作用と *Antithesis* たる一つの作用とを結合する具體的立場である。此の如き所謂形式的作用の結合の内容は論理的感情の内容を成すのである。之と甚だしく異なる様に見える感官的感情であつても、その背後に人格の核ともいふべき創造的或物があると考へることができ、感情はその表出である。何等の概念をも交へない純なる感官的感情は此の如き創造的なる或物の言語である。此場合に於てはすべてが美である、肉體的快樂の卑しむべきは之を概念化するによるのである。此等の感情を自我の抽象的立場から見れば、單なる苦樂としてすべて其純なる内容を失ふのである。藝術家の眼には線は直線と曲線との *Durchdringung* であり、色は種々なる *Tendenz* の結合であるといふ様に創造的立場に於ては種々の感覺も作用の結合である。藝術的感情は此の如き作用の結合、即ち想像作用の内容である。無論普通には此の如き作用を想像とは云はないであらうが、所謂想

像作用といふのは此の如き創造作用の一部分と云つてよい。判断の内容に種々の真理がある如く、想像の内容に種々の美感があり、想像は判断に比して、一層根本的なる具體的立場であると云ふことができる。外的形像を離れ、即ち知的對象を離れて、最も純なる創造的或物を言ひ表はすものは恐らく音樂であらう。音樂は純なる感情の語である、シ、ペン、ハウエルのいふ如く物自體を現はすものである。純なる感情は知識に對して超越的である、カントが形式美に就て云つた如き感情の先驗性は内容美の上に於ても認めねばならぬ。

感情の内容といふのは右に述べた如く、我々の精神の根柢たる創造的或物即ち動く或物の上に成立する根本的意識の内容である。恰も判断の内容がその要素たる表象の中に求むべからざるが如く、感情の内容は知的要素の中に求めることはできぬ、唯藝術に依つてのみ之を現はすことができる。我々の意識内容がすべて動的となり、すべてが一作用に結合する時、即ちすべてが自己となる時、此内容が現れ來たるのである。意識の本質が内面的作用即ち主體なき働きであるとするば、此の如き意識は實に意識の意識とも云ふべきであらう。此意識を分析すれば、

その要素はすべて知的内容に還元せられるかも知れない。併しシムメトリは單に線の結合以上の或物であるが如く、此意識は唯動く或物に依つてのみ理解せられるのである。スピノーザが「情緒の定義」の中に論じた情緒の分析の如き、今日に於ても尙情緒の深い内面的説明たるを失はないであらう。併し Love is pleasure accompanied by the idea of an external cause と云ひ、Joy is pleasure accompanied by the idea of a past thing which surpassed our hope in its event と云ふも、愛は單に pleasure + idea of an external cause ではない、喜は單に pleasure + idea of a past thing ではない。愛も喜も共に自我の根柢より動く一つの力である、一つの働きである。愛は外界原因の表象に伴ふ快感であると云ふ代りに、外界原因の表象は其者に對する愛によつて成立すると云つてよい。我々が眞に物を知るには之と mitfühlen しなければならぬ、すべての知識の根柢にはリップスの云ふ如き感情移入がある。我々が眞に人を知るには之と同感せねばならぬのみならず、色を知るには色と同感せねばならぬ、音を知るには音と同感せねばならぬ。色を種々なる Dimensionen への連続として見る藝術家は色と共感するのである、之と共に働くのである。網渡りを見て居る人

は之と共に動くと云ふ如く、我々が物を知るには先づ作用と結合せねばならぬ、而して作用との結合は感情である。我々が過去の事柄を知るには現在の我は過去の我と結合せねばならぬ、即ち過去の作用と結合せねばならぬ。外界原因を知るには現在の我は思惟我と結合せねばならぬ、思惟作用と結合しなければならぬ、即ち先づ我を擴大しなければならぬ、大なる深い我が動かねばならぬ。死後再生して王となるも生前の記憶がなければ何等の幸福を感じない様に、又ダンテが不幸の時に樂しかりし日を思ふより悲しきはなしと云つた如く、過去現在を通じて之を對象とする自我の上に喜あり、悲あり、物我を通じて之を對象とする自我の上に愛あり、憎あり、此等の情緒は純なる作用と作用との結合の上に成立つ純我の波動である。純なる音楽は蓋し此波動を表はすものである。アウグスチヌスが *Der im Drang der Liebe seine Selbsterkenntnis, vollente Geist bereits das Wissen seiner selbst habe* といふ語に深い意味があると思ふ (Bindemann による)。此の如き知識は無論概念的知識ではない、眞實在の形は無形の形であり、その聲は無聲の聲である、之を知るのはプロテヌスの所謂 *schweigendes Verstehen* によらねばならぬ。以上論じた如く我

我の情緒は感覺や表象の羣に快不快の單一感情が結び付いたものではない、具體的感情は知識よりも深い意識である、認識對象よりも尙一層深い實在の表現である。一般の心理學者は種々なる知的要素を除去すれば、感情は快不快の兩性質に過ぎないと云ふが、此の如き考は人間は男と女とに分れるといふ如き類型的見方に過ぎない。Titchener はツントに反して excitement and depression, tension and relaxation は單一なる感情ではなくして、有機感覺を含んで居ると云つて居るが、此等の感情は單に下等なる感覺に伴ふと考へられる快不快の感情に比して、高次的なる知的要素を有するかも知らぬが、孰も獨立の具體的感情として所謂快不快と同様に單一であるといふことができる。余は是に於て所謂下等なる感覺に伴ふ快不快の感情と感情の一般的性質としての快不快、即ち抽象的概念としての快不快とを區別しなければならぬと思ふ。一種の具體的感情としての快不快に對しては、すべて他の感情も單一であるが、抽象的概念としては、判斷は眞か偽かの孰かなる如く、すべての感情は快か不快かの孰かでなければならぬ。感情の本質は自我の一點に於ける作用の結合にあるとすれば、その根本的性質は結合するものと、せざるも

のとに分れ、快と不快とが感情の根本的性質を表はすと考へられるのは至當のことである。心理學者は右の如き快不快の二義を明に區別して居らぬ所から、多くの混雜を來たすのではなからうか。複雑なる感情の成分として考へられる快不快は有機感覺に伴ふ快不快と同一の内容と考へ得るであらうか。我々が怒る時にも喜ぶ時にも、否繪畫に對し音楽を聞く時すら、一種の複雑なる有機感覺を伴ひ之と共に快不快を感ずるであらう。併し我々は此場合に於て注意を二つにすることを忘れてはならぬ。私が名畫にみとれて居る時、それと同時に有機的なる快不快を感じて居るのではない。我々が名畫の感情から注意を所謂快不快に移した時、既に名畫の感情は失せ去つて居るのである。ニーチが、Leib bin ich ganz und gar と云つて居る様に、我々が全我を打して一理想に没入する時、自ら肉體を動かさねばならぬ、肉體的變化をも伴ひ來らねばならぬ。此時所謂單一感情と同じき脈搏や呼吸の變化をも起すであらう。純粹に客觀的立場に立つて見れば、有機的なる快不快を混ずるとも考へられるであらう。併し純なる感情はモザイクではない、具體的感情はいつでも一でなければならぬ。自然科学的の見方よりすれば、

要素は孰の場合に於ても不變であるかも知れぬが、判断の中に含まれた表象が單なる表象自身と異なる如く、美的感情の成分としての快不快は單なる快不快と異なるものと見ることが出来る。意味即實在なる精神現象に於ては意味内容の相違は實在の相違と見なければならぬ。斯く云ふものの余は必ずしもヴントの單一感情の分類を辯護するのではない。ヴントの心理學には屢根本的に立場の混淆がある。ヴントは實驗心理學者として *method of expression* によつて自己の説を固め様として居るが、此の如き實驗に對し Titchener が "A Text-Book of Psychology" § 72 に於て論じて居る如く、*method of expression* 及び *method of impression* の二方面から反對することができるとするならば、此點に於てヴントの説を不正確と考へねばなるまい。ヴントは實驗心理學の立場へ内省的心理學の立場を混じたといふ譏を免れ得ないであらう。純なる自然科學的心理學として、ティッチェナーの如き考が徹底的であるかも知れない。

上來述べ來つた如き譯であるから感情には無數の單一なるものがあり、我々が感覺の性質に就て分類する如く、感情の性質に就ても分類することが出来るであ

らう。此の如き分類の種族名として快不快といふ如きものが考へられるのである。ヴントの三方向の區別の如きも又一種の考へ方であらう。併し兎に角此等は限定せられた或特種の色覺とか音覺とかいふものと同一の意味に於て單一なる要素といふことはできぬ。次に感情の強度といはれるものに就ては、感覺の強度といはれるものと同じく、更に大なる統一への關係である。而して我々の自我の最高統一は意志であるとするれば、感情の強度とは意志への關係を意味することとなる。感情は動機として強度を有つと考へることが出来るのである。

四

最も直接にして具體的なる物自體はすべての範疇を超越し我々の言語思慮を入るべき餘地はない、向はんと欲せば乃ち背く底のものである。我々が何等かの立場に立つて見た時、そこに我々の意識界が現じ来る。如何にして絶對の世界から相對の世界を生じ来るか、我々が何等かの立場に立つて見るといふことは何を意味するか、我々は之に對して何等の説明を與へることはできぬ。意識の前に意

識はない、知識の前に知識はない、是に至つて知識の權は窮するのである。さらば絶對は不可知なるか、無意識なるか、若し斯く限定し得るならば既に相對的に過ぎない、眞實在は知不知に屬せざるものである、絶對は單なる假定ではない、受用不盡の力でなければならぬ。意識の中に於ても、知識といふのは或一つの立場から經驗内容を純化して行くことである、此意味に於て内容を純化することができればできる程、知識は客觀的となる。誤謬は立場の混淆より來り、我々は之を主觀的といふのである。知識の立場に於ては主觀的なるものは反規範的であり誤謬である。主觀的狀態と考へられる感情は之に反し、此の如き立場其者を對象としてその意味内容を明にする意識である。知識は知識自身の立場を顧みることができぬ。哲學といへども思惟の立場を離れない、哲學は全體の關係を示す投射圖ではあるが、未だ平面を離れない、哲學は尙作用の内容であつて自由なる作用其者ではない。併し我々の意識は作用を超越した領域を有つ、立體の世界を有つ、物體現象に於ては作用と作用の意識とは別物と考へられるが、意識に於ては此兩者は一でなければならぬ、作用其者の意識がなければならぬ。(かゝる立場から見ても哲

學も一作用の内容に過ぎない、その基には人格的或物があるのである、余は此意味に於て、デルタの *„Volksanschauungslehre“* に興味を有するのである。此の如き作用の結合の意識が純主觀的なる感情である。立場の混淆は知識に對して誤謬であるかも知らぬが、感情に於ては眞である。誤謬は深い人間性を現はす、*ロダンが plus un être est laid dans la nature, plus il est beau dans l'art* と云ふのも此點にあるのである。すべて一つの立場に於て矛盾に陥るものも、高次の立場に於ては、可能的内容となることができる。表象の立場に於て不可能なるものも、思惟の立場に於ては之を可能的内容となすことができる。知識の立場に於て矛盾と考へられることも、感情の立場に於ては積極的内容となすことができる。要するに感情とは作用の作用たる意志の内容である。併し意志と知識との間に想像 *phantasie* といふ作用を考へるならば、感情は想像の内容といふのが至當であらう。我々は作用の作用たる意志を超越する立場を有たぬ。意識は意志に至つて窮極するのである、我々は意志に於て物自體と接觸するのである。唯、意志の窮極する所、百尺竿頭更に一步を進めて、我々は知不知に屬せざる眞實在の境に入ると考へることができ

る。Salomon Maimon は極限概念によつてカントの物自體を考へ、之をライブニッツの *petites perceptions* と結合したと云ふが、極限點に達するには飛躍がなければならぬ。物自體としての *petites perceptions* の世界は知識の極小限ではなくして、明なる情意の世界でなければならぬ。

感情の概念を右の如く考へることに依つて感情と知識との異なる種々の特徴を説明することができると思ふ。知識は之に注意を向ければ向ける程明となるに反し、感情は之に注意を向ければ却つて消滅すると云はれるが、感情とは自我の主觀的狀態である、作用の意識である、アブリオリ其者の意識である。之を注意の對象とすれば感情其者の失せ去るのは當然である。感情は對象其者に深く注意することによつて却つて之を深くすることができ、對象に純なることによつて又感情に純なることができる。ブレンターノの云ふ如く意識現象を對象的關係によつて區別するとすれば、感情は無限數の如く反限定的限定であつて、消極的對象關係とも考へ得るであらう。それでは如何にして感情が意識せられ得るか、感情が意識せられた時既に知識であつて感情と云はれないではないかと云ふこと

もできるであらう。此等の疑問に對して、余は感情は作用の作用たる意志の立場に於て、之を對象化し、その内容を限定することができると思ふ。有限數の立場に於ては全く消極的と見るの外なき無限數も、高次的なる立場、即ち集合論の如き立場からは、積極的に考へ得る如くに、知識の立場に於て無限定と考へられるとも、意志の立場に於て積極的内容を限定することができるのである。純粹意志の立場に進めば進み得る程、感情の内容は明瞭となる、美感は此の如き純粹活動の感情である。プラトーのイデアの世界はプロチヌスの考へた如く美の世界でなければならぬ。之に反し、之を反省し之を概念化すれば、すべてが不明瞭なる類型的快不快の感情となる。感情が意識せられた時、既に感情ではない、感情はいつも現在のであると云ふが、若し此考を嚴密にすれば、他の意識現象に於ても同一の現象を繰返すことはできないと云ひ得るであらう。特に感情のみ斯く考へられるのは知識内容は客觀的と考へられるに反し、感情の内容は主觀的と考へられ、而して主觀は時間的に絶えず推移すると考へられる爲であらう。之に反し意識を一般者の自己實現として考へれば、すべて意識の根柢には永遠なるアブリオリがあり、感情

はアプリアオリのアプリアオリとして永久に現在と考へることが出来る。純粹感情の内容は知識のそれの如く客觀的である。唯感情は知識對象に注意することに因つて意識することが出来るのである。知識内容を動的に見ることに因つて意識することが出来るのである。感情と表出運動との關係に就て見ても、種々なる作用の統一であり、種々なるアプリアオリの結合點とも云ふべき自我の内容たる感情は表出運動を伴はねばならぬ。純粹なる感情は動的でなければならぬ、自ら身體の運動をも伴ひ來らねばならぬ。此點から見て表出運動は一種の象徴であり、藝術的象徴は一種の表出運動と考へることが出来る。

以上述べた如き譯であるから、感情には知覺と同一の意義に於て一般的妥當性といふものはない。趣味判断 *Gese, imackstheil* には知的判断と同一の意義に於て一般的法則を立つることは不可能であらう。何となれば知識は限定せられたる或アプリアオリの上に立つが、感情はアプリアオリのアプリアオリたる自由なる人格的統一の内容である、知識的に無限定なるものの統一である、内に還つて何處までも統一を求めるのである、統一を創造し行くのである。知識は或一つの立場からす

べての經驗内容を統一して行くのであるが、感情は自己の内に還つてアプリアオリ其者を統一するのである、統一を自己の中に求めるのである。而して人格の人格たる所以はその無限に自由なるに存するのであつて、感情の統一は此の如き自由の統一である。此故に我々は感情に對しては知識に於ての如く概念的に一般的法則を立つることはできない、何等かの意味に於て一般的なるものを假定するならば、それは既に知識の立場に墮するのである。*Sensus communis* の如きも此種の非難を免れない。感情のアプリアオリは概念以前の自由なる純粹活動のアプリアオリである、ここでは一々が創造的であり、一々が個性的でなければならぬ、一樣といふ意味に於て一般性を容るべき餘地はない。單に超越的人格の有機的統一として一般性を認め得るのみである。すべて感情は純なれば純なる程、美である、感情が純なるとは概念の混淆を離れることである。感情が概念を離れて、超經驗的となればなる程、美的となる。リップスの感情移入も此の如き意味に於て先驗的に作用と作用との結合でなければならぬ。我々は綱渡りと同一に感ずるも自分は綱渡りとは思はない、斯く我々が超知識的境域に於て綱渡りの作用と結合する所に、美

感の基たる感情移入があるのである。我々の概念的理理解といふのも、その根柢に一種の感情移入がなければならぬ。知的内容も知識の立場を超越して純なる一つの作用として見られた時、藝術的意義を有するのである。其他醜惡と考へられる種々の喜怒哀樂の情緒も、純なる人格の立場から見ても、すべてが藝術的となることができるのである。

カントは美感とは特殊から一般に行く反省的判斷作用即ち自然の形式的合目的性に伴ふ感情であると云つて居るが、反省的判斷作用といふのは知識的なる限定的判斷作用を逆にしたものである。アプリアオリのアプリアオリたる意志の立場からアプリアオリ其者、作用其者を對象として見たものである。カントは感覺的なるものは *anGehelm* であつて *Interesse* を伴ふと云ふが、感覺的經驗もそれ自身に連續的なる内面的發展である、それ自身のアプリアオリを有つて居る。純なる人格の立場に於て反省せられたすべての作用は美感を伴ふと云はねばならぬ。感覺的經驗も純なる人格の立場に於ては、すべて美である、唯少しでも概念を混すれば、忽ち醜惡なる喜怒哀樂の情緒となるのである。

象徴の眞意義

象徴とは意味と存在との結合である、物體的なるものと精神的なるものととの結合である。象徴の最も淺薄なるものは符號に過ぎない。符號に於ては意味と存在との結合が外面的である偶然的である。或一種の動物をフントと名づくるも、ドッグと名づくるも何等の變りはない。象徴の意義が深くなるに従つて、その結合は内面的となり、必然的となる。ロセチが聖母の畫 *Ecce ancilla domini* に於ける清淨無垢の象徴としての百合花の如き兩者を内面的に結合するものは一種の感情である。普通に象徴といふのは此種の結合に屬するものである。文學者は更に此種の象徴を進めて境によつて心を描く。余は今だにツルゲネフの「ルーディン」に於ける、愛人が霧こめて果しなく荒涼たる露西亞のステップに、ルーディンを追ひ行く一節を忘るることはできない。

普通の考へ方では象徴に於て意味と存在とを結合するものは一種の感情と考へられる。従つて意味と存在とはその間に何等の實在的關係はない、單に主觀的

關係に過ぎないと考へられる。併し象徴の意義は單にかかる考に盡きて居るであらうか。我々の感情は單に主觀的事實以上に何等の意義をも有たぬであらうか。此の如き考は恐らく認識對象界を以て唯一の實在界となす主知主義の結果であらう。論理の範疇に當嵌つた認識對象界を唯一の實在界となす時、此體系に入り來らざるものは單に主觀的と考へられねばなるまい。併し我々の感情には恐らく此以上の意味がある、知識以上の客觀的意味がある。カントが常に新たにして且つ増大し行く驚嘆と畏敬とを以て、我々の心を充すものは二つある、我等の上懸る星輝ける天と、我等の中にある道德律と云つた時、この兩者を結合するものは單なる主觀的感情ではなくして、一方に於て無限の宇宙を構成すると共に、一方に於て斷言的命令 *kategorischer Imperativ* として我々の心内に現れ來る理性共者である。兩者の結合は認識以前の世界に求めねばならぬ。古代の人民が天を神化したのも單なる空想とのみ見ることはできない。ポードレールが

Homme libre, toujours tu chéris la mer.

La mer est ton miroir; tu contemples ton âme

Dans le déroulerent infini de sa lame,

Et ton esprit n'est pas gonflé roins amer.

Tu te puis à plonger au sein de ton image;

Tu l'embrasses des yeux et des bras, et ton cœur

Se distrait quelquefois de sa propre ruineur

Au bruit de cette plainte indomptable et sauvage.

と歌ふ時、我々の心と海とは先驗的世界に於て抱き合つて居る、水に入つて溺れず火に入つて焼けざる境に於て我々の心と海とは結合して居ると思はれる。最も深い意味の象徴は此の如き結合でなければならぬ。眞の象徴的結合は先驗的世界に於ての結合でなければならぬ。所謂實在界とは直接經驗の内容を或立場から構成したものである。我々が時間、空間、因果の束縛を脱して一たび先驗的立場にかへつて見る時、或一種の精神の表現として此世界は一つの象徴となる。ノヴァーリスの云つた如く「青き花」の都に於ては數學もコーラスの中に入ると云ふことができるのである。

普通に感情は主観的であるといふ語の中には、感情は非實在的である、幻影であるといふことを含んで居る。知識が唯一の一般性、客観性を有するもので、感情は單に個人的、主観的と考へられるのである。併し感情にも一般性があり客観性がある。我々の客観的知識の根柢にも感情がある。此感情が論理的當爲として我々の意識の上に現れ來るのである。我々の認識對象の世界を構成するものは實に此當爲の感情である。而かもかかる論理的感情は我々の先驗的感情の一に過ぎない。論理的範疇を超越した我等の深い人格の中には、純なる藝術によつて表はさるる如き無限に豊富なる先驗的感情的世界がある。我々は何時でも知識によつて互に理解するのではない。知識によつてのみ我々は結合せられるのではない。我々は知識によつて説明のできない多くのものを有つ。我々は多くの概念なき理解を有つ。リップスの語を藉りて云へば、我々は感情移入による理解を有つ、而して知的理解の根柢にも一種の感情移入があると考へることができるのである。藝術家は此立場から物を見るのである。斯くてゲンテの *„Viel“* に於て見るニコラス三世のそれの如く泣く足を見る。ロダンが藝術の素材として平面を

見出したと云ふのも此の如き立場から物を見たのであらう。所謂藝術美の先驗性は此處にあるのである。藝術美が知的眞に對して其自身の立場を有し、而かも一般的妥當性を要求し得るのは、之によるのである。藝術美は此の如き先驗的感情の立場に進めば進む程純となる。之に反し少しでも認識對象界に墮して因果的關係に支配せらるれば、それだけ不純となる、美感は變じて單なる快感となる。カントが純形式的なる反省的判斷作用 *reflektierende Urteilskraft* に伴ふ快感を以て美となしたのも同一の理由に基づくものである。我々の知識は判斷作用によつて成立つ。形式美は此判斷作用に伴ふ感情である、單に反省一般に對する對象の形式 *die Form des Gegenstandes für die Reflexion überhaupt* に於てその基礎を有するのである。カントに従へば我々の認識は雜多の統一である、即ち判斷作用によつて定まつて來る (*Wir erkennen den Gegenstand, wenn wir in dem Mannigfaltigkeit der Anschauung synthetische Einheit bewirkt haben.*)。美感は知識成立の條件に伴ふ先驗的感情である。無論認識對象を與へるものは限定的判斷作用 *bestimmende Urteilskraft* であつて、美感は特殊から一般に行く反省的判斷作用に伴ふのである、自然の形式的合目的性 *formale Zweck-*

missigkeit der Natur に伴ふのである。カントはそれ故に單に主觀的と考へて居る。併し余の考では反省的判斷作用とは限定的判斷作用を逆にしたものである、一つのアプリオリの上に立つ限定的判斷作用を更に廣き自由意志の立場から見たものである、アプリオリ其者、作用其者を對象としたものである。一つのアプリオリの上に立つ時、單に知識對象界のみを見るのであるが、このアプリオリが假定的、選擇的と考へられ、自由なる意志の立場に於て反省せられた時、知識以上の深い情的内容を現すのである。無論カント自身は自然科学的アプリオリの上に立つものを唯一の客觀的實在と考へて居たのであるが、現今の目的論的批評主義の立場から見れば、それは一つの假定的實在となる。自然科学的法則はカントが「實踐理性批評」の „Von der Typik der reinen praktischen Urteilskraft“ に於て云つて居る様に道徳法の Typus と考へることもできるであらう。以上カントが形式美について考へたことが内容美についても云ふことができると思ふ。所謂内容の經驗にも先驗性がある、我々の直接經驗も或一種のアプリオリの内面的發展である。カントは感覺的經驗を單に浮働的と考へ、形式によつて組織せらるべき材料とのみ考へた。

是故にその考は形式美以上に出でなかつたのである。

若し以上述べた如く考へ得るならば、眞の象徴主義は單に藝術の一派ではなくして、藝術其者の本質と考へることができるであらう。而して右の如き意味に於て又宗教や道徳の根柢と考へることもできるであらう。

意志

我々は自分が何事かを意志することを意識する。そこに一種の努力の意識がある。従來の心理學者は知識及び感情の要素と並べて意志の要素といふ如きものをも考へた。併し前に論じた如く單一感情が感覺と同列的要素として考へ得るや否やは既に疑はしく、まして意志に於て此等の要素と同列的なる要素を考へ得るや否やは疑問である。主意主義を標榜するヴェントは感覺と單一感情とを以て我々の精神現象を構成する要素となし、意志はすべての精神現象の根本的形式と考へて居る、所謂意志行爲をば情緒の窮する所、突然その表象と感情とを變ずる一種の精神的化合物 *psychische Gebilde* として論じて居る (*der Vorgang geht in eine plötzliche Veränderung des Vorstellungs- und Gefühlsinhalts über, die den Affekt momentan zum Abschluss bringt. Solche durch einen Affekt vorbereitet und ihm plötzlich beendende Veränderung in der Vorstellungs- und Gefühlslage nennen wir Willenshandlungen. Der Affekt selbst zusammen mit dieser aus ihm hervorgehenden Endwirkung ist ein Willensvorgang. Grundriss. § 14.*)。而して之

を知識の最高統一たる注意作用の感情と比較して、注意作用をも一種の内面的行爲と考へ、意志を以てすべての意識現象の統一として、之に伴ふ感情を自我の意識と考へて居る (*Wundt, Grundriss. § 15.*)。

我々が或事を意志するといふのは何を意味するか。意志には多くの場合、動作に伴ふ。併し動作は必ずしも意志の要部ではない。意志とは要するに或意識内容から他の意識内容へ注意を向けることに過ぎない、即ち注意の方向を變ずることである。Titcheinerが注意の一般的性質として *reihtribution of contents into the groups of clear and obscure* といふのは移して意志の性質を言ひ表はすことができる。努力の感といふのは之に伴ふ一種の感情に過ぎない。勿論注意に能働的と受働的との二種ある如く、意志にもヴェントの云ふ如く衝動的意志 *Triebhandlung* と選擇的意志 *Wahlhandlung* とを區別することができらう。最も嚴密なる意味に於て意志と考へられるのは能働的注意又は選擇的意志といふ如きものである。意志とか注意とかを單に *Tätigkeitsgefühl* を伴ふ意識の強き状態として考へれば、受働的注意や衝動的意志も無論意志の中に入るべきであらうが、我々が特に意志とし

て意識するのは、我々が能動的に即ち或目的を意識して表象を結合する場合、多くの動機の競争の後、その一に決する場合、即ち決断の場合に於てである。純粹意志とは此の如き自由の作用でなければならぬ。

心理學上意志は右に述べた如きものであるとすれば、意志とは意識内容の一方から他に移る作用であり、余の所謂認識のアブリオリとアブリオリとの結合と考へることができらう。意識現象に於ては、表象自體が動的である、感覺とは識別力を有つた表象自體である。斯く表象自體を動的ならしめ、之を意識内容となすものは意志である。識別力とは一種の意志である、識別的關係といふのは意志的關係の一種である。注意がなければ意識がない。注意は意識と同意義なるが如く、意志は廣義に於て意識と同意義である。主體なき作用の形式は即ち意志である。意志は *Aktualitätsgreif* の極致である。無論單に或一つの意識内容が注意せられた時、その意識の中に他への推移が含まれて居ると云ひ難いかも知れない、即ち感覺の中に自由意志が含まれて居るとは云はれないかも知らぬが、意識は一つの流といはれる様に、意識はいつでも動的でなければならぬ、他への關係を含んで

居らなければならぬ、その背後に一般者 *das Allgemeine* がなければならぬ。意識は一般者のおのづからなる分化發展でなければならぬ。單なる感覺の場合に於ても、斯くいふこともできる。Shumpf は、*„Tonpsychologie“* の始に於て、*„Relativitätslehre“* に反對して、我々の意識は何處かに單一なる感覺を以て始まらねばならぬと云つて居るが、我々の意識は寧ろ最初から衝動的と考ふべきであらう。純なる感覺といふのは反省に依つて作られたる抽象的概念である。無論物理現象に於ても或一つの力は他との關係に於て成立すると考へることができ、引力の裏面には斥力がある。併し物理現象に於ては、ニュートンの第一法則に於ての様に一つの力が働くと考へることもできるのである。物理現象に於て斯く考へ得る所以は物體の存在する空間は物體ではない、關係は物體の外にあると考へ得る故である。精神現象に於てはこれに反し關係が實在的である、意味が實在的でなければならぬ。極めて最初の意識といへども衝動的であるといふのは之が爲である。衝動的といふのは意味が實在的であることを意味するのである。我々は普通に衝動を盲目的と考へて居るが、衝動が衝動として感ぜられるのは、その中に意味即ち全體への

關係を含むが故である。畫家の眼にはすべての色は eine Tendenz nach Weiss und Schwarzを含むといふ様に、赤の感覺は自ら非赤への推移を含むのである、純粹視覺に於ては感覺はそれ自身に創造的である。茲に非赤が赤に於て含まれるといふのは、勿論反省せられた判断内容の意識の如きものを意味するのではない。現象學派の Schapp が云ふ如く Wahrnehmungsinhalt と Urteilsinhalt とは區別すべきである、sicherd meinen と urteilend meinen とは異なつて居る。一つの色の感覺の中に他への推移を含むといふのは、純粹視覺の過程としてでなければならぬ。純なる精神現象としての視覺は、その部分の中に全體を含むそれ自身の發展作用でなければならぬのである。シュトッペン は “Tonpsychologie” の始に於て ロッソ の “Man kann nicht sagen: rot werde als das, was es ist, als rot, erst dann vorgestellt, wenn es von blau (der süß, und nur dadurch, dass es von beiden unterschieden werde” といふ語を引いて sprachliche Kennzeichen “Rot, Blau” は關係を含めども、感覺自身は他との關係を含まない、赤は Hinweis auf Blau を含まない、Dissonanzen なら Hinweis auf die Consonanz を含まない、と云つて居るが、氏が此場合 Hinweis といふのは判断的意識内容を考へて居るのでも

あらう、然らざれば固定した一つの感覺といふ如きものは考へられた感覺ではなからうか。單一なる色とか音とかいふのは概念的に考へられた感覺である、判断的關係の項である。或色とか音とかが他への關係を含まぬと考へられるのは、反省した上のことである。或一つの色を反省して赤と認識した時、その色の概念の中に非赤の概念の中に含まるべき性質はない。併し具體的感覚は一つの内的力として他への傾向を含んで居らなければならぬ、real の中に ideal を含んだものでなければならぬ。この理想は概念的理想ではない、視覚的理想である、藝術的理念である。此意味に於て感覺も思想と同じく、いつでも内面的に未完成である、無限の進行である。感覺を右の如く考へることができれば、感覺を廣義に於て意志と考へることができぬ。心理學者は注意を redistribution of contents into the groups of clear and obscure と考へるが、意志とは一つの意識内容から他への推移を意味するのである。精神現象に於ての推移といふのは、有機現象の場合に於ての如く一般者の自己實現である、全體が己自身を實現し行くのである。有機現象に於ては其材料は他より得ると考へられるが、精神現象に於ては部分は全體の中にあり、全

體は部分の中にある。無關係なる他への推移は意識の統一を破り、之と共に意識は消滅するのである。選擇的意志の如き場合に於ても、何等かの意味に於て統一があるとは云はねばならぬ。マールブルク學派の考の如くアプリアオリはそれ自身に於て生産的であつて、意識が純なれば純なる程動的であるとすれば、最も深き意味に於て意志といふのは意識の純なる状態、即ち、アプリアオリの發展の状態を指すと考へることもできるであらう。余が意志を以てアプリアオリの統一、アプリアオリのアプリアオリとなすのは之に由るのである。すべて経験内容は意志の影を宿すことによつて意識現象となることができる。此意味に於て主意主義の心理學者の言の如く意志は意識の根本的形式である。單なる一つのアプリアオリの上に立つものは意味の世界である、アプリアオリが單一なればなる程、知識が抽象的となる。數理のアプリアオリに對して論理のアプリアオリはその一面であり、單一である、それだけその知識は抽象的であり、一般的である。之に反し此の如きアプリアオリの結合、即ち作用の統一が意志となり、その對象界は具體的となり、個體的となる。ライプニッツが *Arnauld* との論争に於て、*possibles* の中に神の *décrets libres* を含み、*veritas*

contingentes は神の意志によつて成立すると論じて居るが、*ratio generalitatis* のアプリアオリを結合するものは意志である。ヘーゲルの *Dialektik* に於て、抽象的立場から具體的立場に進むのも意志の發展と云ふことができる。

右に述べた如く余は一方に於て意識が純なればなる程、動的となり意志となると云ひ、一方に於てアプリアオリが單一なればなる程、知識が抽象的となると云つたのは多少の説明を要することと考へる。近代に至るまで數學者は連續に就て明晰なる概念を有しなかつた、即ち有理數と無理數との根柢に於て思想の混淆があつた。此概念が明にされると共に算術と解析との知識は純化され客觀化されたと云ひ得るが、一方から考へれば、すべて立場の混淆より來る我々の誤謬にもそれぞれ心理的理由がある、即ち充足理由があると考へることができる。茲に永久真理 *veritas aeternelles* と事實の真理 *veritas de factis* との區別がある、球の如き *notion spécifique* とアダムの如き *notion individuelle* の知識との區別がある。ライプニッツが考へたごとく神は無限の可能的世界 *mondes possibles* を考へ、此世界はその一を擇んで創造したのであつて、一個體としてのアダムの概念の中に全世界との關係が含まれて

居り、此の如き可能的世界の根柢には神の意志がある (Briefwechsel zwischen Leibniz, Landgraf Ernst von Hessen-Rheinfels und Antoine Arnauld, VIII.)。斯くの如く考へるならば、我々の實在界は所謂永久真理の結合と考へることができる。實在即ち substance individuelle はライブニッツの云ふ如く、神の意志 decrets libres de Dieu によつて無限なる永久真理の結合より成ると考へることができる。余は此考を深化し、一般化して、すべて無限なる意味の結合はそれ自身に獨立なる實在であり、意志であると考へて見たいと思ふ。例へば連続数が其中に無限の部分を含み、無限の發展を許すと考へられた時、現實の中に理想を含み、對象の中に作用を含み、分離數に對しては、その具體的根元として獨立的實在と考へられる。恰も自己の中に自己を寫し無限の部分と發展とを含む自我が獨立と考へられるのと一般である。連続數の要素は其中に作用を含むのである。カントルの集合論は數學的考察を對象より作用に移す事に依つて、無限數を有限數と同一の體系の中に入れることができたこと考へることができる。ハンケルが數學の基礎を "Princip der Permanenz der formalen Gesetze" に置いた時、數學は既に此方向に進んだのである。右の如き關係は單に

分離數と連續數との間に於てのみならず、到る處に之を考へることができる。例へば同等 Gleichheit と同一 Identität との間に於ても右の如く考へることができる。同一は無限に近づくことができるが、達すべからざる同等の極限である。而かも「甲は甲に等し」といふ判斷は同一に依つて成立し、(ヴィンデルバントの考の如く)自己に同一なるものが實在である。此等のものと全く其類を異にすると考へられる色とか音とかいふ如きものに就て見ても、一つの色と色との間に無限の色合を許すとすれば、其極限は色の連續となる、而して色の連續は色覺作用でなければならぬ。色が眞に連續するには内面的に連續せねばならぬ。内面的に連續するといふことは一つの獨立的作用となることである。而して斯くの如き内面的連續、即ち獨立的作用に於ては、アプリオリが動的であり、生産的であると云ふことができる。即ち理想が現實の中にあり、現實が理想の中にあるのである。以上數及表象自體に就て論じた所は又所謂實在界に就ても云ふことができる。我々が客觀的に存在する一つの世界といふのは、表象自體や真理自體の無限なる總和の極限である。無限に異なる種々の表象自體や真理自體は、その總和の極限に於て、客觀的實在

として、單なる意味の體系より轉じて、一つの客觀的世界となる。併し無限なる意味の結合には又無限の仕方があると考へることができ、ライブニッツの云ふ如く、神は無限の可能的世界を考へ、その極意志の原理とも云ふべき充足理由 *sufficiente* に由つて此現實界を創造したと考へることができ、可能的世界の無限なる總和の極限が此現實界である。斯くして眞の現實界といふのは意志の世界である。精神現象の世界である、我々の單なる感覺の中にも無限の可能的世界への推移を含んで居ると考へることができるのである。之に反し單に神の思惟に於て考へられた可能的世界は物體的世界である。物體的世界は具體的經驗の抽象的なる一面に過ぎない。意識の世界は物體的世界の無限なる總和の極限である。我々の自由意志は無限なる可能的世界の極限である。以上述べた如き譯であるから、一つのアプリオリの上に立つ經驗内容に於て、その單なる内容が抽象的意味となり、その無限なる總和の極限に於て内面的連續となつた時、即ちアプリオリがそれ自身の純なる状態に還つた時、アプリオリが生産的となるといふことができる。併し斯くアプリオリがその具體的根元に還るといふことは又無限の

進行に於て考へ得るから、その極限點からは單なる内容として無限の抽象的世界が考へられるのである。

右に述べた如く、甲乙の二點間に於て、如何に小なる部分に於ても、其間に無限の點があると考へることができ、その一々の點が極限點と考へられる時、此二點は互に連續すると考へられる、即ち二點間に於ける點の系列は有理數的ではなくして極限點の系列となる。而して極限點は有理數とその次位を異にしたものである、茲には立場の變更がなければならぬ、高次の立場への飛躍がなければならぬ、部分即ち要素を實在視する原子論的立場から、全體即ち關係を實在視する有機論的立場に移るのである。連續に於ては全體が働くのである、その一要素は他を排除するのではなくして、其中に全體を作用として含み、内から無限に自己と同一なる要素を生産する内面的力でなければならぬ、即ち生きたものでなければならぬ。有理數は考へられたもので、連續數は考へる作用、其者である。勿論、嚴密に云へば、有理數のアプリオリと無理數のアプリオリとはその性質を異にするものであるから、アプリオリの性質を作用の性質と考へるならば、有理數を考へる作用と無理數

を考へる作用とは相異なつたものと云はねばなるまい。余は此二種のアプリオリの區別を思惟と意志との區別と考へて見ようと思ふ。分離的 *discrete* なるものを意識する作用は單なる思惟である、*class-concept* を構成する論理的思惟の作用である。此の如き分離的要素が無限と考へられた時我々は既にそのアプリオリの性質、作用の性質を變ずるのである。カントルの集合論に於て明にせられた有限數と無限數との性質の區別は之より出づると考へることが出来る。有限數の系列が超限的 *transfinite* となることに於て、既に一種の自由性と獨立性を帯びて來るのである。併し單なる超限數は未だ獨立の實在性を有するものと考へることはできない、獨立の實在性は連續數に於て始めて之を得るのである、余は此推移に於て、思惟から意志への推移があると云ふのである。すべて或二つの性質が無限の系列に於て相近づく時、それ自身の主觀に近づくと考へることが出来る、それ自身のアプリオリ、それ自身の作用に近づくと考へることが出来る。我々が物の性質を比較して類似とか同等とかいふには、その根柢に一般概念がなければならぬ。一般概念とは一般的性質である。判斷の根柢となる一般概念、即ち一般的性質は、

それ自身に同一なるものでなければならぬ、それ自身に不變的なるものでなければならぬ。斯く己自身に同一なる一般者は判斷の基礎となるが、判斷の内容となることのできないアプリオリである、作用其者である、判斷の内容としては達すべからざる無限の方向である。例へば純なる色といふ如きものは達すべからざる無限の方向であらうが、我々は之によつて色を區別し、判別し得るのである。此の如き極限點はいつでも當爲 *Sollen* と考へられ、此の如き當爲がそれ自身の中に無限の變化を含むと考へられた時、それが作用と考へられるのである。赤の表象自體が其中に無限の推移を含む時、それが赤の感覺作用となる。有理數のアプリオリは *judgement of similarity* のアプリオリに當り、無限數のアプリオリは *judgement of identity* のアプリオリに當る。色の反省的判斷のアプリオリは有理數のそれに當り、色覺のアプリオリは無理數のそれに當る。グィンデルバントが「同等」を反省的範疇となし、「同一」を構成的範疇となした如く、「類似」とか「同等」とか「同一」とは其性質を異にすると考へられるが、又一方より考へれば「同一」は「類似」や「同等」の極限であると考へることが出来る。無限なる進行の過程は思惟であり、作用其者は意志である。

可能的なるものがその極限に於て實在的となる。茲に Substanzbegriff から Akzidenti-
alsbegriff への轉化があり、物體界から精神界への推移があるのである。

有理數的系列の無限進行の極限として無理數はコーエンの所謂生産點 der eng-
engende Punkt として現れる。是に於て全體が一つの作用となる。色もその推移
の無限に小なる極限に於て色覺作用となる。併し此等はそれぞれのアプリアオリ
の上に立つ一種の無限である。此等の無限の無限は我々が之を考へることがで
きる。眞實在は實に無限の無限である。此の如き無限の無限の立場から一つの
アプリアオリの上に立つ一種の無限を見た時、それは一種の客觀的力として考へら
れる。此の如き力の無限なる結合の極限がライブニッツの所謂可能的世界 *mundi*
possibles である。我々の考へる物體界は此の如き可能的世界の一つである。物體
界を一つの可能的世界といふのは異論があるかも知れぬが、物體界は今日の認識
論者の云ふ如く具體的經驗の抽象的なる一面に過ぎない。加之、ライブニッツの云
つた如く偶然的眞理の世界の中に神の自由決定がある、建築家が同一の木材を用
ひて種々の設計を爲し得るが如く、無限に偶然的眞理の世界が考へられるのであ

る。此の如き可能的世界、即ち考へられた世界の無限なる結合の極限が此現實界
である、而して此の如き現實界が我々の意識界である。所謂客觀界とは一つの主
觀又は有限なる主觀の結合の上に立つのであるが、意識界は無限なる主觀の統一、
主觀の主觀、即ち絶對自由の意志の上に立つのである。此處には意志の原理即ち
充足理由の原理が支配するのである、創造的綜合 *schöpferische Synthese* の因果律は此
原理に依つて成立するのである。心理的因果律の根柢には人格的或者がなければ
ならぬ。此現實界の唯一性は人格の唯一性に基くのである。我々の意識は其
孰の點に於ても種々なるアプリアオリの結合點である、種々なる世界の結合點である。
單なる感覺といへども、その具體的狀態に於ては、無限に可能なる世界を含んで居
る。無論心理學者の考へる如き自然科学的に反省せられ、對象化せられた所謂感
覺は物質の原子の如く單一なるものと考へねばなるまい。併し全人格の一作用
としての感覺は全體を其中に含んで居ねばならぬ。其中に含むといふのは單に
他と關係に於て立つといふことではなくして、コーエンの生産點に於ての様に一
點の中に曲線の全體を含むのである、即ち内に生産力を有するのである。意識現

象は *Aktualitätsbegriff* によつて成立つといふのは此故である。ライプニッツがモナドは全世界を *express* するといふのも此意味でなければならぬ、何となれば精神的實在にして始めて斯くし得るからである。最初に注意作用とは *redistribution of contents into the groups of clear and obscure* であると云つたが、此の如き *redistribution* の可能なるには、一々の意識の根柢に全體が含まれて居らねばならぬ。明珠葉を照して碧く、花を照して紅なるも、珠其者は碧にあらず紅にあらざる如く、意識の根柢には他への無限の推移を含んで居らねばならぬ、意識内容の *redistribution*、即ち注意の變換は之によつて可能なのである。生理的心理學から云へば、意識はその瞬間に限られ、之を結合するものは脳細胞にすぎないと考へるから、注意の變換も全然生理的原因に歸するであらうが、如何にして物質から精神が出るかは説明はできぬ。縦意識生滅の因果的説明として此考を許すとすると、我々の意識はかかる説明の如何に關せず、直接の内面的統一によつて成立するのである。生理的因果は如何に變ずるも此内面的自證は變ずることができぬ。況して所謂物體界なるものは深き意味に於ける意識統一を許さねばならぬとすれば、物質を精神の原因と

考へるのは本末顛倒である。内省的心理學の途を進めば、意識の根柢たる全體は各人の人格でなければならぬ。意識の内容は各人の性格である。併し何等かの意味に於て限定せられたる性格が考へられる時、意識の絶対無限性は失はれねばならぬ。アプロオリの結合の極限として絶対無限の意志は我々の反省することのできない、従つて無内容とも思はれる自由意志でなければならぬ。我々の意識の根柢には、何時でも此の如き絶対無限の意志を藏して居る。我々の意識は之によつて成立するのである。

以上述べた如き譯であるから、意志の本質は心理學者の考へる如く、自然界の一部分たる有機體に屬する經驗的自我の作用にあるのではない。此の如き意志は反省せられた意志である、對象化せられた意志である、眞の意志の射影に過ぎない。眞の意志とは反省することのできない最終の主觀への方向である。我々は自然の世界の外に歴史の世界を有つ、意志は歴史の世界に於ける實在である。心理學に於て論せられる *Triebhanlung*, *Willkürhanlung* などの區別は、意志が自己自身の本質に還る階段に過ぎない。その根柢に何等かの經驗的内容を認める間は、意志は

心理學に屬するが、絶對自由の意志としては倫理哲學の對象となる。生理的心理學は意志の内容として生理的素質を認め、内省的心理学はその内容として人格的或者を認めるのである。デイルタイの所謂類型的 *das Typische* とは此種に屬するものである。之に反し倫理哲學はすべての特殊的内容を離れて純粹意志を對象とするのである、而してその内容は世界史の對象とならねばならぬ。此意味に於て價値が歴史學の基礎となると考へられるのである。

以上論じた所だけでは、余は尙意志と感情との區別を明にして居らぬ。此區別は尙詳論する必要があると思ふが、余は大體に於て、多くの心理學者が情意 *Gemüthsbewegung* の語を以て表はす如く、兩者を同一方向の精神現象であると考へる。余の所謂アプリアリのアプリアリといふのが情意の方向であつて、意志は此方向の極限である、否アプリアリ自身であると考へることが出来る。感情は意志の立場に於ける意識内容である。人格の内容は感情の語を以て言表はさるのである。心理學に於て意志と感情とを分つにその動作を伴ふと否とによるが如く、意志は何等の意味に於ても反省することのできない意識の最高統一として、純なる行爲

でなければならぬ。行爲とは主客の合一である、眞の主客合一は單なる直觀ではなくして、純粹行爲である。此極限點に近づけば近づく程、我々は之を意志と考へるのである。之に反し此立場から見れば反省の状態、即ち主觀的狀態に於ての意識内容が感情である。此狀態を *Phantasieaktivität* と名づけ得るならば、感情は嘗て云つた如く想像作用の内容であると云ふことができる。而して此作用の對象界は可能的世界である。我々の所謂自然界もその一である。此故に我々は自然界に對して美的感情を有つ、此感情の極限に近づくと従つて變じて倫理的となるのである。

經驗内容の種々なる連續

一

或飽和度の赤と、これと飽和度に於て若干の距離を有する同性質の赤との間に、飽和度に於て無限に異なる赤の系列を入れて考へて見る。此の如き系列に於て一つの要素から他の要素への推移が極めて漸次的なる時、即ち任意の一要素と次の要素との差異が無限に小なる時、その極限に於て此系列は一つの連續となると考へられるのである。數學的に云へば、此系列の何の部分に於ても無限に分つことができるのみならず、即ち *überall dicht* であるのみならず、すべての要素が此推移の系列の極限点となることができ、且つ此推移のすべての系列の極限点が無漏れなく、此中に含まれる時、即ち自己稠密 *in sich dicht* であつて且つ閉合的 *abgeschlossen* である時、此系列は完全なる一つの連續となるのである。即ち Cantor の所謂 *Ordnungstypus* となるのである (G. Cantor, *Beiträge zur Begründung der transfiniten Mengenlehre*, § 10.)。斯く有理數に比すべき分離的要素の系列から實數の系列に比すべき連續的系列

に達するには、そこに一種の飛躍があると考へねばならぬ、即ち立場の變更がなければならぬ。極限点とは我々が分割によつて達することのできない点である。連續を理解するには、デデキントの切斷 *Schnitt* の考の如く全體から出立せねばならぬのである。

ライブニッツが "*chacune de ces substances contient dans sa nature le gem continuationis seriei suarum operationum*" と云つた様に、實在は連續的なものでなければならぬ、それ自身の中に連續を有しない分離的要素の集合は實在とは云はれない。或赤から他の赤までの間に考へられた赤の系列が極限点の集合として一連續體と考へられた時、全體はもはや物體的統一ではなくして精神的統一となる、即ちそれ自身に於て獨立なる一つの作用となるのである。心理學者は精神現象の要素として分離的なる感覺を考へるかも知れぬが、分離的と考へられる感覺は考へられた感覺であつて、生きた感覺其者ではない。單に區別せられた赤とか青とかいふものは之を精神現象的として考へることもできれば、物體現象的として考へることもできる。此等の性質が何等の外的統一の假定をからずして、それ自身に於て直に結合する

と考へられた時、我々は之を精神現象と考へるのである。精神現象とは此等の性質の内面的變化である、働く者なき働きである、精神現象の内面性、直接性は此處にあるのである。勿論連続的なるものが直に精神作用と考へることはできないかも知れない。例へば物力と雖も、獨立なる一つの作用として考へられるには、それ自身に於て連続的なるものと考へられねばならぬ。精神作用とはそれ自身に於て連続的なるのみならず、自發自展的なるものでなければならぬ、即ち己自身の中に變化の法則を含むものでなければならぬ、ライブニッツの語を藉りて云へば *lex continationis seriei suarum operationum et tout ce qui luy est arrivé et arrivera* を含むものでなければならぬ。己自身の中に變化を含むといふことは己自身の中に目的を含むといふこととでなければならぬ、即ち目的が自己の中に働いて居ると云ふこととでなければならぬ。或は、目的を己自身の中に含み目的が自己の中に働くといふのは、單に精神現象にのみでない、生物現象に於ても爾云ひ得るかも知れぬが、精神現象に於ては目的自身が意識されて居るのである、斯くして始めて眞に目的が内面的であり、目的自身が働くといふことができるのである。物體は外から働くものがない

ければ、何處までも自己の状態を維持するに過ぎない、従つて物力の結合は單に偶然的と考へられる。然るに生物現象に於ては種々の力の結合が目的に依ると考へられる、即ち一つの目的が働いて居ると考へられる。併し未だ物體現象の範圍を脱せざる生物現象に於ては、その目的が現象其者の成立に何處までも必要と考へられない、生命の機械論的説明の企てられるのは之に由るのである。カントの「第三批評」の語を以て云へば、自然の合目的性は單に規制的原理 *regulative Grundsätze* であつて構成的原理 *constitutive Grundsätze* ではない、唯精神現象に於ては目的は現象其者の成立條件となるのである、即ち構成的原理となるのである。目的の内在的に働かない、即ち統一が實在的でない精神現象はない。實驗心理學者といへども斯く考へるのである。

余は是に於て連続といふことに就いて深く考へて見なければならぬ。連続の成立するには繋がれるものと繋ぐものがなければならぬ、即ち連続の要素と連続の形式といふものがなければならぬ。後者を連続のアブリアオリと呼ぶこともできるであらう。カントは集合 *Menge* に順序附けられたもの *Geordnet* (所謂

Ordinalzahl)と然らざるものとを區別して居るが、順序付けられた集合 *geordnete Menge* には順序型 *Ordnungstypus* がなければならぬ、順序 *Ordnung* はこれによつて成立するのである。有限數に於ては基數 *Kardinalzahl* と順序數 *Ordinalzahl* とは同様に見てよいのであるが、無限數に於ては兩者は異なつたものとなつて來る。元來基數と順序數とは根本的に異なつた概念であらうが、無限數に至つて順序型が獨立性を顯はし來たるのである。順序型が特別な取扱を要することに由つて、即ちその獨立性を現し來たことに由つて、集合の理想的要素が實在的となると考へることが出来る。順序數の算法 *Operationen* は理想的要素の關係を示すものである。我が有限數から超限數の考へに進む時、既に所謂實在的なものから理想的なものに移ると考へることが出来る、即ち一層高次の實在に到ると考へることが出来る。有限數の系列は限定せられた個物の體系に相當し、如何に無限の系列に進むとも畢竟有限の範圍を超越することはできない、時空の上に限定せられた個物が如何に増加するも時空の形式を脱することができないのと同様である。我々は極限數 *Limeszahl* に於て、時空によつて限定せられた所謂經驗的事實の世界を超越

して、思惟の對象界に入らねばならぬ、極限數とはもはや知覺の對象ではなくして、唯思惟すべきものである、知覺すべきものは何處までも有限に過ぎない。我々の自己意識に就いて云へば、反省せられた自己は有限數的自己であつて、眞の自己は反省によつて達することのできない、却つて反省作用其者ともいふべき極限數的のものとして考へることが出来る。有限數に於ては個々の要素が實在的と考へられるが、超限數に至つては個々の要素よりもその順序型が實在的となる、繋がれたものよりも繋ぐものが獨立的となつてくる、即ち作用其者が獨立的となるのである。集合の何の點をも極限點と考へることのできると云ふこと、即ち自己稠密とは右のごとき理想的要素の連結と考へねばならぬ、即ちその要素の一方が作用であると考へねばならぬ。連続とは高次的なる實在の要素の體系である、連續に於てはデデキントの切斷の考に於て明にせられたごとく全體から出立せねばならぬ、ライブニッツの所謂 *imo extensione plus* である、一々の要素は獨立の要素ではなくして切斷として全體の意味を含んで居るのである、順序型の意味を含んで居るのである、即ち一々が全體の象徴となるのである。而して眞に斯く全體が部分の中に

あり理想が直に現實となると云ふには、全體が内から自己實現的に働くこと考へねばならぬ、此の如きものにしてはじめて一々の要素が全體の意味を含むものと考へることができるのである。一つの系列に於て、その要素を統一する順序型、即ち形式が物體現象に於ける空間的關係の如く單に外的なる時、それは要素に對して何等の働きも爲すことはできぬ、即ち全體が働くといふことはできぬ、此故に内面的關係として物力といふ如きものが考へられるのである。カントルが連續即ち Ordnungstypus⁹に於ては單に自己稠密であるのみならず、集合に於けるすべての根本的系列 Fundamentalreihe の極限點が含まれて居らねばならぬ、即ち全體が完全集合 perfekte Menge でなければならぬと云ふのは、順序型其者が他の力をからず、それ自身にて獨立的に働くこと云ふことでなければならぬ。集合の系列の極限點が盡く集合の中に含まれて居ないと云ふことは、その集合の統一が十分ではないといふことを意味して居る、自己の作用が他に因つて破られて居るといふことを意味して居る。完全なる連續に於ては全體が一つの獨立なる、それ自身に於て十分なる無限の作用でなければならぬ、それ自身に於て全き一つの作用の内面的發展で

なければならぬ。一つの系列が極限點をそれ自身の中に有つといふことは、一つの體系がそれ自身の中に目的を有つといふことを意味して居る、自動的といふことを意味して居る。此意味に於て物力は嚴密なる意味に於て閉合的ではない、閉合的なるものは有機的なものでなければならぬ。併し眞に閉合的と云ふべきものは意識統一による精神作用の外にないといふこと云ひ得るであらう。他によつて理解せられるものはそれ自身に於て獨立なるものとは云はれない、それ自身の中に目的を有するものとは云はれない。我々の經驗内容が物理的見方に於ての様々な經驗其者の内面的性質によらずして、その背後に不可知的¹⁰を考へることに依つて統一せられた時、その體系はそれ自身の中に目的を有つとは云はれない、即ちその經驗の系列は己自身の中に極限點を有つとは云はれない。例へば種々なる光の經驗がそれ自身に於て理解せられずして、その背後にエーテルといふ如き物理的連續を考へられた時、光の經驗はそれ自身に於て何等の實在性をも有せぬ、單に實在の符號となる。その背後に考へられた物理的實在も亦それ自身に於て内面的に理解せられず、相互の結合が外面的であり、偶然的であり、他の手段として考へ得

る時、それ自身の中に目的を有するものとは云はれない。物理的連続は他に依つて與へられた連続、假定せられた連続であつて、それ自身に依つて立つ、それ自身によつて存在する連続ではない。普通に合目的と考へられる有機的現象に於ても、要するに尙その目的は他によつて考へられたもの、假定せられたものであるから、機械論者の考へ方の如く生命を全然機械的にも説明し得るのである。唯一から他に内面的必然を以て移り行くものに於てのみ眞に目的を己自身の中に有するといふことができる、即ち精神作用に於てのみ眞に目的を己自身の中に有すると云ふことができるのである、精神作用のみ眞に閉ぢられた完全集合である。

以上述べた所によつて、翻つて余の最初の問題を考へて見よう。或飽和度の赤と、之と飽和度に於て若干の距離を有する同性質の赤との間に無限の系列を考へて見る。此系列が嚴密なる意味に於て連続的と考へられた時、我々は一層高次のなる實在に到達するのである、分離的なる感覺の系列といふ如きものから視覚作用といふ如き一つの獨立せる働きとなるのである。我々は一つの集合 Menge を濃度 Mächtigkeit を有する單なる集合として考へることもできれば、その要素が一

種の順序を有するものとしてこれを順序付けられた集合 *geordnete Menge* と考へることもできる、即ち之を基数として見ることもできれば、之を順序数として見ることもできる。何等の順序なき基数の世界は表象自體の世界である、單なる意味の世界である、此の如き表象自體を一つの順序によつて統一した時、順序数の世界となる、順序数となつても濃度を失ふのではない、依然基数の性質をも具へて居る、唯之に順序型の統一が入つて來るのである。斯くして成立する順序数の世界は既に統一せる一つの體系として一種の獨立性を有し、一種の實在性を帯びて來る。併しこの世界に於ては尙ほ要素が實在性を有つて居る、その順序型は單に要素間の理想的關係に過ぎない、要素其者に對して外的である、恰かも我々の物體的世界に於て個々の原子が實在性を有するのと一般である。有限數に於ては基数と順序数とを同様に取扱ひ得ると云ふのは之に由るのである。之に反し濃度が無限なる時、即ち超限數の場合、順序型が基数と離れてそれ自身の實在性を有つて來る、超限數に於ては順序数は特別の取扱を受けねばならぬ、是に於て理想的なものが實在的となる、關係が實在となるのである。例へば赤の感覺的經驗がその飽和

度に従つて配列せられた時、赤の飽和度といふことが此集合の順序型と考ふべきであらう。此系列が無限と考べられた時、赤といふ順序型が實在性を有つて来る。無限なる進行が可能であるといふことは型其者 *Type* が力を有することである。最終の要素がなくしていつまでも次の要素に移り行かねばならぬといふのは、要素はその背後に横たはれる或物の表現であつて、背後の或物が實在であり要素はその限定に過ぎぬといふことである。是に於て赤といふ型は一つの力となり、一つの作用となる。無論此力はまだ物體的とも精神的ともいふことはできぬ、兎に角、赤といふ現象が無限に現れ得ると云ふまでである。此の如き力を表はすものがカントルの超限数とか極限数とかいふものである。集合の要素即ち概念の外延を作用の内容或は客觀的對象と考へ、集合の型即ち概念の内包を作用其者或は主觀の性質と考へて見ると、前者がその極限に於て矛盾に陥つた時、後者が更に高次的なる作用の内容として、即ち一層高次的なる客觀的對象として現はれ来るのである。時間、空間の考が二律背反 *Antinomie* に陥るのは間接に此等のものが構成的形式たることを示すのである。連続といふのは右の如き極限数の系列である。

力の系列である。カントルの完全集合といふ連続は、すべての點に於て能働的作用でなければならぬ。我々は是に於て單なる作用即ち考へられたる作用といふ如きものから、力の概念に到達することができる。静力学 *Statik* の力の概念から動力學 *Dynamik* の力の概念に到ることができる。赤の經驗の系列が何の部分に於ても無限に分つことができ、其何の點も極限點となることができるならば、この赤の經驗は聯想心理學者の云ふ如き感覺の系列といふ如きものではなくして、獨立せる一つの力となる。併し此系列が眞に閉合的として完全なる連続となるには、嚴密なる意味に於て内面的統一を有たねばならぬ、即ち完全なる一つの内面的連続でなければならぬ。而してそれ自身の中に目的を有し、それ自身に依つて成立するもの、即ち精神的作用にしてはじめて此の如き連続と云ふことができるのである。順序数を組織する順序型を此體系のアブリアオリと考ふるならば、型其者の連続とも考ふべき精神作用はアブリアオリのアブリアオリの上に立つアブリアオリの結合と考へることができらるであらう。此意味に於て精神現象の如何に受働的なものでも物體現象とその次位を異にして居る。勿論物理學者はカントルの連

續は解析の基礎として物力を表はすと考へるであらう。ニュートンの Fluxion は連續的力の數學として起つたのである。併し物力といふのは與へられた經驗の説明として考へられた假定である、それ自身の中に目的を有つて居ない、己自身に依つて己自身を説明しない、他の爲の説明である。力學といふ一體系に於て即ち純粹物理學の世界に於ては、物力はそれ自身の中に必然性を有し、それ自身の中に目的を有し、それ自身に依つて立つ一つの連續であらうが、知覺的經驗の事實の説明としては單なる假定に過ぎない。力が量的に分つことができることと云ふことが既にその内面的統一のないといふことを意味して居る、生きたもの、心あるものは分つことはできぬ。ライブニッツが延長について云つたことは物力についても云ふことができる。直接なる知覺的經驗はそれ自身に於て連續なるものであるが、我々は之を思惟體系の中に入れようとする時、ポツカレのいふ如く $A=B, B=C, C \wedge D$ といふ形に於て非連續となる、之を匡正するため物理學的力とか實在とかいふものが考へられるのである。併し知覺的經驗がそのアプリオリを異にする思惟の體系に入つてその獨立性を失ふと共に、所謂物理的世界も他の爲の説明と

して他に依つて實在性を有するが故に、それ自身に於て完全なるものではない。

一つの集合 Menge がその極限點即ちその Ableitung を含む時、此集合は閉合的 abgeschlossen と云はれる。斯く一つの集合がその極限點を含む時、此集合は既に獨立の作用と考へることが出来る。集合のすべての點が極限點となる時、之を自己稠密 in sich dicht といふ。自己稠密なるものはすべての點に於て生きたものである、作用の集合である。併し、單に自己稠密であつても尙すべての極限點を含まない時、即ち集合と Ableitung と一致しない時、未だ完全集合 perfekte Menge といふこととはできぬ。完全集合にして始めて獨立の意識作用といふことができる。

二

余は前節に於て、飽和度に於て異なる或一種の色の系列が一つの連續體となつた時、それは一つの精神作用と考へられねばならないと論じた。今此等の作用の結合に就て考へて見よう。色覺の性質は三次元的と考へられる、即ち色覺は色彩の調子 Farbenton の外に飽和度 Sättigungsgrad と光度 Heiligkeit とを有つて居ると考へられる。一つの色は三次元的連續に於て考へられねばならぬ。飽和度の系列に於て連續的と考へられた二つの色は色彩の調子の推移に於ても連續的と考へ

られねばならぬ。此の如き二様の連続は如何なる關係を有つであらうか。色が色彩圓 *Farbenkreis* の方向に於て一つの連続と考へられる時、此の如き連続の順序型 *Ordnungstypus* となるものは何物であるであらうか。飽和度の連続に於て一種の色の性質がその型 *Typus* と考へらるるに對し、色調の連続に於ては色の一般的性質即ち色自體といふ如きものをその順序型と考へることができ、而して一の色調が飽和度の方向に於て、或は光度の方向に於て、無限の連続を形成し得ると考へることができ、色調の連続は順序型の連続と考へることができ、色自體は型の型と云ふことができ、勿論その孰を一般的とし孰を特殊とするか、孰を主とし孰を従とするかは、立場によるのであるが、兎に角我々の感覺界とは順序型の結合の世界である。所謂性質的なるものの相互に關係する世界である、即ち表象自體が實在となる *Aktualität* の世界である。向に飽和度に於て無限に異なる或一種の色の系列がその極限に於て一つの連続となつた時、一つの精神作用となると云つたが、之と同様に色彩圓に於て色調の連続も順序型の結合として所謂色覺作用と名けらるる一つの精神作用となるのである。唯前者の場合

ではその *Typus* が *ähnlich* であつたが、後者の場合に於ては *Typus* が *mähnlich* と考へられるのである。或は異なる型の連続といふことは考へ得るものでないといふであらう。併し種々なる色調は色覺として他の感覺と區別せらるるだけの共通性を有し、此統一性に於て一つの連續を考へることができ、色調一般ともいふべき型に於て一つの順序を考へ得るのである。嚴密に考へれば所謂飽和度といふ如きものも決して純なる量的區別ではない、やはり一種の質的區別である。余は飽和度の場合に於て連續と云つたと同様の理由によつて、色彩圓の場合に於ても連續と云ふことができると思ふ。

勿論我々の感覺的意識が無限の連続であると云ふ如き考に對しては、種々の理由から反對が起るであらう。心理學者は感覺の性質は互に *disparat* であり、且つ種類に於ても有限であると考へて居る。併し斯くの如き考は意識内容に就いて考へて居るので、意識作用に就いて考へて居るのではない。感覺的經驗が全然受働的であつて、それ自身に何等の創造性をも有しないと考へない以上は、斯く云ふことはできぬ。或は作用として考へても、時間、空間の上に於て又能力の上に於て有

限にして非連続的であると云ふこともできるでもあらう。我々の感覺は時間空間の上に於て有限であるのみならず、ヴェーバーの法則によつて明なる如く *least perceptible difference* 以下を意識することはできない、而かも我々は其間に無限なる意識的區別の可能を考へ得るのである。併し此の如き反對も我々の感覺界とか知覺界とかいふものを之と異なつたアブゾリのの上に立つ思惟對象界から見て起る考であらう。作用としての意識は縦感覺の如きものであつても、空間時間によつて限定することはできない、意識成立の根柢には超時空的或物がある。 *least perceptible difference* といふのは或一つの意識から他の意識に移り行くに當り、若干の距離に於て前の意識との差異を意識するに必要な刺激量の最小限度を指すに過ぎない。ヴェントはヴェーバーの法則は統覺作用の量を示すものとすら考へて居る。ポアンカレの $A=B, B=C, A \wedge C$ といふ如き矛盾は知覺界と思惟界との交渉より起るのである。突然光が強くなつたとか、色が變じたとかいふ如き場合でも、それは内容の變化であつて、作用其者の連続が失はれたのではない、*contrast* の場合に於ての様に却つて一種の統一を明にするのである。物體現象に於ての如く統一が内在

的ならざるものにあつては、内容の變化は直に力の不連続と考へられるでもあらうが、對立を成立せしむる統一其者が内在的なる精神現象に於ては、内容の對立は作用の不統一を意味するのではない、識別は却つて作用の連続を示すものである。作用其者から離されて見た、單に對象化された線は嚴密なる意味に於て連続といふことができぬであらう、唯一々の點がコーエンの所謂生産點 *der erzeugende Punkt* と見做されることに由つて一つの連続線が意識せられるのである。之と同じく色でも光でもその一々がそれ自身の内に種々の傾向を藏する具體作用として意識された時、即ち我々が、純粹知覺のアブゾリの上に立つ時、知覺的經驗はその種類に於て無限、*in suo genere infinitum* として、それ自身の中に統一を有する連続となる。Conrad Fiedler は次の如く云つて居る。 *Solange wir uns nur sehend verhalten, kann uns die Welt nur endlich, niemals unendlich erscheinen. Und dennoch giebt es eine Unendlichkeit, die nichts mit dem Gebiet des Denkens zu tun hat, die sich lediglich als eine Unendlichkeit der sichtbaren Welt offenbart. Vor dieser Unendlichkeit stellt nur der Künstler und wer ihm zu folgen vermag. Sie eröffnet sich nur d. h. wo in der Wahrnehmung des Auges jenes Streben seinen Ursprung nimmt,*

die empfangenen Vorstellungen zu immer höherer Klarheit und Bestimmtheit emporzubilden. (C. Fiedlers Schriften über Kunst, S. 309.) それ自身の上に立つ獨創的なもののみ真に無限である。ライブニッツは *Nouveaux Essais*, Chap. XVII に於て無限を論じて *Mais à l'écart d's qualités originales ou connaisables distinctement, on voit qu'il y a quelquefois moyen d'aller à l'infini* と云つて居る。氏に従へば真の無限はすべての結合に先だつものである。思惟によれる色の判断は、要するに此の如き直覺的意識が基となるのである。以上述べたところと正反對の見方にて我々の意識現象は全然性質的であつてその一々が分つことのできない單一であると云ふ理由から、意識の無限連続といふに反對する人もあるであらうが、かかる考も意識を反省して見た抽象的見方から起るものに過ぎない、具體的意識はそれ自身に於て動的なる無限の進行である。

以上述べた如き種々の反對は尙十分に論ずべき必要があるであらうが、此等の議論に入込むのは今余の目的ではない。余は寧ろ直截に余の考を述べて見たいと思ふ。Ludwig Coellen, *Die rene Malerei, zweite Auflage* によれば近代の印象派は從來

の藝術が現在の知覺と過去の記憶との結合に依つて形成された固定せる物を畫けるに反して、瞬間的印象を現さうと務めた。之は從來の主觀主義に對する反抗であつて、新なる *objectivistisches Lebensgefühl* の結果である。Combet, Monet, Liebermann に至るまで、新なる Technik によつて此客觀主義を遂行しようとしたのである。而してこの新藝術は *das die Bildlichkeit schaffende Medium* として光を用ゐた。すべての物は光の中に溶され、物は唯特殊の性質の Lichtmasse としてのみ存在を有して居る。此世界には記憶や思惟の入込む餘地はない。van Gogh に至つて此の如き *objectivistisch-anschauliche Anschauungsweise* を一層徹底して印象派の人々の表はした自然の *Oberflächenzusammenhang* を更に *lebendigen Kräftezusammenhang* にまで深めた。ホッピに於ては空間は一つの *dynamischer Organismus* となり、普通の個物は此中にその存在を失つてしまつた、萬物は *Kräfteymbolik* となつて居るのである。若し現代の新繪畫が右の如き意義を有するものとするならば、現代の新藝術は思惟の混淆を離れて、純粹知覺の世界を對象とすると云ふことができるであらう。そこにフィードレルの云ふ如き思惟の無限と異なつた無限の世界の展望が開かれる。我々は思惟の

作用其者に純一なることに依つて、無限数の世界を理解する如く、フードレルの所謂 *vorstellen's Bewusstsein* の連続たる藝術家の造形作用 *Gestaltungsfähigkeit* に純一なることによつて、藝術的無限の世界が開かれるのである。我々の知覚を有限にして非連続的と見るのは思惟の立場に立つて知覚の世界を見るによるのである、己自身の順序の上に立たないものは有限である、死物である。

併し余は是に於て右に云つた如き藝術家の對象界と、マイノングの對象論に於て論ずる如き單に對象間の關係といふ如きものとを區別しなければならぬ。等しく自然科学的存在の立場を離れ、經驗内容其者に基く對象界ではあるが、マイノングが幾何學的關係に比する色其者の關係と、藝術家が無限の連続として見る純粹視覚の對象界とは同一物ではない。そこには恰も數學的真理と物理學的真理との間に於ける如き區別がなければならぬ。後者は或意味に於ける前者の結合である。繪畫や音楽は色や音の非人格的なる一般的關係を現すものでなくして、此等の結合に依て或意味を現すものである。然らば此意味とは如何なるものであるか。言ふまでもなく、それは概念的の意味ではない。藝術の目的を自然の模

倣と考へたり、教化の手段と考へなどするのは、皆誤れる考に基くのである。新藝術の意義は向にツェルレンの語を引いた如く、嚴密に概念的、主觀の混淆を去つて、純なる客觀の中に没頭することである、萬有神教的となることである。併し藝術に於て客觀に純一となると云ふのは所謂自然的客觀に純一となるといふのではない。近代の藝術が自然派から印象派に、印象派から後期印象派に轉じなければならなかつたのは、之に由るのである。浪漫的藝術に於ては物の外殻を破つて、其根柢に於ける無限の直觀に到達するのである、自然の *pantheistisch gefasste Einheit* から客觀的宇宙精神の統一に達するのである。ツェルレンによれば此の如き傾向の先驅をなしたものは F. Hodler であるといふ。印象派は物を單に *Lichteinheit des Bildraumes* としたが、フードレルは物を *Bewusste Einheit* として見た、物の精神的意義を見た、物を象徴として見た。併し既にフン・ホッホに於て見らるる如く印象主義其者を徹底して浪漫主義に到達したものは Gauguin と Matisse とである。二人共にホッホの用ゐた *dynamische Farbe* にメロデーの力を與へた、即ちホッホの *dynamischer Organismus* から純粹な *Lyrismus* に轉じた、眞に能く自然其者に即して自然を精神化し

たのである。彼等は物の本質を直接の感情に求めたのであるが、而かも單なる感情に求めたのではなくして、感情の生起する *lebendige Aktivität* に求めたのである。此の如き動機から *Picasso* などの *Kubismus* も生じたのであると云ふ。是に於て客觀的純化の方向に進んだ新しい藝術は、其徹底する所に於て、却つて主觀的なる或物に到達したと考へることが出来る。併しその主觀的或物といふのは概念的、主觀ではない、直觀其者の中に見出さるる主觀である。

藝術は個性を現すとは能く人の云ふ所である。此處に藝術の生命がある、個性を離れて藝術はない。併し個性とは如何なるものであるか。個體或は個物とは世界に於て一あつて二なきものでなければならぬ、即ち一つの體系に於て唯一の地位を占めるものでなければならぬ。併し或一體系の唯一の地位といふだけでは一個體といふことはできぬ、それ自身に獨立なる一個體は自己の中に他と區別せらるべき無限の關係を含んで居なければならぬ。ライプニッツがモナドの中に全世界との關係を含むと考へたのも之に由るのである。單に同質的と考へられる物質の原子の如きも、それ自身に同一なるものとして一つの個體と考へられる

には、それ自身の歴史を有たねばならぬ。少くとも時間、空間の關係に於て他のすべてと區別せらるべき無限の關係を有すると考へられねばならぬ。特殊なればなる程、全體と關係に於て立たねばならぬ、即ち豫定調和 *Harmonie préalable* の上に立たねばならぬ。ライプニッツの如く眞理に於ては述語が主語の中になければならぬ *praedicatum inesse subjecto verue propositionis* といふ考から出立せば、個體はその中に無限の述語を含んで居らなければならぬ。アダム個體概念の中にアダムに起るすべての事件が含まれて居なければならぬ。一般的眞理と云ふのは之に反し、主語の中に含まれたる内容が有限なるものであると考へることが出来る。一般的なるだけ、それだけ有限である。その内容が有限より無限の極に達する時、種屬概念 *La notion spécifique* から個體概念 *La notion individuelle* に入る。此處に永久眞理 *verités éternelles* と事實眞理 *verités de fait* との區別がある。而して此推移は數學の極限概念に於ての如く、單なる程度の區別ではなくして、性質的區別でなければならぬ、即ち立場の飛躍がなければならぬ、認識の對象を内容から作用の方に移さねばならぬ、順序型が實在的とならねばならぬ、カントルの *Ordnungstypus* に於ての様に

すべての點が極限點とならねばならぬ、個體は作用の連続である。永久真理の命題に於てはその主語が或限定せられたアブリオリと考へられるが、事實真理に於てはその主語たるものはアブリオリのアブリオリと考へられねばならぬ。而して此の如きアブリオリのアブリオリの統一は意志である、ライブニッツが可能的世界 *les mondes possibles* の根柢に神の自由意志 *decrets libres* があると云つた如く、偶然的真理 *vérités contingentes* の根柢に意志があるのである。個體は意志の内面的統一である。斯くして初めて *chaque de ces substances contient dans sa nature legem continuat-ionis seriei suarum operationum et tout ce qui lui est arrivé et arrivera* と云ふことができるのである。或一つの要素が個體として己自身の中に全體の意味即ち全體との關係を藏するには、コーエンの生産點の考に於ての如く動的とならねばならぬ、特殊の中に一般を含む個體は一つの發展的作用でなければならぬ、特殊なる要素は全體の象徴とならなければならぬ。物理的世界に於ても、ライブニッツがデカートに反對した如く、實在は靜的でなくして動的でなければならぬ、物體の本質は *extension* にあるのではなくして、*activity* にあると云ふことができる。併し右の如き意味に

於て眞に部分の中に全體を含む個體はライブニッツのモナドの様に精神的のものでなければならぬ。それ自身の中に内面的統一の理由を有しない、隠れた或物に依つて統一せられた物體現象は他に依つて立つものであつて、眞に部分の中に全體を藏し、それ自身に依つて立つ個體とは云はれない。斯くして眞に個體的なるものは精神的でなければならぬ。個體の知識が偶然的と考へられるのは、要するに、意志は認識對象とすることはできぬ、即ち反省することはできぬと云ふことに歸するのである。個體の達すべからざる奥底は此處にあるのである。多くの人は物體現象を偶然的と考へるのであるが、物體現象を構成する種々の性質はそれぞれの立場に於て必然的であつて、偶然性は此等の内容の結合にあるのである、即ち結合の不可知的なる所に物體現象の偶然性があるのである。併し斯く物體現象の背後に考へられる統一は既に對象化せられたもの、認識對象の世界に屬するものとして却つて必然性を有すると考へなければならぬ。物理的には嚴密なる意味に於て *chance* といふことはない。ライブニッツが可能的世界の背後に神の自由意志があると考へた如く、我々の直接經驗の統一が偶然的真理の基となる、而し

て此統一の本質は即ち意志である。事實的眞理が理性以上の確實性を有すると考へられるのは之に依るのである。意志が主觀的と考へられ、隨意的と考へられるのは對象化せられた個人的意志を考へる故である。眞に創造的なる自由の意志は概念的意識を消磨して純客觀的となつた時、即ち主客合一となつた場合に働くのである。此時我々は眞の個性、眞の自己を見ることが出来る。此處に我々は概念的知識を超越して動かすことのできない事實的眞理に撞着するのである。我々は之に就いて無限の説明を試みることが出来るであらう、併し事實的眞理は概念的知識を以て達することのできない極限である。

余は藝術の目的とする眞の個性とは右に述べた如きものであると思ふ。客觀的に純化されて來た新藝術が却つて主觀的或物に到達したと考へられるのも之に由るのである。眞に無關心なる美的感情即ち純粹感情とは此の如き超概念的なる個性の統一に伴ふものである。美的意識の内容とは此の如き個性の内容を表すものである。所謂純粹對象の世界の成立するには、その基たる作用がなければならぬ、作用とはアブゾオリ自身が實在となつたものである、その具體的狀態で

ある。我々が或一種の色を無限の連続として意識する時、之を意識内容として意識するのではない、作用として意識するのである、順序型として意識するのである。色が種々なる方向の推移に於て無限なる一連続と考へられる時、色といふ一つの性質的一般者がそれ自身に於て獨立し、一作用となるのである。藝術家の純粹視覚 *reines Sehen* とは之をいふのである。之と同様に音も一つの連続的體系として、純粹聽覺といふものを考へることが出来る。心理學に於て視覚作用又は聽覺作用といふのは、此の如き純粹視覺又は聽覺の認識對象即ち自然界に投げられた射影である。併し我々の具體的經驗は單なる視覺や單なる聽覺ではない、我々の具體的經驗は無限なる作用の連続である。而して此の如き無限なる作用の統一が我々の人格である。我々の人格とは此の如き作用の無限なる系列の極限である。藝術家の對象となる個性といふのは、此の如き人格的統一の無限なる典型の一である。例へば此處に一枚の畫があつて、眞に能く個性を現して居るといふことは、此畫が大なる人性の唯一なる一典型を現して居るといふことである。眞の個性といふのは大なる人格を離れることではない、大なる人格の中に於て唯一の位置

を見出すことである、主観的となることではない、客観の中に自己を没することである。而して斯く大なる人格の中に於て唯一の位置を占めるといふには、前に個體の場合に於て云つた様に、一點中に他の凡てとの無限の關係を含んで居なければならぬ。併し斯く一點の中に他との無限の關係を含むといふことは如何なることを意味して居るか。己の中に他を含むには己自身を超越しなければならぬ。印象派が従來の藝術に反して萬物を光の中に溶かし、物を *Lichteinheit* として見たこと云ふも、印象派の目的は單に一般的なる色や光の關係を現さうとしたのでないことは言ふまでもない。畫家の寫し出さうとするのは一種の實在である。併し此實在は我々の認識對象となる所謂概念的實在ではない、未だ概念的加工の加はらない、或は概念に現すことのできない直覺的實在である。而して我々の眞の個性は認識對象の世界に現れるのではなくして、此の如く概念的、主観を滅した所に現れるのである、概念的、世界を超越した所に現れるのである。而して單純なる色とか光とかの世界が斯く超概念的實在を現し、人格的統一の世界、即ち絕對意志の對象界に於て、無限の意味を含むことによつて唯一の個性を現し得るのは、色や光

の作用即ち視覺作用が作用自身の立場を超越することによつて可能となるのである。色が無限なる連續の極限に於て作用となり、作用はその無限なる連續の極限に於て一つの人格となる、即ち絕對意志の作用となる。而して連續に於てはすべての點に於て全體の意味を含む如く、一種の純粹意識も連續の一點として、その中に全人格的意義を含み得るのである、即ち純粹視覺の *Gestaltungstätigkeit* に於ては、一種の作用に基づく經驗の中に全體の意味を寓することができるのである。純粹視覺が自ら行爲を伴ふと考へられるのは、認識對象界を超越して靈肉一如の象徴界に入るが爲である。

余は尙個體と個性との區別に就いて一言して置かなければならぬ。個體とはライブニッツが「アルノー」の論争に於て、アダムの概念に就いて云つた様に、豫定調和によつてその中に他のすべてとの關係を含み、此世界に於て一あつて二なきものを云ふのであるが、個性とは藝術の作品に於て見る如く、それ自身に於て生きたものでなければならぬ、生命を有つたものでなければならぬ、即ち獨立の價値を有するものである。個性には時間、空間上の唯一性は必ずしも必要ではない、個性を

有し得るものは自由意志を有つたものでなければならぬ、單に因襲に従つて衣架飯糞たるものではなくして、創造的或物を有つたものでなければならぬ。創造的といふことは超認識界に於て即ち情意の世界に於て、一あつて二なき特色を有することである。純理論的なる學問の如きものでも、或民族又は個人の個性を帯びると考へられるのは、此意味に於てでなければならぬ。畫や彫刻に於て個性といふのは此の如き意味の個性である。

三

飽和度に於て若干の距離を有する同性質の赤の間に、赤の無限に異なれる系列を入れて考へて見ると、此系列の極限に於て性質其者が獨立の一作用となる、即ち順序型が *Idealzahl* として特別の取扱を受けることとなる。併し色の經驗は飽和度の立場に於て無限の連続と考へ得るのみならず、調子の方向に於ても又光度の方向に於ても亦無限の連続と考へる事ができる。色の具體的經驗は此等の種々なる順序型の結合である。我々に直接なる具體的經驗は作用の結合である。併

し我々の具體的經驗は單なる色の經驗に限られて居るのではない、無限なる作用の連結である。作用としての性質の無限に豊富なる連結である。而して此の如き作用の無限なる系列は其極限に於て一つの人格となる。自由意志を本質とする人格とは無限なる作用の統一である、人格は作用の作用、アブリオリのアブリオリである。藝術の目的とする個性とは此の如き對象界に於ける實在である。縦令、繪畫は色や形の經驗に即し、音樂は音の經驗に即するにせよ、その表現する實在は人格の一片鱗でなければならぬ、此意味に於て物理的實在とは根本的に其次元を異にして居るのである。

我々の意識内容の統一に於て、相反する二つの方向を區別することができる。一つは個性的又は個物的統一であり、一つは一般的統一である。色が繪畫に於ての如く個性的に、又自然界の物體に於ての如く個物的に結合すると共に、種々なる色の性質は色一般なる概念によつて統一せられるのである。それで嚴密には三種の統一を區別することができる、即ち一つは一般的統一、一つは個物的統一、一つは個性的統一である。一般的統一に基くものは一般的真理である、即ち永久真理

である例へば數學的真理とか、對象論的真理とかいふ如きものである。一般概念が此等の統一の基となり、此等の真理の基となる。次に個物的統一に基くものは偶然的真理 *veritas contingentes* 即ち事實的真理 *veritas de fait* である。個物に自己の中に他の無限の關係を含んで居る。個物に於ての一つの出來事は他と無限の關係によつて成立つて居る。第三の個性的統一の上に立つものは藝術的真理である。これより少しく此等の統一、此等の真理の關係を考へて見よう。苟くも一般的妥當性を有する真理は何の場合に於ても超個人的なる意識一般といふ如きものに基くと見ねばならぬ。超個人的人格はその一部分たる個人的人格と同じく、一方に於て一般的なると共に、一方に於ては個性的である。自由意志を本質とする人格はその何の部分をも自由に反省して之を一般化することができると共に、絶對的唯一性を要求するのである。意識一般は自然科学的世界の基となると共に歴史的知識の基となる、即ち *historische Vernunft* となるのである。自己の經驗内容の何の部分をも自由に反省することのできる人格の否定作用は、人格の本質を成す自由意志であると共に、知識に於ての抽象作用である。自由意志と抽象作用

とは共に作用の作用たる人格が自己自身を碎く作用である。所謂表象自體といふのは此の如き作用の對象界であり、我々の經驗の一般化的作用といふのは此の如き方向を指すのである。我々は絶對自由の人格なるが故に、如何に抽象し、如何に統一するかは自由であるのである。數學的知識の基となる統一作用は之と稍其趣を異にして居る。同じく一般的と云つてもそれ自身に内面的統一を有し、夫自身の體系を成して居る。カントの考を藉りて云へば、我々の知識は理解と直覺との結合によつて成立し、理解力の形式即ち範疇と純粹直覺の形式即ち空間、時間と結合したものが數學的知識であり、内容ある直覺即ち知覺と結合したるものが經驗的知識である。カントでは數學的知識は未だ嚴密なる意味に於て知識といふことはできないのであるが、兎も角數學的知識は客觀的對象の條件として、それ自身の客觀性を有すると考へることが出来る。カントでは理解性と直覺性との間に於ける内面的關係統一が十分明になつて居らぬのであるが、カントが數學の基とした純粹直覺の洗練された *homogenes Medium* は論理的判斷の基たる *heterogenes Medium* の具體的根元であると考えることが出来る。フヒテ曰く *deine innere*

Tätigkeit, die auf etwas aussser ihr (auf das Object des Denkens) geht, geht zugleich in sich selbst, und auf sich selbst. Aber durch in sich zurückgehende Tätigkeit entsteht aus, nach obigen, das Ich. Du warst schon in deinem Denken deiner selbst dir bewusst, und dieses Selbstbewusstsein eben war jenes unmittelbare Bewusstsein deines Denkens. Also das Selbstbewusstsein ist: unmittelbar; in ihm ist Subjectives und Objectives unzertrennlich vereinigt und absolut Eins. (Versuch) 10. 此の如く unmittelbares Bewusstseinがフイテもゴム如く眞の Anschauungであつて、此處に作用自身の直接の結合がある。Substantialitätから Aktualitätへの推移がある。物體的から精神的への推移がある。是に於て一つの判断を翻つて見る反省作用が可能となるのである。肯定の裡面に否定を含み、一つの肯定作用を翻つて見る Homogenes Mediumの立場は斯くして成立するのである。知識の客観性といふのは抽象的立場からその根元たる具體的立場に進むことである。單なる作用の立場から作用と作用との結合の立場に進むことである。此故に數理の世界は論理の世界に對して一種の客観的實在界となるのである。數理の世界とは單なる抽象作用即ち否定的意志の上に立つ對象界である。單なる抽象的作用即ち否定的意志は又それ自身に

於て内面的統一を有する無限なる作用として一種の對象界を有つ、此對象界が數理の如き純なる抽象的眞理の世界、即ち永久眞理の世界となるのである。我々の純なる理性といふのは抽象的自由意志とその本質を一にして居ると考へることができる、共にすべての特殊なる經驗内容を否定して一つの中心に結合する可能性を表すのである、共に純なる作用と作用との結合である。フイテの所謂己自身の中に行く内面的作用即ち自覺が兩者の本質である。作用より直に作用に移り行く理性の内面的必然の感情は他面に於て意志自由の感情である、理性と自由意志とは一つの作用の兩面とも云ひ得るであらう。すべての經驗の否定的統一は如何なる經驗内容をも離れ得る可能性を意味する點に於て、知識の抽象的作用であり、如何なる經驗内容をも超越して自由に之を綜合し得るといふ點に於て、自由意志である。全體の反省たる意志は一方に於てすべての範疇を超越する創造的意志である。道徳的自由意志が直に理性を内容とする理性的意志と考へられるのは之によるのである。視覺が色を以て其内容とする様に、思惟は純なる認識對象を以て内容として居る。視覺は無限なる色の關係をその對象界とする如く、思

惟は永久真理の世界を其対象界として居る。而して純粹視覚が藝術的動作として現れる如く思惟は意志として現れるのである。

純粹思惟の対象界たる永久真理は右の如きものとして、個物的真理とか個性的真理とかは如何なるものであらうか。我々は普通に思惟の内容は一般的であつて、視覚や聴覺の經驗内容は特殊であるとか考へて居る。併し各に固有なる感覺的基礎の上に立つ藝術も或一派の人々の考へる如く全然無内容ではない、單に無内容なる藝術は遊戯に墮する外はない。藝術の内容は概念的思想にあらざるは言ふまでもないが、各の藝術は各の藝術に固有なる内容を有つ、その感覺的要素と離すべからざる意味の内容を有つ、他によつて翻譯することのできない意味内容を有つて居る。此の如き各藝術に固有なる *Walter Pater* の所謂 *imaginative thought* とは如何なるものであるか。かかる藝術的内容とは我々の視覚や聴覺の作用が人格的作用として直に其全體と結合する所に現れるものである、即ち人格的統一の一部分となる所に現れるものである。若し斯く云ひ得るならば、反省的思惟が全經驗を寫し全經驗を表はし得る如く、視覚も聴覺も全經驗を表象し得ると云ふこ

とができるであらう。此意味に於て前者を一般的といふことができれば後者も一般的といふことができる。知識的表象は經驗をその儘に寫すといふも、表象、太陽、*Vorstellung* „*Sonne*“ は輝くのではない。藝術が各自に特有な言語を以て他を表現する如く、思想もその特有なる言語を以て他を表現するのである。今視覚と思惟とを比較して見ると、視覚の対象論的世界は純粹思惟の対象界に當り、此等の対象界はそれ自身に於ては永久不變と考へられるが、此等の真理が現實となる場合には人格的要素の混入を脱することはできぬ。人格的要素の混入といふことも種々の意味に於て考へられるであらうが、藝術的要素としての色の經驗の中にも含まれる人格的内容といふのは單に主觀的作用の特徴といふ如きものではなくて、対象其者の本質を成して居るものである。此場合、色其者は却つて一種の表現手段となるのである。すなはち純視覺的經驗内容に就いて對象論的のものとは藝術的のものとを分つことができるのである。翻つて思惟體驗に就いて考へて見ると、純なる思惟の内容は色の對象論的内容に當り、藝術的内容に當るものはカントが *Verstandesbegriffe* + *Wahrnehmung* より成るといふ所謂經驗界と考へることがで

きる。所謂經驗界とは人格的統一の對象界である。視覚作用が單にそれ自身として考へられないで、作用の統一たる人格の一作用として具體的全體の一部となつた時、それが藝術的作用として藝術的内容をやどす如く、思惟作用が單に抽象的思惟作用としてではなく、人格的一作用として考へられた時、經驗的知識が成立するのである。Schema „Zeit“ は此の如く思惟の孤立的立場を否定して人格的統一に移る具體的立場の第一歩である。此方向を進んで思惟が全人格の統一と結合した時、全人格的經驗の内容を寫すこととなる、即ち所謂經驗界が成立するのである。經驗界とは思惟の立場に於て全經驗を寫したものである。或一つの體系が他を寫し他を表象するには、二つの體系が一つの體系に於て内面的に結合せられねばならぬ。無限のモノイドは神の意志 *Deus in se* に統一せられて、互に相表象することができるのである。作用の作用たる人格的統一の上に立つ精神活動にして、はじめて部分の中に全體を藏し其一が他を表象することができるのである。我々の表象とか概念とかいふのは純粹思惟の立場に立つて全經驗内容を寫す手段である。すべて或一つの作用の立場から他を表象するには、それ自身に特有な

る言語がなければならぬ。ロダンは物體が平面の集合より成立する事を見出したと云ふのは、藝術自身の純なる言語を見出したのでもあらう。藝術家は學者が概念の世界を有つ如く色や形の世界を有つ、藝術家のテクニクは學者の論理に相當するのである。それで藝術的對象の中に個性を含み人格的要素を含むと云ふも、直接に藝術の對象となり内容となるものは純なる藝術の語によつて寫された客觀的世界である、例へば印象派の人々が表さうとした如き *Lebensgefühl* の世界である、ホッホの表した如き *lymnische Fabel* の世界である。斯く藝術が概念の束縛を離れてそれ自身の立場に立つ時、即ち人格的統一の上に立つ時、その對象界は人格的基礎を有し個性を表すこととなるのである。學問的真理は純客觀的にして何等の人格的要素を含まない様であるが、客觀的真理が深ければ深い程、學者の個性を表すと同様である。此方面に於て總ての藝術が一に向ふのみならず、學問と藝術とも結合することができるのである。ベーターが有名なるジョルジョーネ論に於て *All art constantly aspires towards the condition of music* といふにも真理がないとは云はれない。此意味に於て學問の中に就て音樂の地位に當るものを求めるな

らば哲學であらうと思ふ。嘗てレッシングが論じた如く各藝術はそれぞれの領域を有し、pictorial charm と musical charm とは互に相異なるにもせよ、繪畫に音樂的なものもあり、詩や文章に繪畫的なものもある。藝術は各自に特有なる感覺的要素の異なるに従つて、他によつて表すことのできない特色を有すると共に、一方に於て綜合的統一の意義を有すると考へることが出来る。種々の學問もそれぞれの立場に於て各自獨立の眞理を有し、各その分化的方面に進むと共に、一方に於て綜合的統一に進むことができる。而して個々の學問の據つて立つ所のアプリアリを反省し之を綜合統一するものは哲學である。此點に於て藝術と哲學との接觸がある。藝術も學問も各その特有なる言語によつて客觀界を表象すると共に、一方に於て人格的内容を含み個性を表現して居る。繪畫は色や形によつて、音樂は音によつて、學問は概念によつて客觀界を表象すると共に人格的内容を含むのである。

右に述べた如く我々は藝術の内容に就ても、知識の内容に就ても並行的に同様のことが云ひ得るのである。色の對象論的關係は論理、數理の知識に當り、色や形

の結合から成る藝術の對象界は我々の所謂經驗界に當る。光や色の言語によつて寫された經驗界が藝術の對象界であり、概念の言語によつて寫された經驗界が所謂經驗界である。藝術の世界は光や色の無限なる結合の世界であり、經驗界とは概念の無限なる結合の世界である。是に於て色や光は單なる意味ではなくして視覺作用となり、概念も單なる意味ではなくして認識作用となる、即ち共に人格の一作用となることによつて、一つの客觀界を得るのである。藝術界は單に主觀的と考へられ、經驗界は客觀的と考へられるが、藝術家も彼等の間に互に論議すべき一つの客觀界を有するのである。我々は思惟の範疇によつて經驗を統一する如く、畫家は視覺の範疇によつてこの世界を色や光の統一として見るのである。經驗界の知識といふも色々に考へられるであらうが、その基たるものは事實の眞理である。自然法とは此等の事實を基礎として一般化したものである。事實の知識とは如何なるものであるか。或一つの出來事を唯一の事實として知るといふには、之を時間、空間の上限定せられたものとして見なければならぬ。而して斯く限定せらるるといふことは此物が他と無限の關係に於て立つことを意味し

て居なければならぬ。或一點が他と無限の關係に於て立つといふには二様の考をなすことができる。一つは或一點が全體系の一點として他から無限の關係に於て定められるといふことであり、一つはライブニッツの單子に於ての如く自己自身の中に於て無限に他を表象する事である。前の意義に於ては單に個事となり、後の意義に於ては個體となる。前の意義に於ては統一の主體のみが唯一の個體となり、他はすべてその様態となる。此の如き統一が徹底的となる時、すべての異質性は否定せられて、すべてが同質的となる、此傾向を進んだものが物理的世界である。後の意義に於ては、之に反し部分の一方が個體となると共に、其中に他との無限の關係を含んで居なければならぬ、即ち他のすべてを表象するものでなければならぬ。而して此の如き關係を有するのは精神的なるものにして始めて可能であるのである。自然科学的統一に於ては異質性が同質性に還元せられ、量的に統一せられるのであるが、意識的統一に於ては異質的なものがそれ自身の存在を有し、質的に統一せられるのである。質的に統一せられるとは内面的發展の統一として統一せられるといふことであり、而してライブニッツのモナドロジーに於て

の如く無限なるモナドは神の意志の決定によつて豫定調和の下に立つものとして、はじめてその一が無限に他を表象することができるのである。我々の或意識現象が個性を有するといふのは、己が人格を表現することによつて、他を表象することができ、従つて他と無限の關係に於て己が個性を維持することである。偶因論者 Occasionalisten の考の如く我々は神を通じてのみ心と物とを結合することができる。嚴密に考へれば反省其者を自己の中に含む眞に具體的な我々の精神は單なるモナドではない、モナドは尙考へられた精神であつて、考へる精神ではない。我々の自己の底に自己其ものをも否定し得る絶対意志がある。我々はこれによつて他の精神と結合し、物體界と結合することができるのである。マルブランシンの *Dieu est très étroitement uni à nos âmes par sa présence, de sorte qu'on peut dire qu'il est le lieu des esprits, de même que les esprits sont en un sens le lieu des corps (De la recherche de la vérité.)* といふ語に深い意味があると思ふ。すなはち部分の中に全體を含む個物的限定に於ても二様に考へることができ、一つは *le présent est gros de l'avenir et chargé du passé* といふ様に縦の限定、即ち時間上の限定であり、一つは *l'harmonie*

præcibilibus. といふやうに神の意志に於ての限定である、即ち横の限定、空間的限定である。單なる縦の限定によるものは我々の個人的意識の如きものであつて、所謂唯心論はこの上に成立するのであるが、我々が神の意志の上に立つとき、我々は物と心との統一の上、即ち主客合一の上に立つのである。我の現在の意識は無限に他を表象することによつて、心は即ち物、物は即ち心となるのである。單なる物體界といふのは神の絶對否定の一面に過ぎない、神は絶對の否定と共に絶對の肯定である。元來神の本質は絶對の愛である、愛はすべての人の人格を統一すると共にすべての人格を立するのである。他の人格を敬すれば敬するほど真に自他合一の愛が成立するのである。此意味に於て愛は真に反對の合一 *coincidentia oppositorum* である。一般的なるものと特殊なるものとの眞の結合は愛に於てのみ可能である。眞の豫定調和は神の絶對の愛の上に立たねばならぬ。我々は藝術的意識に於て此統一に接觸するのである。

そこで尙一度明白に科學的内容と藝術的内容とを比較して見よう。すべての經驗内容を否定的に統一する絶對意志の作用が思惟である。他の内容を排する

否定的統一は却つて他より排せられる一作用として他の作用と同じくそれ自身に特殊なる對象界を有つ、論理、數理の世界がそれである。此點に於て思惟は視覺や聽覺と同じく、人格の一作用に過ぎない。唯、思惟の内容が他に比して一般的である、と考へられるのであるが、我々は色の經驗、音の經驗の中に於ても特殊と一般とを區別することができ、色には種々の性質があり種々の色合があるのみならず、具體的感覺は光度を有し飽和度を有して居る。色の一般概念とは此等の作用の統一作用の性質である、恰も全人格の統一作用の内容として思惟の内容が考へられると同様である。一般的といふのは統一作用の性質である。思惟作用が否定的統一から肯定的統一に移る時、即ち我々が人格の具體的統一の立場に立つ時、その内容として所謂經驗界が成立するのである。而して此の如き經驗界は相反せる兩方向に分れ、その間に種々の階段を生ずるのである。その否定的統一の方向に當るものが所謂自然科學的知識となり、その肯定的方向に進むに従ひ、心理的となり、歴史的となる。經驗科學的知識はその一般的統一の方向に於ては自然科學となり、その個體的統一の方向に於ては歴史となるのである。藝術的内容と

いふのは此等の經驗科學的内容と異なり、視覺とか聽覺とかいふ如き部分的なる作用が絶對意志の否定的統一即ち思惟作用の支配を脱して、全人格の統一を表現しようとする所に現はるのである。視覺とか聽覺とかいふのは人格の一作用として思惟と同じくそれ自身の抽象的内容即ち色や音の對象論的世界を有つのであるが、思惟の立場から全人格の内容を表現して經驗界を生ずる如く、視覺や聽覺の立場から全人格を表現する時、藝術の世界が生れるのである。藝術の世界は科學の世界と同じく人格的統一の上に立つ具體的世界である。畫家が或形を見、音樂家が或音を聞くのは、科學者が或物を考へる如く、具體的實在として之を見、之を聽くのである。唯その内容が有限で部分的であるだけ、思惟の場合に於ての如く一般的に自由なることはできないのであるが、之が爲に藝術の内容は無限なる人格の世界を表現することができないとは考へられない。或一つの藝術の世界はその具體性に於ては知識全體の世界と同じである、即ち我々の所謂經驗界の全體とその性質を同じくするのである。普通に知識は一般的であり藝術は特殊であるといふが、所謂一般的知識といふのは知識の一面であつて、その全體ではな

い。知識の一面は歴史に於て見る如く個性的である。我々の經驗界即ち知識の世界は自然科學プラス歴史の世界でなければならぬ。認識の對象たる具體的實在は一般的なると共に特殊である。而して此兩方面を統一する綜合的知識の立場が哲學の立場であるから、前に云つた如く哲學的知識内容は藝術的内容に相當し、哲學者の世界觀は直に藝術の内容と結合するのである。デュルタイの云ふ如く哲學、藝術、宗教は同一の根より生ずると考へることができる。各の藝術は各自の感覺的要素に特有なる内容を有つて居るのではあるが、ペーターの考の様に藝術は一に傾くといふにも眞理がなければならぬ。此の如き共同の内容は言ふまでもなく認識對象ではなくして感情的内容である。此の如き感情的内容に於て藝術は哲學と抱合するのである。若し作用と作用との無限なる結合作用即ち想像作用 Phantasio の對象界が純なる感情の世界であるとすれば、藝術と哲學とは想像の對象界に於て結合するといふことができる、即ち想像作用が兩者の根柢を成すと考へることができ。唯、藝術はその内容の狭小なるだけ直觀的統一に傾き、哲學はその内容が包括的であるだけ之に反すると考へられるのである。人格の中

心たる思惟の立場に於て徹底的統一に到らんとする時、我々は道德的意志の立場に立たねばならぬ。此立場に於て眞に内外の統一を見る事ができるのである。恰も純粹知覺の表出運動が藝術的動作として現れる如く、哲學的思索の表出作用は道德的行爲として現れるのである。此意味に於て道德的行爲は哲學的思想の象徴である。我々は道德的行爲に於て *extensio* と *cognitio* との兩屬性を統一して、絶對無限なる神に接することができるのである。道德的意識内容は一般的なると共に特殊的でなければならぬ。道德的行爲は一般と特殊との結合點である。單なる哲學者は手なき藝術家の如きものである。我々が道德的意志の上に立つ時、豫定調和をも超越して内外合一の具體的世界を意識するのである。併し斯くいふものの眞に内外融合して一々の部分が直に全體を含む絶對意志の立場は宗教の立場であると云はねばならぬ。宗教の立場に於て眞に當爲と存在とが合一し、一の實在は純眞なる藝術品となる。宗教の立場は人格の中心に於て即ち絶對意志に於ての藝術的立場である。哲學的思索と道德的行爲とは宗教に於て眞に內的結合を得るのである。

四

我々に最も直接なる具體的經驗即ち眞實在は人格的であつて、無限なる作用の內面的結合である、無限なる作用自身の結合である。此の如き無限なる作用自身の統一の立場を余は絶對意志の立場といふのである。概念的思惟の立場から考へれば達すべからざる極限點の如きものであらう。神秘哲學者の考へた如く神はすべての範疇を超越して居ると考へねばならぬ。併し思惟の立場からは斯く考へねばならぬとしても、直下には轉々自在にして純眞なる此實在あるのみである、之より單純にして明白なるものはない。此の如き絶對意志の否定的統一が理性であつて、此作用は一方に於て實在の認識作用となると共に、一方に於て實在を創造する道德的意志ともなる。道德的世界は自然界の中にあるのではなくして、自然界は道德界の上に立つのである。知識は意志の後に隨うてその跡を整理するに過ぎない。右の如き理性は我々の人格の中心として全人格の統一作用たると共に、一方に於て單なる一人格的作用としてそれ自身の抽象的對象界、即ち純なる

論理、數理の世界を有つのであるが、部分の目的は全體にあるのであるから、理性がそれ自身の具體的根元に向ふ時「Kategorien + Wahrnehmung」たるカントの所謂經驗界が現れて來るのである。論理、數理、幾何と進み來つて、所謂經驗内容と結合するに當つて、その中間としては力學的對象界といふ如きものも成立するであらう。力學的對象界は、理性が單なる抽象的立場から人格の一作用として具體的となる時、即ち動的となる時、現れ來るのである。理性が動的意志となることによつて、力の對象界を見ることができるのである。カントの綜合的原理 *synthetische Grundsätze* の對象界は斯くして成立するのである。理性自身が作用の形を取ることによつて、他の無限なる作用を統一する形式となることができるのである。幾何學的には線とか形とかいつたものは、力學的にはすべて力の量となり方向となるのである。範疇に圖式「時間」*Schema „Zeit“* が加はる時、すべてが動的となり、力學的世界が成立するのである。右の如く理性其自身が動的となり即ち意志となり、力學的形式によつて全經驗を統一する時、我々の所謂經驗界が成立し、物體界とは此方向を進んだものである。然るに精神界とは思惟の立場から逆に此人格的體驗の原状

態に還つて見たものである、即ち作用と作用との直接の結合たる *Aktualität* の形式によつて成立する實在界である。實驗心理學の對象界の如きものから歴史の對象界に至るまで、此等の現象はもはや自然科学的因果律によつて統一することはできないで、内面的統一の因果律によつて結合されねばならぬ。併し全然以上述べた如き思惟の立場即ち認識作用の立場を棄てて、深く全人格の内面的統一の立場に入る時、我々は認識對象界を超越して道德的行爲の世界に入る。我々はもはや一つの立場から他を寫すのではなくして人格的作用其者となるのである。是に於ては對象と作用とが一となる。我々は道德的行爲に於て物たると共に心である、内外を打して一實在となるのである。作用と作用との結合の窮極する所もはや何等の外面的統一をも許さない、唯行爲あるのみである、肯定も否定もない、絶對意志の具體的作用あるのみである。此立場に住して打成一片、隨處に主となる時、我々は宗教の立場に立つ、宗教的直觀に於ては萬里一條の鐵、内外の區別もなければ自他の區別もない。

以上余が人格的體驗の中心とも見らるべき思惟作用の立場に就いて云つたこ

とは、人格的體驗の部分的作用に就いて云ふこともできる。視覚も聽覺も人格的作用として、具體的にはそれ自身の對象界を有つ獨立自由の作用である。抽象的には色自體又は音自體の對象論的世界を有つのであるが、此等の作用が全人格の内面的活動の中に入つて其内容を射影する時、我々は藝術の對象を有つ、藝術の立場は部分的體驗に於ける宗教的立場である。ショーペンハウエルの云つた如く藝術家は神來の瞬間に於ては宗教家である。而して此論文の始に於て述べた如くすべて一つの立場から、その背後に横たはる具體的立場に到るには、立場の超越がなければならぬ、即ち極限概念によつて之と結合するのである。色の表象自體はその無限なる系列の極限に於て作用となる。我々の視覺作用といふのは色調や光度や飽和度の無限なる系列の統一である。我々の人格とは此の如き作用の無限なる連續の統一である。表象自體がその無限なる總和の極限に於て獨立の精神作用となる如く、無限なる作用の總和はその極限に於て自由なる人格となるのである。而して各の作用はそれ自身に固有なる對象界を有ち、我々の經驗的世界といふのは作用の作用たる意志即ち人格的統一の對象界であるが、道德的意志の

立場から見ればこの世界は自由意志の Typus として無限なる世界の一に過ぎない。自由意志の對象たる道德的世界は無限なる自然界の總和の極限である。而してヘーゲルの「概念」に於ての如くその何の部分に於ても全體の相を具する人格的體驗に於ては、繪畫や音樂に於て見るが如く、視覺とか聽覺とかいふ如き部分的體驗も直に主客合一の具體的體驗の相を現することができ、此等の體驗に於ても種々なる立場、種々なる世界を具して居ると考へることができ、併し藝術は單に部分的なる具體的立場に過ぎないから、種々の立場、種々の世界の具體的立場に於ける眞の關係は唯、哲學、道德、宗教の全人格的立場に於てのみ之を明にすることができ、我々の文化發展は之を中心として抽象的より具體的に進むのである。新らしい文化は古き文化發展の極限として現れ來るのである。我々の眞の永久の生命は Titians や Alasver の生活の上に求むべきではなくして、若くして十字架の上に釘付けられた基督の上に求むべきであらう。

意志實現の場所

意志的動作即ち行爲の過程を分析して考へて見ると、先づ我々の自己を峻す現狀と異なつた願はしき自己の状態即ち所謂目的觀念なるものが現はれ、我々の意識が傾斜の状態をなすと共に、此兩者を結合するため、過去の經驗から目的に達する道行の觀念即ち手段の觀念が喚起され、此結合が十分と考へられた時、即ち客觀的に可能と信せられた時、決意の感情と共に動作に移るのである、即ち主觀的意志内容から客觀的事實に轉するのである。心理學者の云ふ所に從へば、我々が外的動作に移るには、單に過去の運動の感覺を想起すれば足るのである。運動の表象が我々の意識を占領すると共に、我々の身體は自らその運動を起すのである。此間何物をも入る餘地はない、此以上に何等の説明もできない、恰も外界刺戟が如何にして感覺内容となるかを説明することができぬと一般である。意志過程を右の如く考へて見ると意志の本質は内から外に出づるにあるのである、即ち主觀的内容より客觀的事實に轉する所にあるのである。之を目的の實現といふ。意

志が情緒や欲求と異なるのは此點にあるのである。勿論事實上この區別をなすことが困難とも考へられるであらう、併し本質的には此の如き區別をなさねばならぬ。我々の手が麻痺して居たため、企てられた動作が實現されなかつたとしても、實現を目的として決意した場合、之を意志として道德的判斷の對象となすことができるのである。併し之がため意志の本質は全く内面的であつて、客觀的事實には何等の關係がないと考へるならば、それは亦誤である。かかる場合に於ては、意志は何處までも不完全と云はねばならぬ、若しその儘にして止むならば、その決意は不眞面目であつたと云はねばならぬ、單に願望に過ぎなかつたと云ふことができる。縦、心理學者の云ふ如く意志的動作は表出運動から發達したものとしてみても、情緒と意志との區別は此處にあるのである。一は單に主觀的なるに止まり、一は何處までも客觀的たらんとするのである。或は意志の本質が必ずしも客觀的實現を要しないことを明にするため、内面的意志の例をあげることもできるであらう。併し内面的意志といはれるのも、多くの場合に於て未來の實現を意味したものである。又數學の問題の解決を意志する場合の如く、その結果が全く内面的

と考へられる場合に於ても、我々は之によつて主観的なものより客観的或物に結合しようとするのである。我々の自己が客観的な数の世界と結合しようとするのである。数の世界も物理的世界の如く客観的である。或は数の世界といふ如きものは時空を超越してそれ自身に完全なるものであつて、之に對して意志の實現といふ如きことは無意義であると考へられるでもあらう。併し斯く云へば物體界といへども、それ自身に完全なる一つの世界であつて、我々の意志によつて動かす得べきものではない。自然科学に於ける意志自由の否定は之から起るのである。意志に於て我々の主観が客観を動かすのではない、唯客観と結合するのである。主観が客観に結合する所に意志の本質が存するのである。

ツントに従へば意志行爲とは情緒の窮する所、突然その表象と感情とを變ずる一種の精神的出來事であると云ひ、ティチナーは注意の本質を意識内容の分布の變更と考へて居る。心理學の立場としては斯く考へる外なからうと思はれるが、意識現象の内面的性質より考へる時は、意志とは我々の意識内容の客観化である、主観から客観への推移である、此處にその本質があるのである。主観から客観に移

るとは何を意味するか、私が手を動かさうとしてその運動が實現せられたといふのは如何なることを意味するか。所謂物體界といへども、我々の直接經驗の事實を離れて存するのではない、今日の認識論に於て考へられる如く我々の經驗内容を一般的自我の立場から統一したものに過ぎない。我々の意志が行爲として外界に實現されたといふも、此の如き體系に於て認められるといふに過ぎない。私が手を動かさうとして過去の運動の感覺を想起したとすれば、「私の意識」といふ範圍内に於てはそれにて十分であるが、純知識的な自我の對象界、即ち所謂外界にては、之を認めないかも知れない。唯我々の目的とした事實が一般的自我の對象界に於て認められた時、目的が實現されたと考へられるのである。併し斯く認められるといふも新なる内容が加はるのではない、唯我々が立場をかへて見るまでである。我々が手を動かした時、Inervationsgefühlの如きものはないとしても、その結果として起る一種の内感覺を反動的に感ずるであらう、手が麻痺して居て實際の運動が起らなかつたとしても此種の感覺はあるであらう。外界に於て果して手の運動が起つたか否かを知るには、他の感覺の證明を俟つの外はない。眼の感

覺の如きは最も此役目をなすものである。併し視覺といへども客觀的でないことは言ふまでもない。我々が一つの客觀的事實を認めるのは種々なる感覺の相互訂正の結果でなければならぬ、種々の經驗を比較綜合して何等の矛盾なき時、はじめて之を客觀的として認めるのである。併し此の如き考によつては、我々の知識は何處まで行つても、眞に客觀的な或物に達することはできぬ、客觀的とは達することのできない理想に過ぎない。

我々は普通に物と心、内と外との對立を無造作に主觀、客觀の對立と同一に考へて居る。併し少しく考へれば此等の概念の曖昧なることは云ふまでもない。數理の如きものは普通に思惟の内容として主觀的と考へられるのであるが、數學的眞理の如きは時空を超越して、それ自身に永久なる對象である、我々の如何ともすることのできない客觀的眞理である。色其者の關係、音其者の關係についても同様のことをいふことができる。此場合、我々をして客觀的と考へしめるものは内容其者の内面的必然性である。之に反して、特殊的なるもの、偶然的なるものが主觀的と考へられるのである。併し又數理の如きものが主觀的と考へられるにも、

その理由がなければならぬ。數理の主觀的と考へられるのは、具體的經驗から見て單に抽象的なる思惟内容に過ぎないからである。物理的對象界の如きも此意味に於て尙抽象的であり、主觀的であると考へることもできる。すなはち前と反對に特殊的なるもの、偶然的なるものが却つて客觀的と考へられるのである。併し所謂具體的經驗が數理の如きものに對して特殊的、偶然的と考へられるのは單に特殊のとか偶然的のとかいふのではない。具體的經驗が特殊のと考へられるのは全體系の中に於て唯一の位置を占めるものとして限定せらるるといふことである、即ち單に特殊のといふのではなくして個體的といふことである。その根柢には一般的にして必然的なるものがなければならぬ、その偶然的と考へられるのは全體系の統一が不可測なるに由るのである。數理の如き單純なるアプリアリの上に立つものはアプリアリのアプリアリの上に立つ具體的經驗の體系に比して抽象的である。所謂抽象的體系は全體系の一部として限定せられて、はじめて客觀的となることができるのである。カントが理解力の範疇が知覺と結合して客觀的知識となると考へたのも之に由るのである。單に偶然的なるものは主觀

的なるものに過ぎない、具體的經驗が偶然的と考へられるのは内面的必然を缺くといふのではない。嘗て數理が内面的必然として客觀的と考へられたと同じ理由によつて具體的經驗も客觀的と考へられるのである。

右に云つた如く眞に客觀的なるものは内面的必然の體系である。之に反し、偶然的なるもの、部分的なるものが主觀的と考へられる。たとへば幾何學の或一つの問題を考へるに當つて、何處から考へたか、如何なる大さの圖を描いたか、如何なる誤解をしたか、此の如き數學的必然に關係のないことはすべて偶然的であり、従つて主觀的と考へられる。併し一方から考へれば、此等の事實は具體的經驗の事實として客觀的と考へられ、數理の如きものは却つて主觀的と考へられる。要するに、或一つの内面的體系に入り得ざるもの、又全體系を盡し得ざるものが主觀的と考へられるのである。主觀、客觀の對立を以上の如く考へるならば、我々の自我とは如何なるものであるか。心理學者は意識現象は物體界に於ける生物の神經中樞に伴ふ局部的現象であつて、自我とはその統一作用であり、自己意識とは此作用に伴ふ感情に過ぎないと考へて居る。従つて我々の意識現象は單に主觀的と

考へられ、自我はその中心と考へられるのである。併し此の如き自我は考へられた自我であつて、考へる自我ではない。我々の眞の自我は考へられた自我ではなくして、考へる自我でなければならぬ。時間、空間、因果の上に限定せられ、對象化せられた自我によつて、意識の統一ができるのではない、却つて自我の統一によつて時間、空間、因果の關係は成立するのである。此故に我々の意識界は物體界とその次元を異にして居る。意識界が物體界の中に含まれるのではなく、意識界が物體界をその對象として含むのである。所謂物體界は却つて主觀的と考へることもできるのである。

私が或目的を以て運動の觀念を想起して動作に移つたとする。此場合、私の企圖は意識内の出來事として主觀的と考へられる。併し一方から考へれば私の意志實現の場所たる所謂客觀界も要するに私の對象界の外に出でない、窮極に於て自我の外に出づることにはできない。翻つて考へて見れば、我々の主觀的企圖といふのは先驗的自我の統一の對象界に於ける特殊なる一内容に過ぎないと見ることもできる。反省された自己は眞の自己ではないとすれば、我々は意志の實現に

よつて、即ち所謂客觀界と結合することによつて、却つて眞の自己に到ると考へることもできる。我々は普通に知識に於ては物が心に働き、意志に於ては心が物に働くと考へて居るが、知るべく與へられたものは我によつて要求せられたものである。我々が客觀的知識に向つて進むといふことは眞我に向つて進むことである、自己の發展完成であると考へることができる。我々は渴するから水が我々の欲望の對象となるも、水其者の性質は自我とは何等の關係もないと考へられるが、深く考へれば水の性質といふのも自我の作用によつて成立すると考へることもできる。我々の視覚作用とか觸覺作用とかいふものによつて所謂水の性質といふ如きものが成立するのである。水の物理的又は化學的性質といふことすら我の思惟作用によつて成立するのである。無論、單に主觀的作用によつて客觀的事物の性質が生ずるのではないと云ひ得るであらう。併し一方より考へれば所謂所與の經驗といふも我々の自我と無關係なるものではない、云はば大なる自我の一部分であるといふことができる。それでは私が渴くから水を飲む即ち欲求を満足するといふことと、彼は赤い、此は青いなどいふことと如何なる點に於て同

じく、如何なる點に於て異なるか。我々の渴といふのも一種の有機感覺である、此點に於ては、我々が外物を見て、青いとか、赤いとかいふのと異なつたことはない、身内の感覺なるが故に特に我々の意識に近いといふことはない。唯我々の所謂有機感覺には強い感情が伴ふまでである。勿論外界感覺にも感情の伴ふことは言ふまでもないが、有機感覺は特に強き感情を伴ふ所から著しく自己の状態として考へられるのである。渴といふことが單に有機感覺として其中に自己を含むのではない、有機感覺の體系が更に大なる統一的體系の中に入つて、他の體系に關係することによつて感情を得、自己の状態と考へられるのである、感情とは此統一的體系の状態である。斯くして渴といふ有機感覺が自己の状態と考へられると共に、水を飲むといふ所謂目的觀念が起つて來る。併し目的觀念も亦目的觀念其者としては單に所謂知的表象にすぎない、その結果は單に外界の事實に過ぎない。然るに之が目的として考へられるのは、之が自己の状態として感情を伴ふ故である。目的觀念の眞の内容は外界の事物ではなくして、自己の状態其者である、自己が自己自身を目的とするのである。

右に述べた如き欲求我と知識我との關係を明にするため、我々は物と心との區別我と非我との對立に就いて考へて見なければならぬ。自我とは如何なるものであるか。自己が自己を省みる、知るものと知られるものとが直に一である、此處に自我の真相がある。物にあつては知るものと知られるものとが異なつて居るが、自我に於ては此兩者は直に一でなければならぬ。物は知られると否とに關せず、それ自身にて存在すると考へられるが、知られない自我は存在し得ない、若し此の如き自我があるといふならば、それは自我ではなくして物である。超越的の自我といふも、我々の意識を超越して、意識と無關係であるといふのではない、我々の意識成立の深き根柢をなすものである、自己同一の最も深き根柢である、此意味に於て最も直接なる自己である。我々が自己の内容と考へるものは却つて反省せられた自己である、外面的たるを免れない。自我があるといふことは物があるといふことと同義ではない、自己自身の尾を食ふことによつて生きる蛇の如く、自己は自己自身を滅し行く所に、眞の自我があるのである。働きの中に働くものがあるのである。フイヒテが *Ich setze im Ich dem teilbaren Ich ein teilbares Nicht-Ich entgegen*

と云ふ様に、主より客へ、客より主に移り行く所に、眞の自我があるのである。龍樹が如水居熱際、處熱覺悟非寒際理亦然といふ如く、眞我は有無の際にあるのである。非我の對立によつて限定せられた我は眞の我ではない、眞我は非我其者を定立するものでなければならぬ。即ち *das Ich setzt sich selbst als beschränkt durch das Nicht-Ich* の知識的自我ではなくして、*das Ich setzt das Nicht-Ich als beschränkt durch das Ich* の實踐的自我でなければならぬ。要するに我々の自我の本體は内面的必然の推移にあるのである。意味即事實なる内面的推移の體系が自我である。此間、些少の罅隙を容るれば、忽ち自我は失はれるのである。此故に自我は最も具體的なる實在である、自我は主觀ではなくして、主體 *subjectum* である、即ち最も客觀的なるものといふことができる。此意味に於て意志行爲其者の中に自己があるのである。我の意志は其始に於て物に接し、其終に於て又物に接して居る。渴も未だ自己でない、水を飲み了した時も自己ではない、自己は前者より後者に至る推移の作用にあるのである。意志の目的はその終點ではなくして、その過程にあるのである。意志に於て主觀が客觀に結合するといふも、相對的主觀より相對的客觀に結合す

るのではない、却つて具體的自我を實現するのである、自我の本體を明にするのである。

視るといふことがあつて色があり、聴くといふことがあつて音があり、考へるといふことがあつて物がある、與へられたものは求められたものであると考へることもできる。斯く考へれば所謂知識對象界も自我の一部と考へられるのであるが、又一方からは此の如き知識界の中心たる自我、即ち知識我と、渴して水を求め、飢えて食を求め、自我即ち欲求我とは、其間に大なる相違がある如く考へられる。此疑問は如何にして解くべきであらうか。我といふのは單に知識對象界の中心といふ如きものではない。カントがすべての知識に伴ふと云つた「Ich danke」の「我」とは單に符號ではない、一つの創造作用でなければならぬ。然らざれば我々は之を眞の自我といふことはできぬ、否、「我」といふ意識すらも生じないのである。自己は知識的對象界を含むものではあるが、此對象界が直に自己ではない。恰も渴の感覺、手の運動、水を飲むなどいふ變化が單なる知識的對象の系列としては、其間に何等の自己をも見出すことはできないと一般である。唯、我々は此等の系列の統

一の上に於て一つの人格性を見出すことができる、而して此等の對象は却つて人格的狀態として其中に含まれるのである。知識我の意識も知識的對象界即ち所謂客觀的世界と、第二次的性質より成る所謂主觀的世界との闘争の上に現れるのである、否、此關係を成立せしむる内面的統一である。第二次的性質の世界も要するに一個の客觀界である、眞の自我は此中にあるのではない、自我は主觀と客觀との相觸れ相摩する所に存するのである。嘗て云つた如く我々の意識界即ち現實界といふのは *Aktualitätsbegriff* による意味即ち實在の世界である。純なる意味の世界はそれぞれのアプリアオリの上に立つ、論理、數理の世界は純粹思惟のアプリアオリの上に立ち、色や形の世界は純粹視覺のアプリアオリの上に立つ、我々の意識界とは此の如きアプリアオリの結合の世界である。アプリアオリといふのは單に靜的なる形式ではない、意味の世界の構成作用である。意識とは此の如き作用の結合である、我々は此の如き作用の内容に對して作用其者を主觀と考へる。自我とは此の如き作用の結合點である、無限なる作用の作用である。此の如き作用其者を統一する作用は、その内容として種々なる意味の結合より成る世界を有つ、我々の所謂

經驗的事實の世界とは即ちそれである。我々の所謂經驗的事實の世界は自我の
アプリアオリの上に立つといふことができる。唯作用の作用たる自我の統一の立
場に於ては、作用其者をも之を對象化することができるが故に、即ち反省すること
ができるが故に、この立場の上に立つ對象界は自ら相反する二種の世界に分つこ
とができるのである、即ち我々は二種の經驗的事實の世界を有つこととなるので
ある。一つは各作用の内容の結合より成ると見らるべき客觀的事實の世界即ち
所謂自然界であり、一つは作用其者の結合より成ると見らるべき主觀的作用の世
界即ち所謂意識界である。此故に我々の經驗的事實の世界は、一方に於て純なる
客觀界即ち自然界に屬すると考へられると共に、一方に於て純なる主觀界即ち心
理學者の所謂意識界に屬すると考へられるのである。併し眞の自我はこの孰れ
にもあるのではない、所謂客觀界の中に求めて得ざるは言ふまでもなく、所謂主觀
界の中にもないのである。却つて此兩界は自我の上に立ち、此兩界の觸るる所に
自我があるのである。現在の世界がそれ自身を反省し自覺して更に大なる世界
に轉じ行く所に、眞の自我があるのである。自己はベルグソンの *durée interne* の如

く無限の流動である。斯くしてフ、マテの *Ich setze im Ich dem teilbaren Ich ein teilbares Nicht-Ich entgegen* といふ語の眞意義を解することもできるのである。

右の如く考へることによつて認識對象の世界が我々の自我によつて動かすこ
とのできない客觀界と考へられると共に、一方に於て自己の一部と考へらるる所
以を解することができる。渴して水を飲むといふ如き所謂肉體我の根柢に於て、
既に理性我即ち知識我の立場が含まれて居る。我々が或物を意識するといふ時、
我々は既に作用統一の立場に立つのである、自由の立場に立つのである。表象す
るといふことすら既に自我が自由の立場に立つことを意味して居る、高次の實在
の成立を意味して居る。欲求とか満足とかいふのは此立場に於て現れ来る事相
である。此立場に於ての實在は己に反するものによつて己自身を立するのであ
る、渴に水が對立する所に肉體的自我が成立するのである、水が自己でないのみな
らず渴其者も自己ではない。水の性質は渴の對象となると否とによつて變する
ことはないと考へられるが、此の如き意味の水の性質といふのは他の自我に對す
る水の性質であつて、渴的自我の對象としての水の性質ではない。渴的自我の對

象としての水の性質とは、渴を充たすことによつて起る水の性質である、即ち水の味に外ならない。渴的自我が水の性質を創造すると考へることができる、尙知的自我が知的対象界を創造すると考へられると一般である。此の如くそれ自身に於て全き一つの世界に於ては、主観と客観とは相對的である、主観によつて客観が立せられ、客観によつて主観が立せられるのである。渴も、之に對する水の感味も他によつて説明はできぬ、*Tantalus* のその如き渴的自我の世界は此兩端の無限なる循環である。我々の具體的自我とは此の如きそれ自身に全き世界の結合である、所謂肉體我の根柢にも深き理性我が潜んで居る。自我は無限なる作用の統一である、我々が動かし難き客観的世界と考へるものも此の如き自我の対象界に過ぎない。此場合に於ても、自我は自己に反するものによつて自己を立するのである。意志的動作とは主観的内容から客観的事實に轉することであり、心によつて物を變ずることであると考へられるが、自己は自己の中に自己を實現し行くのである、自己によつて自己を變じ行くのである、意志によつて自己を實現し行く行先は、自己の外にあるのではなくして、自己の深き根柢にあるのである。眞に客観

的なるものは内面的必然の體系である。意志に於て所謂主観界と所謂客観界とが内面的に結合するのである。内面的に結合するといふことは、相對的なる二つの抽象的世界が合して一つの具體的全體を成すことである。換言すれば兩者がその根本に還ることである。私が意志して手を動かしたといふのは、單に私の意識の中に手を動かすといふ觀念が現れたと同時に、外界に於て私の手が動いたといふことではない。單に時間上同時成立といふのみにては意志行爲とは云はれぬ。此間に一種内面的統一の感がなければならぬ。藝術品に於て見る如き内面的統一がなければならぬ。意志的動作に於て體は靈を求め、靈は體を求めるのである。心理學者は我々が運動の感覺を想起することによつて直に運動に移るとなし、全く異質的なるものの偶然的結合であるかの様に考へて居る。併し少くとも私が意志したと共に外界に於て手が動いたと認める自己は、内外の對立を超越して此兩者を統一するものでなければならぬ。我々の思惟作用は此の如き具體的全體を示すものである。而して如何なる意志も本質的には之と同じく内外の對立を超越して、その根柢となる具體的全體である。此意味に於て意志の體驗は

時間、空間の形式を超越した超認識的意識である。手の運動の意識の場合に於ても、厳密に考へれば運動の意識と運動其者と二つあるのではない、具體的には唯運動の經驗あるのみである。直接經驗の事實としては、運動の經驗がそれ自身を發展したといふに過ぎない。我々に直接的な具體的經驗はすべて發展的である、フィヒテの所謂事行である。或場合に於て、我々は他の感覺の證明によつて、客觀的には運動が起らなかつたと考へることもある。併し此時、我々は感覺の世界から概念の世界に立入つて居るのである。而して純なる感覺の世界に於ては、手の運動の感覺と、視覺に於ける手の位置や運動といふことは、全く異なつたものでなければならぬ。我々が此兩者を一と考へるのは、時間、空間及び因果の形式によつて構成せられた概念的對象界に於て、此兩者を結合し得るからである。併し單に此の如く時空の形式や範疇によつて、種々なる經驗内容が統一せられるといふだけでは、意志的動作といふ考の起り様はない。純知識的には私の身體も外物も全く同一である。私の意志とか私の身體とかいふ一種の統一が成立つには、超認識界に於て經驗内容の純なる内面的統一が先づ與へられて居なければならぬ、即ち經驗

内容其者が動くといふことによつて成立するのである。我々が手を動かさうとしたが、手が麻痺して居たため動かなかつたといふ場合でも、若し私の目的が單に運動の筋覺にあつたならば、それにて意志は實現せられたのである。唯、我々は何處までも知識我に於て承認せられることを求むるのは、即ち何處までも客觀化を求めめるのは、自然界に於て自然現象として認められようといふのではない、自我の根柢たる知識我に結合しようといふのである。我々の自我は作用の無限なる連續なるが故に、その極限に達しようとするのである。理性我は自我の極限である、之に達することによつて内外の區別を打破して、自然は自己の象徴となることのできるのである。

以上述べた如く、意志の本質は普通に考へられる如き意味に於て、内から外に移るとか、主觀的内容を客觀化するとかいふことではない。却つて所謂主客、内外の對立は意志の上に於て可能なのである。直接經驗の上に於ては、主もなく客もなく、内もなく外もない、唯自己自身の中に充足理由を有つ無限の發展あるのみである。判斷に於て主語と客語との對立が統一者の上に成立ち、推論式に於て小語

と大語との對立が一般者の上に成立つ如く、主觀、客觀の對立、物と心との對立は意志の上に於て成立つのである。我々は意志の自覺に於て、主客の對立を超越し、之を包容する具體的實在の世界に入る。意志とは此の如き具體的經驗の形式である。意志の目的とは此の如き形式の上に現れ來る内容である。具體的經驗に於ける主客統一の意味が意志の内容となるのである。この意味に於て意志とは一般と特殊との内面的結合の形式であつて、意志の内容とは一般と特殊との結合の意味である。と考へることが出来る。抽象的なるもの、部分的なるものが、具體的全體に還る所に、意志の本質があるのである。すべての實在界は、我々の精神界から自然界に至るまで、すべて此形式の上に立つと考へねばならぬ。意志は實在界の極限であり、その具體的根元である。意志の世界は純なる時間の世界である、無より出て無に入る世界である。而して流ると共に流れない「時」は一般と特殊との内面的結合である、一般なるものの内面的發展の形式である。

意志の内容

一

我々は知識に於ても、意志に於ても、主客合一の境に達しようとするのであるが、知識に於ては、主觀が客觀に従ひ、意志に於ては主觀が客觀に従へると考へて居る。併し我々の主觀を以て客觀を動かし様はない。客觀的對象界は我々によつて意識せられると否とに關せず、それ自身にて全き世界である。我々は數理を變ずることもし出来ない、又自然界を動かすことも出来ない、我々の動かし得るものは、唯我等の意識現象あるのみである、否、我々の意識現象といへども、我々の自由に動かし得るものではない。斯く考へれば、意志の立場は全く無くなつてしまはなければならぬ、すなはち自由意志は幻覺に過ぎないと考へられるのである。併し翻つて考へて見れば、認識對象の世界は意識界に依存すると考へることができ、而かも意志は意識現象の根本的形式と考へることが出来る。我々は認識對象の世界と對立して意志對象の世界を有つ、前者は却つて後者の上に立つと考へることができ

る。此の如き意志対象の世界とは如何なる内容を有するものであらうか。

純論理的対象として或物を他物より區別する場合、即ち單に論理的に或意味を固定する場合、此の如き區別の成立するには、其根柢に兩者の統一者がなければならぬ。白を黒から區別する心其者は白でもなければ、黒でもない。或物を他の物から區別する *heterogenes Medium* は或物でもなく、他の物でもなく、此二者を超越して、而かも之を成立せしむるものでなければならぬ。兩者に對して超越的なると共に内在的である。兩者と同一の意味にて、之を限定しようとすれば、矛盾に陥るのである。統一者其者の立場から考へて見れば、或物を或物として他から區別するといふことは、論理的一般者が己自身を限定することと考へることもできる。此場合、論理的一般者といふのは純なる思惟作用其者である、物の内面的構成力の謂である。一般と特殊との關係は作用と結果との關係である、否有機的でなければならぬ。斯く我々が純なる思惟作用として或物を限定する時、即ち純なる思惟対象を定める時、若し此思惟対象が何等かの經驗内容を有するとするならば、例へば、我々が赤を赤として思惟するならば、限定するものと、限定せられたるものとは分

れて二とならねばならぬ、作用と結果形式と内容とは分れて二とならねばならぬ。併し純なる思惟対象に於ては、限定作用其者が限定の内容である。而して或物を或物として他の物から區別するといふ限定作用は、その裏面に於て他の物を他の物として、或物から區別する限定作用を含んで居なければならぬ。即ち定立の裏面には反定立を含んで居る、肯定の裏面に否定を含んで居る。限定作用の内容が單に限定其者に過ぎない時、定立と反定立、肯定と否定とは直に交換可能と考へられる。無論、肯定作用が直に否定作用であるといふのではない、従つて或物が直に他物と同一であるといふのではない、フイヒテも云つて居る如く $A \text{ nicht} = A$ は $A \text{ || } \neg$ より導き來ることはできぬ、前者は後者と同じく根本的である。唯、此兩者は具體的思惟作用の兩面として不可分離である、論理的一般者の *Momente* である。我々はこの具體的なる論理的一般者の立場に於て、肯定と否定と、定立と反定立とを交換可能と考へるのである。併し斯く肯定より否定に、否定より肯定に移るといふのは、作用其者の内面的必然であつて、他によつて然るのではない。我々は此處に於て作用と作用との直接の結合の最初の例を有するのである、所謂 *Aktualität* の

統一、即ち意識現象の形式、意志の形式の最も單純なる形を見ることができるのである。純論理的な一般者といふのは此の如き作用の統一である、意識現象としてはこれを思惟作用といふのである。此場合に於ては、考へるものと考へられるものとは未だ分れて居らぬ、作用と對象と未だ分れない、未だ主客の對立がないと云つてよい。併し一たび肯定と否定との綜合によつて具體的思惟の立場が構成せられた時、即ち *homogenes Medium* の立場が構成せられた時、我々は此の如き綜合的立場の對象として「I」*die Eius* を有つ、「II」は位置によつて變じない、何處にても「I」である。「I」は完全なる具體的純粹思惟の對象である。是に於て、我々は既に主客對立の端緒を見ることが出来る。「I」は具體的思惟の對象として、之を或物として見ようが、之を他の物として見ようが、此等の見方の變更に關係はない。此の如き「I」に對して、之を或物として見るとか、他の物として見るとか云ふ如き純論理的立場は主觀的作用となる。此處に考へるものと考へられるものとの對立が成立し、はじめて客觀的存在の範疇が生ずるのである、我々ははじめて非合理的要素に撞着するのである。併し或物より他物を反省し、他物より或物を反省し、具體的思惟對象「I」を

構成する創造的立場は *Tathandlung* として、其中に無限の發展の意味を藏して居る。肯定と否定との合一、即ち反省する立場と反省される立場との合一は、我々の自覺の根本義であつて、此の如き綜合的立場の成立は自己自身を對象とする、否自己自身によつて對象を創造する無限の活動に於てのみ可能なるのである。「I」は他より與へられたる思惟の對象ではない、思惟自身の創造である。思惟が思惟を反省することによつて、即ち自己が自己を反省することによつて、「II」が創造せられるのである。而して一度の可能は無限の可能を含んで居なければならぬ、然らざれば「I」は死物である、定立と反定立との交換合一も不可能である。「I」は作用を離れた對象ではない、此處に數學的知識の先驗性の根據があるのである。此等の論理的な一般者の發展の過程を論ずるのは、今余の目的ではないが、具體的思惟對象「I」を創造する綜合的立場が *Tathandlung* として無限に創造的であるから、論理の基たると同時に數理の基たる *class-concept* が成立すると思ふ。「I」の無限なる繰返しから、所謂外延の考ができ、翻つて此等の對象を反省し統一することから所謂内包の考ができ、反省的方向の無限に可能なることから *class of classes* の考ができる。class と

class との外延の一次的對應の比較から Kardinalzahl ができ、種々なる統一の方向即ち内包の意義から Ordnungstypen の考がである、即ち Ordinalzahl が成立するのである。而して斯く一方に於て無限の分割たると共に、一方に於て無限の統一たる論理的一般者の自覺的顯現は遂に連續數の考に到達するのである。我々は此の如き論理的一般者の自覺的顯現に於て、即ち純粹思惟の體驗に於て、早く既に一般と特殊形式と材料との深き内面的對立及びその關係を見得るのみならず、精神界と自然界との對立及びその關係を見ることができると思ふ。class concepts に於て、その内包的方面が心的となり、その外延的方面が物的となる。前者は作用の性質となり、後者はその對象となると考へることができるのである。

併し我々の全人格の體驗は思惟の體驗によつて盡されぬ、すべてがその具體的狀態に於ては、純なる作用である。我々の人格的統一といふのは、此等の作用の直接なる統一である。ここに直接の統一といふのは、思惟によらざる統一、思惟以前の統一といふことである、我々に此統一の證明を與へるものは、情意の意識である、情意の意識が人格的統一の意識内容を與へるものである。思惟の立場に立つ

て全人格の體驗内容を統一した時、即ち思惟によつて經驗内容を統一した時、所謂經驗的事實の世界ができる。我々の經驗界とは思惟の立場から全經驗の内容を見たものである、思惟中心の人格的立場、即ち思惟と直覺との結合の立場の上に現るる對象界である。かかる立場に於て經驗内容を統一する形式、即ち思惟と直覺との結合作用の内容は、もはや純なる數の如きものではなくして、時間、空間、因果の形式でなければならぬ。力學の對象界は斯くの如き作用の純なる内容を現すものと考へることができぬ。物力とは純なる意志が思惟によつて對象化せられたものである。思惟中心の綜合的立場に立つて全人格的經驗を統一する時、思惟に對立する他の作用の内容は非合理的なる物力として思惟我、即ち反省我に對立するのである、即ち我々の自我に對立する自然界なるものが成立するのである。嚴密に考へれば、論理、數理の如き純理の世界に於て既に含まれて居た主客の分立、作用と對象との對立は是に至つて明に之を見ることができるのである。思惟中心の綜合的立場の對象界として現れ來る所謂經驗界に於て、我々は明に Substantia-Itätsbegriff によつて成る自然界と Aktualitätsbegriff によつて成る精神界との對立を

見ることが出来る、抽象的一面と具體的根本との對立を見ることが出来るのである。我々は思惟の立場から赤の體驗を對象化して「赤きもの」Das Roteを考へる「赤きもの」といへば、思惟に對しては非合理的となる。赤の體驗が青の體驗に變じた時、思惟の立場から赤い物が青い物に變じたと考へる、如何にして斯く變じたかは思惟に於て理解することはできぬ、即ちその理由を思惟作用の内容中に見出すことはできぬ、非合理的である。是に於て、思惟の立場からは、此變化の統一者として、此等の變化の背後に物體を考へざるを得ない。併し直接には赤の體驗は思惟の體驗と同じく純なる作用である。赤の體驗が青の體驗に變じたといふのは、純なる作用と作用との直接結合である、作用から作用への内面的推移である、其間一毫の疑義を容るべき餘地もない。意識現象に於ては一つの意識は決して孤立的のものではない、意識はいつでも對立の状態に於て現れる、Einheit des Mannigfaltigenである。赤から青への推移を意識するものは此兩者の根柢に横はる統一の意識である。具體的意識は個々の感覺の結合ではなくして、連續的である。此の如き連續的統一が即ち視覺作用である。此點よりして我々の意識は一般的なるもの

内面的分化發展といつてよい。色の意識は色の概念の分化發展である。此處では意味即實在である。我々が認識對象界の上に、即ち自然界の上に赤より青への推移を投射して、その背後に一つの統一者即ち物を考へるには、先づ體驗に於て思惟作用と視覺作用との直接の内面的結合がなければならぬ。赤と青との經驗は性質的に異なるにも拘らず、我々は之を一つのものの變化として考へるのは、何によるか。色に於て變ずるにも拘らず、之を一物と見るのは他の感官の證明によるとも云ひ得るであらう。例へば一枚の紙が色に於て變じたとしても、觸覺に於て不變と考へることもできる。更に又質に於て異なる種々なる感覺の統一は空間的關係によると考へることもできるであらう。空間的關係とは質に於て異なる種々の體驗を思惟によつて統一する形式である。併し斯く空間によつて種々の經驗を統一して一つの物を考へるには、先づ體驗に於て此等の作用の綜合的統一がなければならぬ、即ち先づ作用と作用との直接の内面的結合がなければならぬ。此の如き思惟中心の内面的統一の世界が Aktualitätsbegriffの上に立つ我々の意識界である。異質的なる種々の經驗の統一の基は我々の意識の直接の證明

にあるのである。我々の意識界とは自己の對象たる自然界に對する思惟中心の人格的作用の反省である。思惟に對立する非合理的體驗が獨立の作用として己自身を維持しようとするから、或程度まで此等の作用の獨立を許す統一ができないければならぬ、即ち所謂意識現象界なるものが現れなければならぬのである。

以上述べた如き考を背景として、内省的に意志の性質を考へて見よう。物の客觀的性質は我々の欲求の對象となると否とによつて變ずることはない、水は渴者によつて欲求されると否とによつてその性質に増減はないと考へられるが、水が渴者の欲求の對象となるのは、その色や音によるのではない、水が味を有するに由るのである、而して味は渴によつて起るのである。之と同じく色は眼の欲求によつて、音は耳の欲求によつて起ると考へることが出来る。ヨーエンの所謂與へられたものは求められたものである。斯く云へば、單に主觀によつて客觀が與へられる様に考へられるかも知らぬが、我々の要求といふのは、言ふまでもなく實現さるべきものである、即ち客觀化さるべきものである。渴者の欲求と水の味とは互に獨立して意味を成すことはできない。我々が暗室に於て不愉快を感ずるのは、

眼は見ることを求むるに由るのである。渴の欲求は唯、水の味によつて滿される如く、眼の欲求は唯、色や光によつてのみ滿されるのである。欲求と欲求せらるる物の性質、欲求と對象の客觀的性質との間には、分つべからざる内面的關係があるのである。我々の欲求は實現の對象が與へられて始めて理解することが出来る。我々の感覺的性質の種々なる分化すら、外界刺激の性質の相違に従つて起つたものと考へることが出来る。生物の本能といふのは此の如き内外の統一作用である。斯く考へれば、前と反對に、我々の種々の欲求は却つて客觀的性質によつて起さるると考へることも出来る。要するに、フヒテが *Ich setze im Ich dem teilbaren Ich ein teilbares Nicht-Ich entgegen* と云つた如く、一つの作用の内面的對立に過ぎないのである。而して意志行爲とは我々が絶對的の立場に立つて此兩端の統一を圖るのである、これを一つの作用が己自身を發展完成すると云つてもよいのである。或一つの欲望が起つた時、我々は單に之を内面的と考へるのであるが、其中既に對象への關係が含まれて居なければならぬ、客觀的對象が内在的でなければならぬ、それは内外統一の純粹作用の一端として成立するのである。意志に於て我々は自

己の主観性を滅して客観的たらんことを求めるのである、内から外に出でんことを求めるのである。意志は己自身を滅することによつて、己自身を完成するのである。若しこの客観化的傾向が十分でなかつたならば、意志は單に欲望の狀態に於て止まる、即ち單に主観的である。或は逆に純粹作用の不完全の狀態が主観的と云つてもよいのである。例へば有理數の體系に於て一より無限に數へ行く時、一つの作用の内容が充實されて行くと考へることができらう。又我々が視覺の發達によつて、これまで識別することのできなかつた色や光を見得る様になつたとすれば、視覺作用の内容が充實されて行くと考へることができらう。我々は此等の作用をも自我の作用として、一種の意志行爲と考へることができらう。(有理數の體系といふ一つの group の性質とか色の一般的性質とかいふ如きものが作用の性質となり、その結果として現れる内容が物となる)併し此等の場合に於て作用の發展が一種の意志の實現と見られ得るとしても、此等の場合の如く一つのアプリアオリの發展として、作用と對象とが合一する時は、之を意志の實現と見ることができれば、これを知識の發展と見ることができらう。かかる場合、知

と意と未だ分離しない、働くものと働かれるものと一である。それでは知と意との區別は何處から起つて來るか。有理數の無限に數へられ行くのが一種の意志の發展と見ることができるとしても、此の如き作用はその終極に達することはできぬ、何處までも未完である。或一つの作用が完成された時、或一つの要求が満足せられた時はその作用が他によつて綜合せられた時である、渴が満された時、渴の作用は消滅するのである。或一つの問題が解決せられた時、又或欲望が満された時、我々は満足を感じるのであるが、此の如き精神的満足の場合、一つの作用が具體的綜合作用の中に溶かされるのである、ヘーゲルの語を以て云へば *aufheben* せられるのである。物質的見方から云へば、一つの作用が消滅すると考へられるであらう。併し精神現象に於ては、超越せられた作用は、超越した作用の中に含まれるのである(數學的思惟の中に論理的思惟が含まれるのである)。或一つの欲求を満すことによつて、即ち意志實現によつて、我々の人格はそれだけ具體的となるのである、豊富となるのである。大なる人格は *myriad-minded* と云はれた如く、すべての人の欲求に同情し、すべてを體驗し得るのでなければならぬ。それ

で眞に欲求の満足とか意志の實現とかいふことは作用の統一、作用の作用の上に見ゆる事實である。此の如き作用の作用、アブリオリのアブリオリの上に於ては、極めて主客の對立が明となり、知と意との區別をも見ることができるのである。余は理性と意志とは本質に於て同一の作用であると思ふ、共に作用の統一作用であると思ふ。ヘーゲルも、*Philosophie des Rechts, Einleitung, § 5* に於て、意志は *die selbstenlose Unendlichkeit der absoluten Abstraktion oder Allgemeinheit, das reine Denken seiner selbst* を含むと云つて居る。意志するといふことと、認識するといふこととの間には、離すべからざる關係があると思はれる。我々は意志に於て單に或事を欲望するのではない、目的の實現を欲するのである。これが決意の本質である。目的が客觀的に實現せらるるといふことは目的が客觀的對象界に於て承認せらるることである。此處に客觀的意志と主觀的欲求又は單なる衝動との區別がある。衝動的な生活に於ては單に主觀的感情を満足せしむる迄である。此故にその満足が他の力によるも差支ない、要するに無意識に起る即ち自然から起る要求的壓迫を去ることができればよいのである。此の如き衝動的な生活は眞の自我から見れば、自然

現象と異なることはない。我々の意志の目的といふのは、之に反し理性によつて承認せられたものでなければならぬ、理性我の欲求でなければならぬ。理性によつて承認せらるるといふことは、作用の作用たる統一作用によつて認めらるるといふことである。自然の欲求は是に於て超自然的意義を得るのである。その満足は單なる主觀的感情の満足、即ち自然的要求の壓迫の除去によつて得られるのではなくして、認識對象界に於ける或事實の實現によつて得らるのである。理性を有するものは自然的欲求を抑へることによつて、却つて満足を得るのである。意志に於て單に主觀的要求の満足を求むる如く思はるるも、深く之を考へれば客觀界に於ける自己の實現を求むるのである。此時、自己が既に客觀化されて居なければならぬ。如何に自然の衝動に従ふ場合に於ても、苟も理性を有するものにあつては、満足を求むるものは自我であつて衝動ではない。自我は自己を客觀視することによつて自己の世界を構成し、自己の構成したる對象界の關係によつて自己の満足を得るのである。知識の對象たる自然界と、意志の對象界たる自我或は意志行爲との關係は、恰も味自體と味覺作用との關係、色自體と視覺作用との關

係の如きものである。色の無限なる連続が視覚作用であり、逆に云へば無限の連続たる視覚作用の或限定が色自體であり、それがデデキントの切斷の如く全作用の一點として見られる時、色の感覺となる。感覺は連続の切斷として其中に全體との關係を含んで居る視覚の要求を含んで居る。無限なる作用の統一作用たる理性の立場に立つ時、此の如く統一作用の無限なる連続の一定定として、一つの認識對象の世界ができる。此の如き無限の連続其者が意志であつて、その一定定が思惟である、知識は意志の一定定作用である。意志作用全體の立場から云へば、我の認識對象界は味自體とか色自體とかいふ如きものに當り、この世界が具體的全體即ち他と無限なる關係に於て置かれた時、恰も味が渴の對象となり、色が視覺の對象となる如く、行爲の對象となるのである。此時所謂客觀界は却つて主觀的となり、現實の世界は無限に可能なる世界の一として、單に欲求せられた世界、意志實現の過程となる。自我とは一つの世界と他の無限なる世界との關係、即ち具體的全體との關係を示すものである。味が全體との關係を内在的に含むことによつて、渴の欲求となると一般である。我々の自我といふのは斯くの如く認識對象

の世界と世界との連鎖であつて、自我の實現といふのは此の如き對象界の推移に於て現せられるのである。意志は行爲自身に於て満足し、而して行爲とは認識對象界の純粹なる推移である。此處に自我の目的があり、自我の満足がある。若し自我が認識對象界其者を目的として之に固定した場合には、意志は意志の本質を失ひ、自然の束縛する所となるのである。

余は是に於て意志の哲學的本質を明にし得ると思ふ。我々の直接經驗、否眞實在は作用と作用との無限なる結合である。此の如き作用と作用との直接の結合が即ち意志である。作用と作用との自からなる結合が意志である。純粹思惟の體驗に於て、論理より數理に至る際に於ても、嚴密に云へば既に意志の面影があると云つてよい。唯、作用と作用との統一たる人格的統一に於て、明に主客物我相對し、自然と精神、物力と意志と相對するに至るのである。此統一作用の一定定が認識作用であり、その對象界が物の世界である。併し此一定定作用は意志の一切斷であつて、數學者の所謂切斷 *Schnitt* の如く全體との關係に於て立つ、即ち其中に全體との關係を内在的に含んで居る。此故に物の裏面には自我を含む、物と我とは相

關的である。各人の世界は各人の自我によつて異なるのである。自我とは一つの世界と無限なる他の世界との結合點である。自我はいつでも超自然的である。自然の法則によつて割り切ることのできない剩餘である。是に於て物我相對立し、物の背後に不可知的なる物力が考へられ、我の背後に主觀的欲求が考へられる。唯、統一作用が自己の全體の立場に立つ時、即ち意志の立場に立つ時、内外を打して一つの行爲となる。自然界は意志實現の手段となり、自然法はカントの所謂 *Typus* となる。故に意志はいつでも超自然的である。倫理的自由である。心理學者の所謂意志は對象界に射影せられた意志である。物力の複雑なる結合に過ぎない。意志は倫理的自由の意志として、はじめてそれ自身の意味内容を有するのである。

二

意志の本質が以上述べた如きものとして、意志の對象界及びその内容は如何なるものであるか。布伦ターノの云ふ如く精神現象の物體現象と異なる所は對象の内在性にあるとするならば、意志の本質を明にするには意志の内在的對象を

明にせねばならぬ。實驗心理學者は精神現象に於ては要素の綜合によつて新なる意味内容を生ずると云ひながら、唯之をその要素に分ち、その結合を説明するだけにて満足して居る様に見える。單に精神現象の因果的生起を説明して、その本質を説明し得たと信じて居る。自然現象に於ては、種々なる性質は實在の符號であつて、それ自身の實在性を有たぬから、此等の現象を時間的、空間的に分析して、その因果關係を明にすれば足るのであるが、精神現象に於ては、その内面的統一、その内面的發展を明にせねばならぬ。即ち下から説明するのみならず、上からも説明せねばならぬ。例へば、空間的表象は光覺や眼の運動感覺等の結合したものであるが、此等の感覺其者の中に含まれて居ない空間的秩序 *räumliche Ordnung* を含んで居ると考へられる。ヴントも *psychische Gebilde* の性質はその要素の性質を以て盡すことはできぬと云つて居る。空間的表象は實に此の如き空間性の實在化によつて成立するのである。此の如き空間性とは如何なるものであるか。所謂經驗論者は事もなげに空間性などいふ如きものは非實在的であつて、單に一般概念に過ぎぬと云ふでもあらう。併し我々の精神現象に於ては、感覺的要素の外面的結合

を以て説明することのできない新なる経験が、之によつて創造されると考へるならば、それは單なる一般概念ではなくして、物力が實在的と考へられる以上の意味に於て實在的と考へられねばなるまい。精神現象に於ては、物體現象と異なつて、意味が直に實在的と考へられるのは、之によるのである。余は斯くの如く、精神現象に於て、即ち直接經驗に於て、新なる事實、新なる實在を創造するものが、認識論者の所謂經驗のアプリアオリであると思ふ。認識のアプリアオリとは、我々の經驗を内から創造する内面的力である。幾何學といふ先驗的學問の基礎となる純粹空間は、心理學に於て空間的表象と名づけられる新なる *psychische Gebilde* を構成する構成作用であると思ふ。無論、此の如き言には種々の反對も起るであらう。主觀的なる心理的空間や時間と、客觀的なる物理的空間や時間と全く違ふといふのが普通の考へ方ではあるが、客觀的空間といふのも、要するに所謂主觀的空間を概念的に綜合統一した結果に過ぎない。その測定の基礎となるものは何處までも主觀的空間である、空間的表象の質的相違である。心理的個人の意識對象として主觀的空間があり、超個人的意識對象として客觀的空間があるのであるが、兩者の根柢

には同一の構成作用即ち純粹空間があるのである。此の如き構成作用の純なる内容が幾何學であつて、經驗的空間はその特殊なる形の一つに過ぎない。それで我々の精神作用といふのは、カントの所謂アプリアオリを離れて理解することはできない、價値の構成を離れて精神現象は存在し得ない。意識現象は唯目的に向つて進むものとして、目的が内在的なるものとして理解し得るのである。精神現象は對象的關係によつて區別せらるると考へらるるのは之によるのである。空間的表象の目的は空間の知覺である、空間の規範に従つて空間を構成するにあるのである。此點に於ては、思惟が論理の規範に従ふと同一である。ツントに従へば、意志とは情緒の、その終に於て突然、表象及び感情の内容を變じて終結する如きものの謂でなければならぬ。併し此の如き見方は精神現象を外から見たのであつて、之を内から見て直にその本質を明にしたものではない。ツントは之を内省的事實に本づくとも考へるかも知らぬが、我々の經驗はいづれも直接であり、内省的である、否、元來内外の區別はない、内外の區別はその見方から起るのである。右の如き見方は氏の所謂 *Substantialitätsbegriff* による自然現象の見方と

何等異なる所はない。精神現象を全體から切離して、單に對象化し、物體化して居るのである。若し氏自身の云ふ如く、精神現象の物體現象と異なる所以は *Aktualität* *Begriff* の統一の上に立つにあるとするならば、その内面的統一の意味を明にせねばならぬ、即ち氏の所謂綜合的統一の意味内容を明にせねばならぬ。自然現象に於てはかかる説明は附屬的であるかも知らぬが、精神現象の本質は唯之によつて明にせられるのである。今前に空間的表象の創造的綜合として、空間のアブゾリ即ち先驗的空間といふものを考へた如く、意志現象に於て斯くの如き先驗的基礎を求むるならば、それは言ふまでもなく、道德的自由といふことでなければならぬ。先驗的空間によつて、一方に於て客觀的空間が成立すると共に、之に對して一方に於て主觀的空間表象が成立する如く、先驗的自由によつて、一方に於て意志の對象界が成立すると共に、一方に於て心理學者の所謂意志の現象が成立するのである。意志と情緒との内面的相違は此にあるのである。すべて精神現象といふのは *Aktualitätsbegriff* の上に立つ作用の結合であつて、情意とは此の如き作用統一の状態、即ちアブゾリのアブゾリの内容を表すものではあるが、意志と感情との異なる

る所は、先驗的自由の上に立つと否とにあるのである。先驗的自由といふことは相對的主觀が相對的客觀を動かすとの意味ではない。 *Ich setze im Ich dem teilbaren Ich ein teilbares Nicht-Ich entgegen* の意味に於ての自由である。嘗て論じた如く、感情をアブゾリオの統一の内容とすれば、意志はかかる結合の極限である（「意志實現の場所」を見よ）。此の如き連結の極限の立場の上に、即ち意志の立場の上に所謂經驗界が現するのである。所謂客觀的實在界とは意志作用の内容に過ぎない。我々の意志の現象は普通に考へられる如く内より生起するのではない、内外の統一點より生起するのである。「目的の實現可能」の意識が意志の生起である、所謂認識對象界を主觀の中に含み得ることによつて生起するのである。此意味に於て意志は最初より道德的である、自我と世界との關係問題である。嚴密に云へば倫理的意識がなければ意志の意識はない、我々は自由を意識するによつて、意志の意識が成立するのである。然らざれば、意志行爲は情緒の表出運動と異なる所はない。無論此の如き言をなすには、意志の自由に反對する種々の議論を顧慮しなければならぬ。余は今自由意志に關する詳論に入り込む暇はないが、此等の議論の多く

は意志を認識対象界に投射して自然化するより起るのである。併し認識対象界に映されたるものは意志の射影であつて、意志其者ではないことは言ふまでもない。

我々の意志の意識が、右に述べた如く、自由のアブリアオリによつて成立するとするならば、意志の意識内容とは如何なるものであるか。順序の交換可能、即ち同時存在の關係を本質とする空間のアブリアオリによつて、所謂物體界が成立すると考へらるる如く、自由のアブリアオリによつて成立する意志の対象界とは如何なるものであるか。余は意志の意識内容の根本的性質は一般と特殊との内面的統一といふことであると思ふ。而して一般と特殊とを内面的に結合するものは個性であるから、意志の対象は個性であると考へることが出来る。種々の經驗内容の連結に於て、一般と特殊との結合はすべて意志であると云つてよい。一般より特殊に移る即ち一般と特殊との結合といふことに就いて、種々の場合を考へることが出来る。law of subsumption に基く普通の論理學に於いて考へられる如き一般と特殊との關係は、單に偶然的である。例へば書籍が先づ大きさによつて分けられ、次ぎ

に國語によつて分けられたとすれば、前者は genus となり後者は species となるのであるが、此の如き一般と特殊との關係の偶然的なるは言ふまでもない。我々は此關係をば逆にし、却つて後者を genus とし前者を species とすることが出来るのである。此の如き場合には、一般と特殊との結合の内容は全く零と言つてよい、無内容の意志と考へ得るのである。併し無内容といふことは結合の自由といふことであつて、單に無力といふことではない、却つてすべての經驗内容を結合する自由の意志と考へることも出来る。余は此點に於いて數學の群論に於ける單位 Einheit 即ち Identität の考に多大の興味を有するのである。乗法を Kompositionsregel とすれば、零を除けた System der rationalen positiven Zahlen が一つの群 Gruppe を作るが、加減法を連結の法則として取れば、零と負數とを入れた有理數の體系が一つの群を作り、零がその單位となる。此場合、零は單なる無ではなくして、此體系に缺くべからざる要素である、體系轉換の中心である。單位はいつでも群の Normteiler となるのである。次に意識内容の間に内面的關係あるものに就いて考へて見よう。例へば、三角形が正三角形、二等邊三角形、不等邊三角形に分たれるといふのは、三角形

の概念から見て、内面的に必然と考へられる、又ユークリッドの平行線の Postulat を取るならば、三角形のすべての内角の和は二直角に等しと云ふことも内面的必然を以て證明し得ると考へられねばならぬ。三角形が各邊の等否の關係によつて、三種の特殊なる三角形に分たるといふことは、見方によつては偶然的とも考へ得るにも拘らず、一種の内面的必然を感じるのは何に由るのであるか。此の如き場合に於ては、一般なるものが、特殊なるものに對して、偶然的、外面的ではなくして、その内面的構力なるが故である、ヘーゲルの云ふ如く *das punctum saliens aller Lebendigkeit* なるが故である。此の如き具體的一般者の立場から見れば、向に一般性と考へられたものも却つて特殊となる、即ち相關的關係の一端に過ぎないと考へることが出来る。平行線の原理によつて三角形の内角の和が二直角に等しと云ふ如きことを證明する場合には、更に此具體的統一、即ち一般者が擴張せられねばならぬ。余は數學者が方程式を解くため *Adjunktion* によつて數の Körper を擴張し行くといふのも、此の如き意味に於ける具體的統一の擴張でなければならぬと思ふ。例へば有理數の Körper に無理數を附加した Körper が要せられる時、方程式

によつて表された或關係が、もはや有理數の對象界に於て求めることができないと云ふことを意味して居る、即ち更に具體的なる連續數の對象界に於て之を求めねばならぬと云ふことを意味して居る。前に一般と特殊との結合が偶然的と考へられた時、かかる統一の内容即ち意志内容が零と考へられたが、次の場合に於ては、統一は明に何等かの特殊的内容を有つて居なければならぬ。我々が一種の内面的必然を感じるのには之によるのである。斯く統一が定まつた内容を有つ時、一般なるものと特殊なるものとは動かすべからざる對立を成し、特殊なるものは一般なるものによつて各唯一の地位を得るのである。無論かかる一般的内容も單に意識されたものとしては、パークレー等名目論者の云ふ如く、單に名目にすぎぬと考へ得るでもあらう。併し右の如き内面的統一の内容は單に抽象的一般ではなくして、一般と特殊との結合の内容である、個性 *Individualität* の内容である。認識のアブリオリの如きものも、普通に考へられる如く、單に抽象的一般ではなくして、一般と特殊との結合の内容である、即ち個性的内容である。具體的一般者としての三角形の内容、即ち三角形の個性的内容は、單に「三個の線分にて成れる平面形」と

いふことではなくして、三角形の種々の幾何學的性質を含んだものでなければならぬ。云はば無限進行の内容でなければならぬ。幾何學者が三角形の定義を右と異なつた定義に言表した時、抽象的一般概念としては異なるものとなるも、具體的一般概念としては同一でなければならぬ。此の如き場合に、我々は明に抽象的一般概念と具體的一般概念との區別を見ることが出来る。Twardowskiの如く内容と對象とを區別して見れば、前者は抽象的であつて、後者は具體的と考へることが出来るであらう、此故に客觀的と考へられるのである。

右に述べた如く、認識對象界に於ても、所謂客觀的真理とは一般と特殊との結合であり、真理が客觀的となればなる程、此方向に進むと考へ得る、即ち知識の根柢に意志的結合があると考へ得るのであるが、所謂認識對象なるものは、如何に特殊的であつても、認識對象となるといふことが既に一般的なることを意味して居る。經驗的事實の世界といへども、それだけでは單に可能的世界の一として、嚴密に限定的ではない、我々は他の結合を考へ得るのである。最一般的なるものと最特殊的なるものとの結合、即ち眞に個性的なるものとの統一内容は、之を意志の内容に求

めねばならぬ。我々の意志の内容は全經驗の具體的統一の意味内容である。「私が今茶を飲む」といふ意識内容は單に茶を飲むといふだけの意識内容ではない、非人格的渴といふ本能が働くのみではない、渴して茶を飲む一例ではない。「私」といふ個人が即ち一人格が茶を飲むのである。此故に此事實が既に倫理的判斷の對象となることもできれば、藝術的對象となることもできるのである。自然が藝術的對象となるのは皆かかる意味を寓するによるのである。此個性的内容は知識の立場に於ては *incommensurable* である。我々の意志現象は時間、空間、因果の範疇によつて構成せられた自然科学的對象界に屬する事實ではない。我々の意志は此の如き可能的世界の無限なる統一の上に現れるのである。個性とは此の如き統一の内容である。我々が或物を意識する時、それは如何に單一なる意識であつても、超自然的意義を寓して居る、單なる可能的世界の事實ではなくして、無限なる可能的世界との關係を含む現實の世界の事實である。我々が感覺を單一なる意識内容と考へたり、又意識せらるるといふことは意識内容に何物をも附加しないと考へるのは、此區別を明にしない故である。意識せらるるといふことは、意識内容

が特殊化せられることである、即ち現實となることである、換言すれば現在の意識が他と無限なる關係に於て立つことである、所謂經驗的事實の世界に於てのみでなく超經驗的世界と無限の關係に於て立つことである。此處に具體的經驗の絶對性がある。經驗學派が思惟を棄てて經驗的事實に依らうとするのも理由がないではない。説明は種々にできるであらうが、事實は唯一である。我々は是に於て全く異なつた立場の上に立つのである、即ち全體の立場の上に立つのである。唯、従來の經驗學派なるものは、此の如き具體的經驗の代りに、却つて思惟の範疇の上に立つ抽象的事實を考へて居る。かのプラグマチストの如きも知識の根柢に生命を考へるが、生命の内容と考へるものは抽象的なる生物的生命的意義に過ぎない。斯くてはその目的とする特殊性は何處にも求め様はないのである。眞に特殊なるものは個性的でなければならぬ、全體を部分の中に含んだものでなければならぬ。ライブニツの考の如く、部分の中に全體を含むことによつて、部分は特殊となるのである。然らざれば特殊は抽象的一般と擇ぶ所がない。是故に意識の根本的形式たる意志内容のみ、眞に特殊なることができるのである。意志

は單なる principium individuationis ではなくして、ヘーゲルの云ふ如く die in sich reflexivite und dadurch zur Allgemeinheit zurückgeführte Besonderheit である、即ち Einzelheit でなければならぬ。(Philosophie des Rechts, Einleitung, § 7.)

意志の内容即ち自由のアプリアリの上に立つ倫理的對象は、一般と特殊との最終の結合である、即ち個性的であると云ふことは、普通に考へらるる如き意志は内外の一致であるとか、精神と肉體との結合であるとかいふことの、最も根本的なる意義であると思ふ。意志行爲とは一般と特殊との結合の極致である。我々の手を動かすといふ表象に對して手が動くといふことは、手の運動が外から偶然的に附加せられるのではない。運動の表象は運動の精神である、表象と運動とは一つの作用の兩端である。運動が實現せらるるといふことは、作用の作用、アプリアリのアプリアリの上に立つ對象界に於て認めらるることである。此立場に於て統一せられる時、我々の意識内容が絶對的に特殊化せらるるのである。超認識的なる具體的統一の立場に於ては、運動の表象と運動とは未分以前の統一の状態に於て含まれて居るのである。運動の動機といふのは此の如き統一の端緒である。

此要求が全人格的統一の立場に於て内面的に統一せられた時、此要求が特殊化せられ、實現せられたと考へらるるのである。我々が意志する、働くといふことは、自己の人格的體驗の全體を統一することである、即ち經驗内容を何處までも特殊化することである。情緒の状態は言ふまでもなく、動機の状態にあつても、我々の意識内容は未だ抽象的一般たるを免れない、尙單に可能性を有するに過ぎない。唯、行爲に於てのみ、我々の意識内容は客觀的歴史の中に織込まれて、動かすべからざる事實となり、唯一の特殊性を得來るのである、即ち眞の特殊性は内外の統一、全人格的體驗の統一の上に於てのみ得らるのである。所謂物質界とは人格的體驗の否定的統一の對象界に過ぎない。我々が自己の意志を物質界に實現するといふことは、全體験の中心的統一作用即ち思惟作用と結合することである、即ち一たび一般化することである。眞に特殊なる内容は一たび一般化することによつて、即ち物體化することによつてのみ得らるのである。我々の身體は此の如き特殊化の機關である。精神を離れた單なる物體界は抽象的と考へられるが、身體を離れた單なる精神も亦抽象的たるを免れない。眞に具體的なるもの、特殊な

るものは、兩者の結合點に存するのである。我々の經驗内容を特殊化する「時」の範疇は意志の形式である。カントが「Die Zeit heisst...」といふ如く、すべての變化を考へ得る「時」は一面に於て不變である、即ち空間である。この不變の一面あるによつて、時は流れ得るのである。

三

前節に述べた如く、意志の内容の特徴が一般と特殊との結合、即ち個性的なるにあるとするならば、意志は如何なる意味に於て、それ自身に固有なる内容を有つか。意志の對象界は如何なる意味に於て、他に還元することのできないアブリオリを有するか。若し右の結合といふことが單なる結合であつて、何等の新しき意味内容を有しないならば、意志といふ獨立の作用があるのではなく、従つて意志は己自身に固有なる對象界を有することはできないのである。普通の論理學では、一般なるものに特殊的性質が結合するといふことは、單なる附加と考へられて居る。一般概念の内包に種差を加ふることによつて、特殊概念が構成せられると考へて

居る。斯く考へれば一般と特殊との結合といふことも、單なる附加にすぎないのであるが、ロツツが既に詳論して居る如く、單に論理學の範圍に於ても、外延と内包とが逆比例するとは云はれない。一般概念の内包といふのは特殊的性質の單なる總和ではなくして、一つの函數でなければならぬ。

一般と特殊との結合によつて、即ち個性化によつて、如何に新なる對象を生ずるかを明かにするため、試みに思想と言語との關係に就いて考へて見よう。一方から考へれば思想は一般的であつて、同一の思想が種々の言語によつて表現せらるると考へられるが、一方に於ては或國語によつて言ひ表された思想は、嚴密なる意味に於ては、他の國語によつて言ひ表すことはできぬと云ふことができる。詩とか美文とかいふものは言ふまでもなく、哲學的思想の如きものであつても他の國語によつて翻譯のできない色合を有つて居る。印度や希臘の哲學は梵語や希臘語によつて發達し、逆に印度人や希臘人の思想が梵語や希臘語を構成したと考へることが出来る。言語は思想に對して外面的であり、偶然的であると考へられるが、右の如き場合に於ては言語は思想の身體である。思想と言語との間に内面的

必然の關係があると考へることができる。兩者の間には情緒と表出運動との關係に近いものがあると考へることができる。思想は言語によつて己自身を特殊化し、個性化するのである。表現せられない思想の有することのできない新なる内容を得來るのである。或は單に之を語感 *Sprachgefühl* として、純粹なる言語の意味と區別することもできるであらう。併し言語の意義と語感との間に離すべからざる關係がある。我々の言語は語感と云はれる微妙なる色合を言ひ表はすことによつて、その十分なる目的を達し得るのである。所謂語感といふのも思想の妙なる色合と考へることができる。知識に於ても一般と特殊との結合があり、即ち判斷はすべて一般と特殊との結合であると云つてもよいのであるが、知識に於てはカントの限定的判斷作用 *bestimmende Urteilskraft* に於ての如く、一般的なるものが先づ與へられるのであるが、情意的内容の限定に於ては反省的判斷作用 *reflectierende Urteilskraft* に於ての如く、特殊なるものに對して一般的統一が求められるのである。云はば、知識の基たる一般者を特殊と見て更にその背後に一般的統一を求めるのである。感情はアプリオリのアプリオリの内容である。翻つて認識以

上の統一より限定されることによつて、知識は更に特殊化せられ、新なる意味内容を得るのである。我々は之を感情の内容と考へるのである、所謂語感といふ如きものもそれである。併し背後の一般者が尙不明として單に求められつつある間、即ち受動的である間は、限定的判断の方面と反省的判断の方面とが相分れ、言語の意味と言語の感じとは別々の意識とも考へられるのであるが、眞の特殊の限定はアブリオリのアブリオリの上から、即ち全統一の上から積極的に限定せられることによつて得らるるのである。我々の意識内容は是に於て眞に個性的となるのである、知的方面と情的方面とが一つに結合せらるるのである、知的に又情的に限定せられるのである、而かも單に兩限定の結合ではなくして、兩者の根柢たる統一の内面的發展の限定である、單に兩限定の和としてではなく、新なる唯一の意義を兩者の上に加へるのである。此の如きものが眞に創造作用の限定である。限定的判断と反省的判断との綜合は、唯無限なるアブリオリの積極的統一たる創造的意志によつてのみ、内面的に統一することができるといふことができる。一にして一切なる神は創造することによつて己自身を見ることができるのである。我々の文化現象とは此の

如き創造作用の所作である、即ち創造的意志の對象界である。文化的内容は自然と精神との結合の上に成立し、而かも單なる客觀的自然と單なる主觀的精神の内容とに還元することのできない個性的内容を有するのである。生物的生命が客觀的に與へられた一つの統一、即ち一種の *Idee* として、機械力と精神力との孰れにも還元することのできない特殊の内容を有する如く、所謂文化的精神は自然と精神との客觀的統一として、換言すれば知と情との未分以前の統一として、其孰れにも還元することのできない個性的内容を有するのである。文化は生命の深くされたもの、歴史は生物進化の續編である。廣義に於ける言語は文化發展の基礎として、文化的精神の最初の産物でなければならぬ。是故に言語といへども、文化の産物として、己に個性的内容を具へて居る。或一國語にはその國語に特有な個性があり、或思想家や文學者の文章には、獨創的であればある程、他人の模すべからざる個性を具へて居るのである。言語、文章の個性といふのは、單に感情と思想の結合にあるのではない、感情の野を思想の水が流れ行く所に全體の趣があるのである。 Brojer Chr'stiansen の *Stimmungs-differential* といふ如きものは、内容と形式との分つ

べからざる統一である、各の點に方向を含む曲線の如きものである。具體的立場から見れば、思想は感情に入つてそれ自身の目的に達し、感情は思想を得てそれ自身の目的を達すると考へることが出来る。而して、此の如き融合は唯言語の表現に於てのみ可能である。思想は言表によつて感情をも含むことができ、感情も表現によつて思想を含み得るのである。表現は兩者の具體的統一である、高次の實在である。(文章家フローベルの“Pensées”の中には *Les oeuvres les plus belles sont celles où il y a le moins de matière : plus l'expression se rapproche de la pensée, plus le mot colle dessus et dispartit, plus c'est beau* と云ふ語がある)。我々が物體界とか自然界とかいふのは、要するに共同的自我の對象界に過ぎない、常識に於て物體界といふのは社會的自我の對象界である。而して言語は之を構成する手段となると考へることが出来る。「擬人主義よりの解放」を目的とする物理学と雖も、此中心を超個人的主觀の極限、所謂 *Bewusstsein überlaupft* にまで進めたものに過ぎない。表現によつて、即ち意識が物體界と結合することによつて、思想と感情とが結合し、個性的内容を得ると考へられるのは、孤立的なる自我の抽象的内容が、アブリオリのアブリオリた

る綜合的自我の立場に於て統一せられ、限定せられることを意味して居る。部分的なる作用と部分的なる内容とは唯、綜合作用の上に於てのみ統一せらるるのである、即ち神に於てのみ物と心との結合が可能である、個性は神の意識内容である。單に抽象的であり主觀的であると考へられる思想が、言語と結合することによつて、即ち表現せられることによつて、新なる意味内容を得る、即ち個性を得る。言語は普通に考へらるる如く思想の外面的符號でなくして、思想其者が之によつて内面的に變せられるのである。文化現象としての言語は單なる思想と異なつたアブリオリの上に立つ、即ち異なつた範疇の現象である。之と同じく、我々の全人格の内容を成す思想、感情も物體界と結合せらるることによつて、即ち意志行爲として表現せらるることによつて、新なる意味内容を得るのである、即ち主觀的、抽象的意識の範圍を脱して、客觀的にして個性的なる文化現象となる、即ち歴史的事實となるのである。文化現象或は歴史的现象は單に精神現象に物體現象が加はつたものではない、全く異なつたアブリオリの上に立つ、即ち兩者統一のアブリオリの上に立つのである。文化現象は單なる自然の法則に還元することもできなけ

れば、單なる意識の法則に還元することもできない、唯兩者を含む具體的立場に於てのみ理解し得るのである。兩者を含むとか、統一するとか云ふも兩者を同列的に、或は對立的に含むのではない。コーエンが *Der Anfang, der alter ego ist der Ursprung des Ich* といふ如く、自我に對立するものは自然ではない、他の自我でなければならぬ (*Ethik des reinen Willens*)。フエテの非我 *Nicht-Ich* は自然ではなくして、他の我でなければならぬ。自然と精神との結合の前には、精神と精神との直接の結合がなければならぬ、即ち社會的精神の統一がなければならぬ。自然は此の如き精神の對象界なるが故に、此結合は直に精神と自然との結合を意味するのである。文化の内容は此の如き統一の内容として限定せられるのである、是故に何處までも個性的である。我々が働く時、即ち意志的行為に於ては、我々の全意識が統一せられなければならない。我々が全意識を統一して行為に向ふ時、意識集中の極限に達する時、即ち嘗て「經驗内容の種々なる連續」に於て云つた如く哲學的知識の立場に立つ時、我々の精神と身體とは合一して一つとなる、茲に意識は消えて運動となり、運動は精神を得る、即ち物心一如の作用となるのである。此の如き作用の統一的性質

を我々の性質 *Charakter* といふのである。性格といふのは單に精神的ではない、物と心との統一の型である、行為の形式にして又行為によつて形成せられたものである。此意味に於て性格は自由意志のアプリオリの上に立つ道德界の現象である。右の如く物心一如の作用の立場に立つといふことは、一方から見れば、我々の自我が他の自我と直接の結合に入ることである、一つの社會的形式の中に入ることである。此時、我に對立する自然は單なる自然ではなくして、一つの人格である。主觀的自我の欲求に對しては、自然は或は手段となり、或は妨礙となるが、物心一如の客觀的自我の立場、即ち行為の立場に於ては、自然は我に對して一つの人格となり、自然との結合は一つの社會的形式となる。我々は家族とか、國家とかいふ社會的形式に於て多くの他我と結合する如く、「神の王國」ともいふ如き純倫理的社會的形式に於て自然の精神と結合するのである。各國民の文化といふのは、其國民の主觀的精神と其客觀的自然との統一の型である、單なる自然でもなければ、單なる精神でもない、客觀的精神の現象である。個人の性格と文化の典型とは元來その性質を同じくするのである、共に内外統一の形式である。普通の考へ方とは異なる

つて、余は文化の因子たる自然は單なる自然力としての盲目的自然ではなく、寧ろその國民の共同的意識を通して見た自然でなければならぬと思ふ。自然の中に文化があるのでなく、文化の中に自然があるのである。唯、我々が純化せられた文化意識の上に立つ時、不純なる文化は自然の所産と考へられるのである。或國の文化が其國の地勢によつて形成せられたといふのは、我々が自己の意識を反省して因果的説明を試みる如く、我々が純化せられた歴史的意识の上に立つて過去の文化を反省するのである。併し今日の所謂科學的説明なるものも一種の文化的産物を反省するのである。併し今日の所謂科學的説明なるものも一種の文化的産物に過ぎない、自然界とは純化されたる文化意識の客觀界である。我々はかかる説明の前に、過去の文化其者を直接に體驗せねばならない。我々は唯意志によつてのみ、意志を知ることができるのである。物を理解するに、種々の階段がある。單に畫を解するものは未だ眞に畫を知るものではない、眞に之を知るものは之を描き得るものでなければならぬ。我々は純粹意志のアプリオリの上に立つて、はじめて文化を理解することができると云ふ。此理解はカントの Postulat, wodurch wir einen

Gegenstand uns zuerst geben und dessen Begriff erzeugen といふ如きポスチュラートの理解である。我々の知識の根柢にも此の如きポスチュラートがあるのである。文化現象といふのは、我々が此立場に立つ時、現はれ来る對象界である。物の世界ではない、性格の世界、典型の世界である。典型 Typen とは一般と特殊との結合、自然と精神との結合の形式である。生物の現象より種々なる社會的現象に至るまで、すべてが典型の顯現である。我々が規範的意志の立場に立つ時、此等の典型は世界史上の實在として各唯一の位置を得る、即ち世界史といふすべての人格の統一たる道德的精神(即ち純我)と其對象界たる科學的自然界とを結合する一大典型の中に於て限定せられるのである。ランゲが、Ueber die Epochen der neueren Geschichte の始に於て Jede Epoche ist unmittelbar zu Gott, und ihr Wert beruht gar nicht auf dem, was aus ihr hervorgeht, sondern in ihrer Existenz selbst, in ihrem eigenen Selbst. Dadurch bekommt die Betrachtung der Historie und zwar des individuellen Lebens in der Historie einen ganz eigentümlichen Reiz, indem nun jede Epoche als etwas für sich Gültiges angesehen werden muss und der Betrachtung höchst würdig ersch. int. と云つて居る語に深い意味を見出すことができ

る。世界史の leitende Idee はすべての典型を容るる典型である。

四

我々は意志に於て主観によつて客観を動かす、即ち意志は外面的動作と考へられるから、意志のアブリオリは主客の合一、内外の統一と考へられるが、コーエンのいふ如く我に對するものは他の我であつて物ではない、意志の對象界は社會であつて自然ではない、單なる自然は意志に對してその手段となるも、新なる内容を與へるものではない、實現せられた意志内容も、實現せられない意志内容も、内容としては何の變りもない、我々は單なる欲求の満足によつて何等の新なる精神的内容をも得ないのである。單に心理學的に考へれば衝動的意志と自覺的意志との間に相對的差異あるに過ぎぬかも知らぬが、内省的には此間に性質的差異を認めることができる。自覺的意志に於て我々は新なる意識内容を得るのである、新なる對象界を得るのである。即ち之によつて人格と人格との直接結合の世界が生ずるのである。意志の目的は意志自身の中にあるのである、意志は自律的である。

意志のアブリオリは自然と精神との合一ではなくして、人格と人格との直接結合である、人格的統一である。是故に意志のアブリオリは倫理的である。是に於て自然は意志の爲に存在し、その實現の手段となり、自然は自我の中に含まれることとなる。スコト、ス・エリナーゲナの考の如く、Das Sehen ist viel mehr als das Gesehene, das Hören als das Gehörte, das Erkenntwerden ist die höchste Existenz der Dinge. Eben darum gehört eigentlich der Mensch nicht zu den Dingen, sondern in ihrer Wahrheit sind die Dinge in ihm, wenn er sie erkennt (エックハートがである(Erdmannによる))。併し斯く云ふのは、自然は精神に對して單に外面的なる手段に過ぎぬと云ふのではない。我々の身體は全體として一つの目的を有し、種々の物質的關係が之によつて統一せられて居ると考へることができらう。併し之を組織する物質を離れて、我々の身體があるのではない。我々の生命は組織する物質によつて限定せらるるのである。加之、我々の生命は外界の自然からも限定されると考へざるを得ない。同一の生物の種子も、其外界の事情によつて異なつた發達をなすのである。此等の要素を離れて具體的精神現象があるのではない。唯、具體的なる精神現象は此等の要素

の綜合の上に現れ、此等の法則に還元することのできない新なる實在である。正しく云へば、自然とは具體的精神の反省された一面である、具體的精神に必然的な一面である。個人的精神に就いて云へば、我々の個人的精神も一々の現在に於て、作用の方面と内容の方面とを具備し、主客合一の上に立つ一つの具體的全體である。我々がこれを反省する時、即ち更に大なる人格的統一の上に立つ時、前の具體的全體は兩方面に分解せられるのである。我々が或經驗をその要素に分析するといふことは、その要素がその經驗のみに屬するものではなくして、他の經驗統一にも屬し得るといふことを意味する、即ちそれ自身に於て不變的であるといふことを意味する、従つて此等の要素と要素との關係も不變的であり、一般的であるといふことを意味するのである。此意味に於てそれは所謂一般化的方向である。併し斯く客觀化するといふことは根柢に於て主觀を離れることではない、包容的主觀の上に立つことである。個人的意識に於ては記憶的主觀の上に立ち、更に進んではカントの所謂意識一般の上に立つことである。併し我々の現在の意識も一々具體的全體として、單に此の如き反省の立場の上に立つ自然科学的見方によ

つて還元することのできない剩餘を有つ、即ち統一の特殊の内容を餘すのである。此の如き剩餘が一般眞理を統一する個體の典型であつて、特殊化の形式である。此の如き特殊化の形式は目的論的因果關係として先づ生命といふものが考へられ、生物現象は之によつて説明せられるのであるが、此の如き統一がそれ自身に於て獨立の實在となるのは精神現象に於てでなければならぬ。併し此の如き統一の形式即ち個性的典型がその内容と對立し、その内容と離れてそれ自身に考へられた時所謂主觀的精神となり、心理學の對象となる。之に反し意識一般といふ如き超個人的主觀の對象界は自然界と考へられるのである。斯く客觀的對象界から離れて考へられた主觀的精神現象は、既に *Aktualitätsbegriff* の上に立つといふ點に於て、自然現象とその次位を異にするのであるが、尙抽象的形式として一般的たるを免れない。眞に全經驗統一の具體的立場即ち眞の特殊化的立場は、意識一般即ち所謂理性の立場から全經驗を統一するものでなければならぬ。此の如き具體的立場が我々の倫理的自由意志の立場である。所謂文化現象とは此立場の上に現れ來る客觀的精神の現象である。此意味に於て文化現象は自然と精神との統

一である。言語は單なる一般的意味であつてはならぬ、又單なる語感であつてはならぬ。道德といふも單に道德法に合ふといふことでもなく、又單に善動機に従ふといふことでもない。此兩方面が結合せられねばならぬ、法則が動機に對して適當な表現とならねばならぬ。道德的意識は、一方に於て道德的感情であると共に、一方に於て客觀的法則である。此故に道德的意識は單なる同情ではない、その中に論理的意識をも含んで居る、即ち意識一般の立場を含んで居るのである。我々の道德的理想は此の如き立場の對象界に於ける實在である。或一時代の道德的理想といふのは、その時代の主觀的要求とその時代の自然の考とを、兩者を超越し之を包容する具體的全體の立場から見た統一の仕方である。我々の文化現象といふのは、此の如き意味に於て具體的にして特殊なる現象である。従つて文化史を意志の對象界と考へることが出来る。無論斯く云ふのは歴史が直線的に文化の目的に向つて進むといふ如きことを意味するのではない。此の如き考は因果の見方と價值の見方とを混同したものに過ぎない。

意志の内容を以上論じた如く考へることによつて、余は規範的法則と自然の法

則との關係をも明にし得るではないかと思ふ。規範的法則といふのは、所謂自然界と精神界とを超越し此兩者を統一する自由意志のアブリオリの上に立つ對象界に於ける法則である、具體的實在の法則である、即ち特殊化の法則であると考へることが出来る。「汝は人を欺くべからず」といふのは、カントの云ふ如く我々の意志に對して一般的法則ではあるが、我々が單に「欺かない」といふ動機から行動すれば、それが直に善行であるといふことはできない。即ち善動機より起る行爲が直に善行爲とは云はれない。完全なる善行爲とは、與へられた事情に適したものでなければならぬ。現實の具體的實在は精神と自然との統一であつて、規範法は單に自然現象に對する自然の法則でもなければ、單に精神現象に對する所謂心理的法則でもない、具體的實在全體に對する法則である、自由意志の立場に於て我々の經驗内容を特殊化する法則である、與へられた自然、與へられた精神を統一する文化の法則である。我々の行爲に對する道德的判斷、即ち行爲の倫理的價值が單に目的や動機のみによらずして、手段をも顧慮せねばならぬと考へられるのは之によるのである。唯、我々は自然科學的立場の對象界を唯一の實在と考へ、個性的な

るものはその結合に過ぎないと考へるから、規範法も自然法に還元せられる様に考へるのであるが、規範的法則は却つて一層具體的なる特殊の實在、個性的實在に對する法則である。規範的法則が一般的であるといふ意味は自然法が一般的であるといふのと同一ではない、同一の中心から働くといふことである、同一體系の中心に結合せねばならぬといふことである。例へば、我々の身體に於て一々の部分それぞれ特殊なる職分と法則とを有するに拘らず、一つの目的がすべてを支配するのと同様である。特殊なる内容を離れては一般的目的は單に形式となるのであるが、目的の一般性といふのは、各部分をして何處までも特殊のならしめることである、部分が特殊のとなればなる程、一般的となるのである。「汝の隣人を愛せよ」といふ道徳的法則は單に「汝は他人に對して愛情を有てよ」といふことだけではない。無論愛情といふことは道徳の根柢ではあるが、愛情を有つといふことは單に我々が小なる自我を超越して大なる自我に結び付くといふことである。感情といふのはアプリアオリとアプリアオリとの直接の結合の状態、作用と作用との融一の状態である。道徳的命令は此の如き超個人的立場、否、超自然的立場から内容

の特殊化を要求するのである、個性的發展を要求するのである。若し此客觀的内容を缺けば、道徳的命令は道徳的命令たることを得ない、作品のない美的感情と一般である。藝術が音とか色とかいふ感覺的要素の特殊性を離れて存し得ざる如く、道徳も各時代、各社會に於ける特殊性を離れて存し得ないのである。此點に於ては、藝術に於て一般的法則を立てることができなると同様に、道徳に於ても一般法といふものはないのである。それでカントが「汝の Maxim が一般的法則となる如く行へ」といふのは、我々の意識の根柢に於ける超自然的或物に於て、すべての意識が結合することを要求するものであつて、その内容となるものは現實の具體的實在でなければならぬ。即ち歴史が道徳的意志の内容となるのである。歴史のアプリアオリといふのは個性的實在のアプリアオリである。歴史は我々の經驗内容の縦列的統一であり、一般的なるもの特殊化である。我々の現在の意識は過去を含むのみならず、又未來を含む、意識統一が深く大なれば深く大なる程、遠き過去を含むと共に遠き未來を含むのである。超自然的なる倫理的な人格からの意識統一、即ち世界史的立場からの特殊化的限定が道徳的意志の内容となるのである。

此特殊的内容を離れて道德的價値はない。偉大なる人物は極めて個性的なると共に大なる人間性を具へて居る。單に類型的なるものは、動物の如く何等の人間の價値を有しないのである。人類の各文化社會に於ける種々なる習慣、種々なる道德は自然の法則によつて發達せるものなると同時に、道德的意志の特殊化的過程である。此故に特殊なると共に、一般的價値を有するのである。規範的法則は自然の法則と結合することによつて、否之を統一することによつてのみ、眞に規範の法則となることが出来る。規範の法則とは自然の法則と結合して特殊化を要求する法則である。

特殊なるものの價値といふことに就いて、種々論すべきことがあるであらうと思ふが、或物が價値を有するといふことは、何等かの意味に於て一般的規範を認めるといふことでなければならぬ、單に特殊なる事實のみにては價値判斷の起り様はない。併し一般的規範によつて價値を認めるといふことは、物がすべて同質的であつて同様の法則に従つて生起するといふことではない。規範の法則は因果の法則ではない。又單に結果のみから見て我々が同一の場合に同様に考へる

といふことでもない。無論同一の人が同一の場合に於て同様に考へるの外ないであらうが、此の如きはやはり一種の因果的必然である。規範の法則といふのは乙が必ず甲に續いて生起するといふのではなくして、此結合に對する確信の法則である。我々の判斷作用は表象の單なる結合ではなくして、意味を含んで居る、即ち對象が内在的である。意味を有つて居るといふことは永久不變なる真理の世界への關係を有つと云ふことである。規範の法則は思惟作用に對する法則であつて、思惟されたものに對する法則ではない、一方に永久の價値を含むと共に一方に因果の法則に従ふ意識現象に對する法則である。單に因果の法則の下に立つ自然物には規範の法則はない、又純なる價値に生きるものに對しても規範の法則はない。規範法の現象となるものは、價値を理解して之に従ふものでなければならぬ、行爲者たると共に行爲の判斷者たるものでなければならぬ、即ち價値に従ふと否との自由を有しながら、之に従ふものでなければならぬ。それで一般的規範を認めるといふことは、同一の目的を認めるといふことである、即ち同一の目的を有する作用となるといふことに過ぎない。同一の目的を有する作用の價値を定

ひるには、一方にはその結果より見ることができると共に、一方には作用其者の價值によることができず。アルヒメデスの數學や物理學の知識は今日の一小數物學者にも及ばないであらう。併し之がためにアルヒメデスの能力が劣つて居たとは云はれない。此處に明に二種の價值判斷を見ることが出来る。併し此兩種の價值判斷が互に無關係と考へるならば、それは亦誤である。第二の價值は第一の價值を認めることによつて生ずるのである、與へられた現實と求めらるる理想との關係に於て生ずるのである。此關係が右に云つた數學や物理學の能力といふ如き場合に於ては、單に量的とも考へ得るのであるが、作用が人格的としてそれ自身の内容を有つ時、所謂特殊の價值を生ずるのである。我々が特殊の價值を認めるには、一方に一般的價值を認めねばならぬ。例へば數學的價值を認めることによつて、之に對する能力的價值が考へられるのである。是故に特殊の價值はカントの所謂 *reflectierende Urteilskraft* によつて生ずるのである。此の如き價值判斷の成立するには、すべての價值意識の交叉點といふ如きものが豫定されなければならぬ。此統一點が一般的なればなる程、純なる特殊の價值判斷が成立するのである。

る。藝術的價值といふ如きものは、此意味に於て最も特殊のと考へることが出来る。特殊の價值を認めるといふことは、一般的規範意識を否定することではない。或限定された規範を認めないと云ふに過ぎぬ、却つて此等の限定を超越して規範を内容とする規範意識を認めるのである。藝術的價值の如きも、唯超個人的なる全人格的意識を認めることによつてのみ成立するのである。

關係に就いて

關係に於て立つものと關係其者との關係は如何に考ふべきであるか。一方から考へれば、關係に於て立つもの即ち關係の要素とか項とかいふものに對して、關係其者は外から與へられると考へることができ、即ち元來獨立であつた甲と乙とが或關係に入り込むと考へることができ、併し一方から考へれば、關係を離れて關係の要素とか項とかいふものがあるのではなく、又關係の要素とか項とかいふもの即ち關係するものを離れて關係といふべきものはあり得ない。此兩者は不可分離の關係に於て立つと考へることができ、此問題は如何に解決すべきであらうか。

關係に於て立つものに對して、關係が外から與へられると思はれる場合を考へて見よう。例へば二つの物が或空間的關係に於て立つ時、空間的關係と二つの物とは互に獨立と考へられる。二つの物がその空間的關係を變ずるも、物自身には何等の變化もないと考へられる。併し此の如き場合に於て、不變なる物と考へら

れるものは何であるか。物とは感覺的經驗の不變なる統一に過ぎない、而して此等の經驗を統一するものは空間的形式である。單なる性質の類似は物の同一を定め、物の同一は空間に於ける位置によつて定まるのである。元來、物の本質として考へられる空間性といふのは感覺的性質ではなくして、超感覺的なる關係である、即ち思惟の對象たる客觀的關係である。

右の如く考へるならば、空間的關係の變化によつて物自身が變らないといふのは、單純に物自身が空間的關係と沒交渉であるといふ意味ではない。却つて空間的關係は物に本質的であると考へることができる。無論空間的關係が直に物の本質ではない、物理學は幾何學ではない。併し物の概念は感覺的性質と空間的關係との結合點に生ずるのである、即ち感覺的性質の關係と空間的關係との綜合的形式の上に成立するのである、力學的關係は此の如きものである。例へば、青い物と赤い物とがその位置を交換したとか、始一尺離れて居たのが次に二尺離れたとかいふ場合に於て、我々は物と關係とが互に獨立と考へる。併し斯く考へるのは、物が空間的關係と全然沒交渉であるといふ意味ではなくして、赤とか青とかいふ

性質が空間的關係から獨立であることを意味するのである。而かも青とか赤とかいふ性質が空間的關係から獨立するといふことも、其等が善惡の如き道德的關係から獨立するといふ意義と同一ではない。無論、青とか赤とかいふことを單に概念として考へれば、空間的關係と全然沒交渉とも考へ得るであらうが、直覺的經驗内容として赤とか青とかいふものは空間的關係と全然無關係ではない。此等のものが空間的關係に入り込むといふことは偶然ではない、此等のものが空間的關係に入り込むには、之を入り込ませるものがなければならぬ、關係に入り込むものと關係自身とを關係せしめる關係がなければならぬ。カントの所謂 *Qualität* の如きものがなければならぬ。自然科學の對象界は之によつて成立するのである。此物は青いとか赤いとかいふのは色の感覺的性質を區別するのではなく、又單に幾何學的位置を定めるのではない、物體的實在の性質を言ひ表すのである、自然科學的アブリアオリによつて構成せられた判斷である。物に對しては、空間的位置や相互の距離などが外的と考へられる如く、赤とか青とかいふ所謂感覺的性質も外的と考へることが出来る。物は色や形を變ずるも自己同一を維持すること

ができる。物は空間的關係に入り込む如く種々の識別的關係にも入り込むと考へることが出来るのである。物の本質は經驗の形式と内容を綜合するアブリアオリの上に成立するのである、物とは空間を占領し而かも何等かの經驗内容を有するものである。物が空間上の位置によつて其本質を變じないとか、色や形の變化に拘らず、その同一性を維持するとか考へられるのは、物は此等の性質に無關係であるといふ意味ではなくして、却つて物は此等の性質を含んで居ることを意味するのである。空間的關係や種々なる色の關係は物に對し外から與へられるのではなくして、物を構成して居る具體的關係の一面の特殊の限定である。赤い物と青い物とがその位置を交換するも、何等の本質的變化がないと考へられるのは、物といふ統一を構成して居る具體的關係の二面が互に獨立であるといふに過ぎぬ。數學の如きものに於ては *independent variables* を考へ得るとするも、元來或關係其者と關係の項といふものは相離れて成立し得ない、或一つの要素が種々の關係に入るのではない。單に要素といふべきものがあるのではない、何等か或定まつた關係の要素があるのみである。或一つの要素例へば物體の原子の如きものが

種々の關係に入り込むと考へられるのは、此等の關係を綜合統一する具體的關係が存在し、原子とは此關係の要素なるが故に、その關係の包含する種々の關係に入り込むことができ、而かも要素自身は不變と考へられるのである。物質の原子の如きも種々なる關係を離れて、獨立に實在性を有するが如く考へられるが、其實、自然科學的實在の體系に於ける一要素としてその實在性を有するのである、自然科學的アプリアオリの上に立つ關係の一要素として之と離すべからざる關係を有するのである。要するにそれ自身に獨立性を有し種々の關係に入り込むと考へられるもの、即ち種々なる關係が外から與へられると考へられるものは種々なる關係の結合點と見ることができ、而して此結合點といふのは單なる結合點ではなくして、此等の關係を綜合統一する具體的關係の項である。種々の關係に入り込むといふのは、その一面の關係を限定することである。唯その綜合的統一の内容が物體概念に於て見る如く内面的に明でない時、物は關係から獨立するかの様に考へられるのである。之に反しその内容が内面的に明なる時、項と關係とは不可分離と考へねばならぬ。

要素を離れて關係といふものなく、關係を離れて要素といふものはない。此兩者は一つのものの分つべからざる兩面である。關係は總て内面的でなければならぬ、單に外面的なる關係はないと云つてよい。要素は或關係の要素であつて、關係は或要素の關係でなければならぬ。我々は自然數の系列に於て考へる如き一二三などいふ要素が常に同一の意義を有し、種々の數學的關係に入り込む如く考へるが、整數の要素としての一二三と、分數を入れた有理數の要素としての一二三と、無理數を入れた實數の要素としての一二三とは同一意義の要素ではない。關係の意味の變ずると共に要素の意味も變せねばならぬ。現代數學に於ける羣論が數の深い本質に觸れると思はれるのは此點を明にするが故である。結合の法則の變化によつて要素の意味が變ずると考へねばならぬ。數の本質は關係にあつて所謂要素にあるのではない。而して此の如き生産的關係を意識し得た時、我は其の要素について先驗的知識を有つと云ふことができるのである。知識のアプリアオリとは要素を創造する作用である。我々が客觀的實在と考へるものは此の如き關係の結合の外にない、我々が獨立する要素と考へるものは無數の結合

點である、即ち關係の關係の上に現れ来る要素である、アプリアオリのアプリアオリの對象界に於ける要素である、單純なる關係を結合するものも亦關係である。即ち關係を關係せしめる關係である。單純なる關係に對して複合的關係或は綜合的關係といふものがある、考へねばならぬ。前に云つた自然科学的實在のアプリアオリの如きものがそれである、嚴密に云へば幾何學のアプリアオリの如きものに屬すると考へることができるのである。此の如き關係の關係とは如何なるものであるか。綜合的統一の内容が内面的に明であるとかないとかいふことは如何なることを意味するか。先づ色の關係と道德的關係といふ如き二種の關係が全く沒交渉と考へられる如き場合を考へて見よう。此の如き場合に於ては、我々は此兩者の間に何等の共有點がないと考へる。併し斯く二つの關係が比較され區別されるといふのは、兩者が論理的思惟の對象として論理的關係の上に立つことであるといふことができる。此の如き關係の結合點は所謂論理的思惟對象である。論理的關係はすべての關係に對し無限定にして、論理的對象はすべての關係の結合點なるが故に、論理的對象は己自身を變ずることなくして、すべての關係に入り

込むことができ、又逆にすべての物が己自身を變ずることなくして、論理的關係に入り込むことができる、即ち論理的關係は物に對して外から與へられると考へられるのである。我々が物をその關係から離して獨立の要素として考へる時、いつでも之を單なる思惟對象として限定して居るのである、即ち之を論理的關係に於て見て居るのである。次に空間的關係と色の關係との關係の如き場合に於て、赤い物と青い物とがそれ自身を變せずして種々の空間的關係に入り込むと考へられるが、向に云つた如く物理的實在とは思惟と感覺との統一のアプリアオリの上に成立する對象界である。原子とか電子とかいふのは此の如き關係の要素に過ぎない。フレネルが *Spiegelversuch* によつて光とエーテルの振動との關係を定めた時、光の現象がはじめて物理的實在として認められたと考へることができ、光や熱が力學的に取扱はれるといふことは空間的關係と一つの統一を成すことである、それは經驗内容の數量化によつて可能となるのである。普通に色や光が空間的關係と沒交渉と考へるのは此二つの關係を分析し抽象して、獨立の思惟對象となすが故である、換言すれば單なる論理的關係に於て結合するが故である。嚴

密なる物理學的立場から云へば、赤い物と青い物とが果して距離や相互の位置によつて各自の性質を變じないか否かは、實驗の上でなければ斷言し得ないのである。新實在論者は、ロンドンがパリーの北にあると云ふ如き場合、ロンドンに對し「北にある」といふ關係が外から與へられると云ふのであるが、それはロンドンの定義によることと思ふ。ロンドンといふ如き單に論理的思惟によつて構成せられた人爲的統一に於ては、何の關係を外的と考へるも自由である。

關係の項或は要素に對して、關係が外から與へられるとか、内に含まれるとか考へるのは、關係の關係に於て考へ得るのである。二種の關係の結合が自由なる時、即ち單に論理的關係に於て立つ時、二つの關係は互に無關係と考へられる、即ちその結合點たる思惟の對象は單なる要素其者として如何なる關係にも自由に入り込むことができる、と考へられるのである。物理的關係に於ては既に斯く考へることはできぬ、物理的關係はそれ自身の内容を有つて居る。抽象的に考へられた赤とか青とかいふものが物理的實在ではない。物理的實在は或時、或場所に於ける赤いもの、青いものでなければならぬ、位置や距離によつて如何に變ずるかは經

験の判斷に従はねばならぬ、單に論理的自由を許さないものである。併し物理的關係といへども未だ内面的とは云へない、單に偶然的統一である。例へば或花が赤いか、青いかは全く偶然的と考へられる。我々が數學的關係の如きものと區別して、物理的關係を外面的と考へるのは之に由るのである。向に統一の内容が不明であると云つたが、正しく云へば物理的知識のアブリアオリが不明であるのではな

い、統一が偶然的であると云ふに過ぎない。而して偶然的統一といふことは論理的關係に於ての如くその結合が自由であることを意味するのである。唯、物理的關係と論理的關係と異なるのは、後者に比して前者の内容が限定されて居ることである。併しその限定は單に限定といふことに過ぎない、一般的限定である、物理的關係に於ては、或花が青いか、赤いかは自由である。唯、物理的實在は何等かの經驗内容を有たねばならぬ、かかる意味の限定は物理的關係に於て本質的である、而して此限定に基づく物理現象は必然的である。純なる物理的アブリアオリの上に立つ力學的世界は必然的である。唯此限定が他の經驗内容に對して一般的なるが故に物理的統一が偶然的と考へられるのである。物理的統一は我々の經驗内

容の偶然的統一であるといふ意味は物理現象其者が偶然的であるといふ意味ではない、我々の具體的經驗内容に對して一般であるといふに過ぎない。物理的現象に於て、或花が赤くあることもでき又青くあることもできるから、偶然的に性質が外から加はるかのように考へられるのであるが、それは色といふ花の性質が特殊に限定せられると云ふことである。ロツツが論理學に於て明にして居る如く、概念は特殊なるに従つてその内包が増加すると考へらるるも、その實、内包の數が増加するのではない、唯無限定の内包が限定せらるるといふことである。或特殊なる三角形に於ては三邊の長さは限定せらるるも、之が爲に三邊の數が増加せらるるのではない。無論、物體が色を有たぬと考へることもできるであらうが、何等かの被經驗的性質を有つといふのが物體概念の必然的内包である、色といふのはその特殊なる限定に過ぎない。物理的説明が完成されるれば、赤とか青とか偶然と思はれたことも物理的必然の中に入り來るのである。斯くして青とか赤とかいふことは物理的實在の單なる符號となるのである。

右の如く考へて見ると、物理的統一が偶然的であるといふことは物理的關係の

アプリオリが抽象的一般であるといふことであり、すべての關係から離れて、要素が種々の關係に入り込むと考へられるのは或一つの關係を更に一般的なる關係の立場から見るといふことである。それ自身に於て全き一つの關係、即ち純なる關係が、更に一般的包容的なる關係と結合して一體系を成す時、後者の基礎に於て考へられた前者の要素が獨立の要素と考へられるのである、即ちアプリオリのアプリオリの立場に於て始めて獨立の要素といふ如きものが考へ得るのである。反省といふことは包容的立場から被包容的立場を見ることである。併し其意味は單に後者の立場に於て見るといふことではない、兩者統一の立場から見るといふことでなければならぬ、即ち一をして包容的ならしめ、一をして被包容的ならしむる綜合的統一の立場から見るといふことでなければならぬ、反省と綜合とは一つの作用の兩面である。分析にのみ重きを置く人は物を要素に分つことによつて、その全體を明にすることができると云ふが、之を要素に分つといふのは如何なる意味に於て分つのであるか。若し之を他の體系の要素に分つといふことならば、その目的を達することによつて全體系の意味は失はれなければならぬ。例へ

ば生理現象が物理や化学の法則に還元せらるるならば、我々の所謂生命はその實在性を失はねばならぬ。連続数が有限数の数学によつて説明し得るならば、連続数の数学は無くならねばならぬ。此の如き場合に於ては被包容的立場を包容的立場に於て反省するのではなくして、寧ろ之を破壊するのである。唯或一つの全體を要素の關係に還元して見て、還元し得ざるに及んで、此處に全體に對する反省が起つて來るのである、即ち全體を反省するといふことはアプリアリのアプリアリの立場に於て見ることである。我々は是に於て新なる直観によらねばならぬ、此處に反省と直観との結合があるのである。或物の特殊的全體を明にするには、之を一般的立場から分析して見ねばならぬのであるが、單に此の如き方向によつてのみ全體を明にすることはできぬ。此の如き要素を組み立てても、元的全體を構成することはできぬ。ヴァンデルバントの如く構成的範疇と反省的範疇とを區別して見ると、物の概念は此の如き構成的範疇の上に成立するのである、即ち物の概念はアプリアリのアプリアリの立場に於て成立するのである。而して物は此の如く種々なる關係の統一として種々なる關係に入り得ると考へられるのである。

る。構成的範疇によつて經驗を統一することは無限なる關係を統一することであつて、此の如き統一は一方に於て自由なる分析をゆるす綜合的立場の基礎に於てのみ可能である、即ち意志の立場に於てのみ可能である。眞の具體的實在の立場は構成的範疇と反省的範疇との統一である。物の概念とは此の如き立場に於てその無限なる統一の方向に於て成立するのである。此故に一方に物の概念が成立すると共に、之に對して一方に精神作用の概念が成立するのである。我々が關係を離れて抽象的に獨立の物といふ如きものを考へ得るのは、之によつて可能となるのである。反省的範疇の立場から見て構成的範疇の立場の上に立つものが、無限なる統一の極限として、獨立なる物と考へられるのである。併し眞實在の具體的立場から、更に徹底して、構成的範疇の立場と反省的範疇の立場とが合一すれば、藝術や宗教に於ての如く一般と特殊とが合一して、すべての關係が内面的となり、すべてが關係とも云ひ得るのである。

意識の明暗に就いて

一

我々が或物を意識するといふにも、色々の意味のあることは明である。例へば、私が外から或一つの箱を見る時、私はその外部を意識して居るが、その内部を意識して居らぬと考へることが出来る。少くともその内部は我々の意識に現前して居ない、直接に意識せられて居ないと考へることが出来る。併しかかる場合、直接に意識せられて居ないといふことは、感覺的意識に直接でないといふことの意味でなければならぬ。我々の思惟が感覺と異なつた一種の意識であるとするならば、思惟の意識には箱の内部も直接であると考へねばならぬ。或は感覺的意識のみが我々に直接であつて、思惟の意識は直接でないと考へられるかも知らぬが、直接でない意識といふもののあり様はない、思惟も意識作用として我々に直接でなければならぬ。思惟の意識が感覺と異なつて間接と考へられるのは、作用其者が

間接と考へられるのではなくして、その對象が間接と考へられるのである。併し對象が間接と考へられるのは何によるのであるか。我々の精神現象は外界刺激によつて起さるる脳皮質の作用に伴ふものであるとするならば、直接に感官を刺激することのできない箱の内部といふ如きものは、我々の意識に間接と考へられねばなるまい。我々は唯、過去の經驗によつて、間接に之を表象し得るのみである。心理學者は腦に蓄へられた過去の印象が復起することによつて、箱の内部の意識といふ如きものが成立すると考へて居る。斯く考へれば、思惟の意識が間接と考へられるのも無理ないことであらう。併し他面から考へれば、過去の意識といへども、記憶表象としては我々の意識に現在すると考へることも出来る。我々は現在の感覺的意識が過去の意識を代表するといふが、現在の意識が盡く感覺であるとするれば、我々は感覺的性質の外、何物をも意識できない筈である。心理學者は往種々なる非現實的經驗が無意識の形に於て現實的に意識せらるるか、如くに考へて居るが、所謂無意識といふのは不明瞭なる有機感覺の如きものか、然らざれば感情の如きものでなければならぬ。併し純なる感覺としては、一が他よりも明

瞭とか、不明瞭とか云ひ得るや否やは議論の餘地あるのみならず、不明瞭なるの故を以て、よく他を代表し得るであらうか。我々が遠くから或色を見て、その色の判別のできない時、我々は意識が不明瞭であると考へる。併し斯く考へられるのは意識をその対象との關係に於て見る故である。遠距離に於ける物の視覚として不明瞭といふのではない。感官の病的變化のため感覺が不明瞭と云はれる場合に於ても、同様に考へることが出来る。單純なる感覺的性質としては、それぞれの場合に於て明瞭である。又一方に於てその代表せらるる意味について考へて見ても、意味の意識は必ずしも不明瞭なものではない。三角形の概念は紙上の三角形よりも一層簡單明瞭である。意識が明瞭とか不明瞭とかいふのは、対象への關係を內在的に含むものとして始めて考へ得るのである。

所謂現在の意識が盡く感覺的性質に分析し得るとするならば、我々は之によつて非現在の意識内容を代表し様はない。所謂不明瞭な感覺といはれるものも、純なる感覺的性質としては、唯一のものでなければならぬ。我々の意識が所謂現在に限定せられて居るものとするならば、非現在のものに就いて知り様はな

い。然るに我々は明に非現在の意識を有つて居る、即ち記憶、想像、判斷などの意識を有することを否定することはできぬ。我々が現在に於て如何にして此の如き非現在の意識を有することができるか。我々が過去の何事かを想起する場合、過去の感覺がヒュームの所謂 faint images の如きものとして現れ來ると考へる。此等の所謂記憶心像といはるるものは原經驗に比して内容に於て不完全なものである。又強度に於て弱きものでもあらう。併し此の如く腦中樞の刺戟に伴ふ感覺とも考へ得べき記憶心像は、感官より來れる刺戟に伴ふ所謂感覺と如何に異なるであらうか。我々は夢に於て、又幻覺に於て、此二者を混同することは誰も知る所である。勿論「太陽」の表象は輝かぬといふ如く、感覺と表象とは性質的に異なつて居るとも考へ得るが、輝かない表象の「太陽」といふ如きものは所謂意味といふべきものであつて、此の如き意味を意識するといふことが既に感覺以上のものを直接に意識し得るといふことを含んで居るのである。若し超感覺的な意識があり得ないとすれば、所謂記憶心像といふ如きものと感覺とを區別するは何に由るのであるか。心理學者は時間徴驗 Zeitzeichen によるといふが、所謂時間徴驗なるも

のが時間的關係を示し得るには單なる感覺以上の或物を含んで居なければならぬ。無論感覺なくして意味の意識はないと云ひ得るであらう、感覺を離れて心理的實在は成立し得ないとも考へ得るであらう。併し感覺的實在とは如何なるものであるか。實在としての感覺は意味を離れてあるのではない。我々が或色を見るといふ場合と、我々が或數理を考へるといふ場合とを比較して見るに、色自體といふ如きものと自己との關係と、數自體といふ如きものと自己との關係との間に、對象其者の性質の相違の外に、如何なる相違があるのであらうか。我々が數理の如きものを考へる場合にも、必ず感覺的基礎によると考へて居る、即ち何等かの感覺的基礎と結合することによつて、數理の如きも意識現象となる、即ち思惟作用となると考へられるのであるが、感覺が思惟するのではない、感覺が意識するのではない。意識とは種々なる作用の結合である、種々なるアプリアオリが直接の關係に入込むのが意識である。我々をして感覺を具體的精神現象と考へしむるものは、その内容にあらずして、無限なる關係の實現點なるが故である。單なる感覺的内容はボルツァーノの表象自體の如きものに過ぎない。具體的意識現象とは心理

學者の所謂精神的要素といふ如きものではなくして、何處までも人格的でなければならぬ種々なる作用自身の結合でなければならぬ。

以上述べた如き譯であるから、我々が箱の外部を見て居る時、その内部が直接に意識せられないとは云はれない、現在に於て過去の事實が意識に現前しないとは云はれない。無論感覺的には現前するとは云はれないが、思惟對象は思惟の意識に現前しないとは云はれない。而して思惟の意識は感覺的意識に比して必ずしも間接の意識であるとは云はれない。意識現象に於ては關係が實在的である。ジュームスの云つた如く經驗を結合する關係はそれ自身も亦經驗せられた關係でなければならぬ、即ち關係の項と同じく實在的でなければならぬ。物體現象に於ては關係は非實在的であるが、精神的現象に於ては然考へることはできぬのである。

二

我々が意識するといふにも色々な意味がある。感覺的に意識するといふこと

と、思惟的に意識するといふことは異なつて居る。感覺的に意識することのできないものも、思惟的に意識することが出来る。而して思惟の對象も感覺のそれの如く自我に直接である。自我は感覺に固着するものではなくして、作用の統一である。常に思惟と感覺とが異なるのみならず、感情とか意志とかいふ如きものは如何なる知識とも其類を異にする別種の意識であるといふことが出来る。以上の如く意識には種々の性質上の區別を認めねばならぬばかりでなく、意識の程度に就ても亦種々の差異を認めねばならぬ。心理學者が意識の強度なるものを考へるのは之によるのである。意識の程度については、我々は種々の區別を爲すことが出来る。先づ大別して意識的と無意識的といふ様に區別することが出来るが、意識にも種々の程度があり、無意識にも種々の程度があると考へることが出来る。無意識の意識といふのは、パラストの如く聞えるのであるが、種々なる過去の經驗が現在の意識に影響する場合の如き、我々は之を無意識作用と見ることも出来るであらう。

正當の意味に於て意識といふ中に於ても、種々なる明暗の度を區別し得るのみ

ならず、明暗の意義に就いてすら色々に考へることが出来ると思ふ。例へばジュームスの「意識の流」に於て論せられて居る如く、或一文章を想起するに當り、第一の語が意識に上つた時、他の語が含蓄的に意識せられて居るといふ如き場合、現に意識上にある語は明であつて、他の語は暗であると考へることが出来る。之に反し、我が既に或重量を感じ居る上に更に重量を加へる時、増加量がツェーバーの法則によつて一定量に達するまでは之を意識しない。併しスタウトなどは之まで全く無意識であつて、此時突然意識せられるのではないと考へて居る。此の如き場合、増加が反省され判断された所が明い意識であつて、それ以前が暗い意識と考へ得るのである。我々が意識して居ても氣付かなかつたことを後に想起する如き場合も之と同様と考へ得るであらう。以上の如き場合によつて考へて見ると、意識が反省せられ判断せられた所が最も明なる意識と考へられ、之に反し未だ認識對象とならない言ひ表はすことのできない意識が暗い意識と考へられる様である。併し又他方から考へれば、全意識を反省することの不可能なるのみならず、我々が或意識を反省する時、既に其意識の立場を離れて居る。我々に最も明かな意識と

いふのは却つてそれ以前の知覺的意識とも考へ得るであらう。要するに意識の明暗といふことも意識作用の目的によつて異なつてくると見なければならぬ。思惟を單に知覺の不完全なる模寫と見れば、知覺は最も明なるものと考へられるが、思惟がそれ自身の目的を有するものと考へれば、知覺は却つて内容の不明なるものとも考へられる。知覺は思想の表現としては不完全である。知覺に捉へられて思惟するのは思惟を不明にするのみならず之を誤るものである。加之ヴルツブルク學派などの考の如く思惟の明暗と知覺の明暗とは必ずしも同一ではな
い。余は此點に於てジェームスの綠暈 *psychic fringe* なるものは多少意義の不明を免れないと思ふ。若し後に現れ來る直覺的意識を指すものならば、不明と云ひ得るも、若し全體の意味を指すものならば、全體の意味は最後に至つても直覺的となるのではない。其外感情にしても、意志にしても、それぞれの立場に於て異なつた意味の明暗の度を有つて居ると考へることが出来る。例へば藝術家は自己の藝術に就いて明瞭なる知識を有つて居らぬかも知れぬが、之がためその藝術的意識が明瞭でないとは云はれない。要するに意識作用はブレンターノの云ふ如く對

象を内在的に含み、その目的に近づくに従つて、明瞭の度を増すと考へることが出来る。併し意識全體としての目的點は何處にあるかと云へば、意識は單なる作用ではなくして種々なる作用の統一或は作用の作用であるから、意識の眞の目的點は作用の作用の目的點即ち眞の自我にあるといふことが出来るであらう。此點が意志の目的點として存在と意味との結合點である。それで感覺は單なる感覺としてではなく、思惟内容を含むものとして具體的意識となり、思惟は單なる思惟としてではなく、感覺的内容を含むものとして具體的意識となる。普通に思惟が感覺と結合することなくして意識現象となることができないと考へらるる眞の意義は此にあるのである。此故に感覺的意識は反省し判斷し得る所に至つて最も明と考へられ、感情は藝術的表現に至つて最も明と考へられる。意識全體としては、意志に於て意識が最も具體的となり、最も明となると云ふことが出来る。意識の中に種々の程度を考へ得る如く、無意識の中にも種々の程度を考へ得るであらう。ジェームスの綠暈の如きも或は之を無意識と考へ得るかも知れぬが、之を程度の低い意識として意識の中へ入れてしまふならば、無意識とは潜在的意識

といふ如きものを指すこととなるであらう。過去の経験は直に意識の閥以下に入るも、その大部分は我々の意識と何等かの関係を有つて居る。過去の意識が現在の意識に影響する仕方は或は無意識的に働くこともあるであらう。又意識的に働くこともあるであらう。同じく意識的に想起さるるにしても、過去の事實としての認識を伴ふことと然らざることとあるであらう。又想起可能の程度についても種々あるであらう。我々が到底想起し得ないと思はれる過去の経験も必ずしも全然忘却したものとは云はれない。又此等の場合と異なり、動物の本能作用に於て見る如く、個人的経験以前の経験の影響といふ如きものをも考へることができるであらう。斯くの如く、無意識といふものを許すとすれば、それが現實の意識に關係する仕方に就いて、即ちその働き方について、種々の仕方があり、種々の程度があるといふことができる。無論今日の心理學者の多くは無意識といふ如きものを許さないであらう、此等の作用をすべて脳細胞の作用として説明するであらう。併しベルグソンが「物質と記憶」に於て論じて居る如く、物質より精神は出ない、脳は精神の蓄積所ではなくして運動の機關である。物體界とは精神現象

の説明の爲に設けられた假定の世界に過ぎない。而して直接の具體的實在たる精神現象は意識の統一によつて成立つ、所謂物體界も之に基いて成立するのである。それ自身によつて立つものは意識の直接なる統一あるのみである。無意識なるものが説明のために設けられた假定に過ぎないと云ふならば、物質といふものも同様の假定に過ぎない。

右の如き無意識と意識とは如何なる關係に於て立つか。余は向に思惟の對象は感覺的には現在でないが、思惟の意識には現在であると云つた。過去の意識は感覺的に現在でないことは云ふまでもないが、過去の経験が何等かの形に於て現在の意識の中に働きつつあることは事實である。我々の知覺の中には多くの過去の経験が含まれて居るのである、唯再認識として獨立の意識とはなつて居らぬ。想起せられた過去の経験が再認識として獨立の意識を成す時、我々は之を知覺の意識と異なつた對象界を有する別種の意識と考へることができる。記憶の意識といふのは所謂時間を超越した意識と考へることができる。記憶の意識とは我の個人的意識を超越すると共に個人的経験は之によつて統一せられ、之によつ

て成立するものである。過去の経験も此意識に對して現在であると考へることが出来る。若し斯く考へ得るならば、我々が現在の意識と過去の意識との結合として考へた「無意識」といふものの考をも變じなければならぬ。記憶に於ては過去の経験がそのまま繰返さるるのではない。過去の感覺的経験は如何に現在のそれに酷似するも、過去の意識であつて現在の意識ではない。過去の経験が何處かに潜在して再び現れ来るのではない。此點に於ては今日の心理學の考に同意することが出来る。記憶の意識の成立するのは過去の経験が記憶の對象として改造せられ現在の経験も亦同様の對象として改造せられ、而して後兩者が結合せられるのである。換言すれば兩者が「時間」の範疇の中に入つてはじめて結合せられるのである。記憶とは「時間」の自覺である。眞の無意識精神の世界とは感覺又は知覺の世界よりも一層高次的なる世界でなければならぬ。過去の経験は此世界に於て保存せられるのである。「生の唯中に於て我々は死の中にある」 *in morte sumus* といふべきである。譬へば一次元の上を一つの點が動くとするば、一次元の上に於てはその點の過去は繰返すべからざるものであるが、二次元の

上に於てはすべてが現在である。無意識といふのは所謂現在の意識と同一線上に横はるのではない、高次元の上にあるのである。意識の尖端たる感覺的意識の経過をたどれば、唯物質點の連續あるのみである、物理學的時即ちベルグソンの所謂 *le temps écoulé* あるのみである。心理學者が過去の意識と現在の意識の媒介者として腦細胞の如きものを考へるのも之に由るのであるが、之を以て直に無意識を否定することはできぬ。右の如き考を推し進めて本能といふ如きものも一種の無意識として考へ得るであらう。生命は物力より一層高次的對象界の實在である。この見方からして、ハルトマンなどの考の如く物力をも一種の無意識と考へ得るでもあらう。斯くして此等のものがシーペンハウエルの考へた如くプラトーの理念として藝術の對象ともなり得るのである。嚴密に考へれば、記憶の意識による統一と、本能による統一とは全然同一ではない。前者は自覺的精神の統一であるが、後者に於ては統一が自覺的となつて居ない、即ちそれ自身によつて立つ直接の實在とはなつて居ない、他によつて考へられた統一である。此點に於て本能的統一は知覺的統一とその類を同じくすると云ふことができる。知覺の

背後にも過去の潜在的意識が働きつつあると考へねばならぬが、それは別個の意識として意識せられるのではない、それ自身の中に過去への関係の自覺を含んで居るのではない、我々は之を外から説明するのである。

余は是に於て向に述べた如き意識の明暗の考によつて、意識と無意識との關係を考へて見よう。例へば意識の縁暈の如き場合と過去の經驗の想起の如き場合とを比較して見ると、我々は普通に前の場合に於ては、その結合が直接で恰も一つの意識連続の中に於て行はれ、後の場合に於ては、無意識作用又は腦細胞作用の如きものによつて中斷せられて居ると考へるのであるが、意識に種々の種類があり、従つて明暗の意味も異なるとすれば、一つの連続せる意識と考へらるるものの中にも既に超感覺的なる即ち超時間的なる意味の意識が含まれて居るといふことができる。内省的立場から云へば、過去の經驗を想起する場合と同様に考へることがができる。外界に於ける時の長短といふ如きことは内省的立場に對しては問題とならない。前の場合に於て意識が連結すると云ひ得るならば、後の場合に於ても爾云ふことができるであらう。而して物體が永遠なる如く意識も永遠と考

へることができ。物體の永遠性は我々の意識一般の永遠性に依存するのである。斯くして普通に考へる如き意味に於ての意識と無意識との區別及び相互の關係の考も之を一變ししなければならぬ。無意識といふのは異なつた對象界を有する意識と考へるのが至當であらう。無意識が働くといふのは高次の意識統一が働きつつあると考へることもできるであらう。無意識といふことは單に意識がないといふことではない、感覺的意識を超越して居るといふことである、異なつた内容の意識と考へることもできるであらう。

以上論じた中に於て、或は余が對象の永遠性と作用の永遠性とを混同して居ると考へられる所があるかも知れない。意識の對象が超時間的であるといふことは意識作用が超時間的であるといふことを意味しないのは言ふまでもない。思惟對象たる眞理は永久なるも、思惟作用は時間上の出來事と考へられるのである。唯、精神現象に於ては時は外面的ではなくして、内面的である。ライブニッツがモナッドは極微知覺によつて現在に於て過去を貫ひ未來を孕むと云ふ如く精神現象は過去と未來とを内面的に含むのである。自我は時の創造者である。此意味に於て過去が自我に現在であるといふことができる。無論、物體現象の場合に於ても、背後に考へられた物力は過去も未來もない。物力の概念は時間空間に打克つたための手段である。併し物力は自己の中に歴史を含まない。時は獨立變數である。此點に於て精神現象と異なるのである。斯く精神現

象は物體現象と異なつた意味にて過去を含むといふことは、之を實在の具體的見方と考へることもできるであらう。

精神現象に於ては右に云つた如く、物體現象と異なつて過去及び未來を現在の中に内面的に含むとしても、或意識内容が單に含まれて居るといふことと、それが現れるといふこととの區別がなければならぬ。全く同一の意識内容についても、單にそれが意識せらるると否とを區別することが出来る。普通に無意識精神の作用などといふのは寧ろ高次の意識の作用と見るべきものとするも、高次の意識についても、それが意識に現れると否とを區別せればならぬのは云ふまでもない。併しかういふ意味で、現實と非現實とを統一するものは自由意志である。意志は意識の内と外との統一である。意志は意識の根柢として常に働くこと考へることが出来る。ライブニッツがロツクに反し心は常に考へるとなし、極微知覚によつて豫定調和を説明し得ると云ふのも、斯く解することが出来る。無論意志を斯く考へるのは普通の考とは異なるであらうが、普通の考にしても、我がの性格は外界の影響によつて無意識の中に變ずると考へられる。即ち内外統一の意志は何時にも動きつつあるのである。普通に意志といふのは却つて意識せられた内感覺や活動の感情などの結合に過ぎない。

又本文の中に於て余が意識の明暗と眞偽とを一緒にして居ると考へられる所があるかも知れない。意識現象としての明暗とその内容の眞偽とは直に同一視すべからざることは云ふまでもない。誤れる思惟の内容も意識現象としては眞なる思惟の内容と同一程度に於て明であるといふことが出来る。併し斯く考へるのは、本文に於ても云つた如く、多くの場合、感覺の明暗と思惟の

明暗とを混するに由ることを注意せねばならぬ。意識現象は目的を内在的に含むことによつて意識現象たることができるのである。此意味に於て、意識の明暗はその對象との關係に於て定めざるの外はない。明なる思惟は眞なる思惟でなければならぬとも云ひ得るのである。それでは此の如き相反する二つの考は如何に調和し得るであらうか。前者の如き思想の根柢には、事實には誤はない、否事實は眞偽の性質を有たぬといふ考が潜んで居る。特に意識現象に於ては、その一々の内容が性質的に相異なり、各が唯一にして繰返すことのできぬ特質を有するとも考へられるのである。併し單に性質的にして一々異なるものは一つの實在を構成することはできぬ。我々の意識現象は對象への關係を含む事實である。要するに、我々の意識内容は眞なることもできれば偽なることもできる自由意志の内容である。種々なる客觀的内容の人格的統一である。それで意識内容は客觀的對象との關係に於て考へられると共に、人格的統一との關係に於て考へられればならぬ。意識内容は對象者ではなくして、人格的内容によつて色どられたる内容である。此立場から見て、誤れる思惟内容も人格の表現として眞なる思惟内容と同様に明であると考へることが出来るのである。今日の一派の認識論者の考へる如く意識の對象と内容とは同一でない。意識の明暗と眞偽とは直に一つと考へることはできぬ。意識の正當の目的は人格的統一として之によつて眞の明暗の度が定まつて來るのである。併し感覺の明暗が思惟の明暗に影響する如く、人格的意識内容の明暗は或程度まで之を構成する作用の對象的關係の明暗によると考へることもできるであらう。

個體概念

ライプニッツは氏の哲學の發展を見るに最も重要なドキュメントとして知られて居る「アルノーとの論争」(Correspondance de Leibniz et d'Arnauld. 1686—1690)の中に、一般概念 *la notion spécifique* に對して個體概念 *la notion individuelle* の本質を明にして居る。ライプニッツはすべて眞なる命題は主語の中に述語が含まれて居らねばならぬ、即ち *Praedicatum inesse subiecto verae propositionis* といふ考から出立して、眞の個體概念とはその中に「或物に生じた又生するすべての事件」を含んだものでなければならぬと考へた。アダムの概念の中にはアダムによつて生じたすべての事件が含まれて居らねばならぬ。一般概念とは之に反し或物の一般的性質のみを含んだものである。従つてその存在に關する特殊なる何等の事情をも含んで居らぬ。アルヒメデスがその墓の上に置いたといふ球の概念は種々特殊なる事情を含んで居るが、單に一般的に球といふ概念はその一般的性質しか含んで居らぬ。而してライプニッツの哲學によれば、神は一般的性質の結合によつて成る無限に可能な

る世界の中から、最善なるものを選んで此世界を創造したと云ふのである。例へば最初の人たるアダムの徑路についても無限に異なる徑路が考へられたであらう。我々の祖先のアダムの歴史はその一である。併し神が此一つのアダムを創造した時之を全世界との關係に於てした。アダムの個體概念の中に盡未來際に互りてアダムによつて起るすべての事件が含まれるといふことは、アダムに於て起る一々の事件が豫定調和によつて全世界との關係に於て定められたといふことを意味する。個體が個體となるといふことは全世界と動かすべからざる關係に入込まねばならぬ。ライプニッツは近世哲學に於てはじめて個體概念の眞相に到達した人といふことができる。

何年、何月、何日、何時、何分、何秒に日蝕があつたといふことは、ナポレオンが何年に何處で生れたといふと同じく、二度と繰り返すことのできない唯一の事實である。無論、單に日蝕といふ事件ならば幾度にも繰り返すことができるであらうが、唯、宇宙發展の過程に於て、何月、何日、何時、何分といふ如き時點は、永久に再び繰り返すことはできぬ。縦、ニーチエの「永久の繰返し」の考に於ての様、すべて此世界が同

一の状態に歸り來ることがあるとしても、少くとも時間の形式に於て同一の點は再び之を繰り返すことはできぬ。何月何日の日蝕が繰り返すことができないと考へられるのは、此の如き宇宙時の上に限定して考へられる故である。すべて或一つの物が唯一と考へられるには全體との關係に於て限定せられなければならぬ。單に經驗内容としては幾度にも繰り返すことができるかと考へ得る日蝕が、時間上に限定されることによつて、繰り返すことができないと考へられるのは、時間の形式がカントの云つた如き經驗界成立の根本的約束であつて、宇宙は時間の中に含まれて居ると考へられる故である。即ち時間上に於て限定せられるといふことは全體との關係に於て限定せられることを意味するのである。時間的限定によつて或物が繰り返すことができないと考へられる如く、因果的關係に於ても斯く考へ得るであらう。何月何日の日蝕は過去の過去から未來の未來に互る無限なる宇宙因果の連鎖に於て再び繰り返すことはできぬと考へられる。而してそれは時間の場合と同じく因果律は存在の根本的條件と考へられる故である。此筆、此机、此猫、此犬といふ如きものも唯一のものと考へられるのであるが、我々

は何によつて此等のものを唯一と考へるのであらうか。此場合に於ては日蝕の場合に於ての様に或事柄が唯一と考へられるのではなくして、或物が唯一と考へられるのである。即ち此等のものは唯一の事件ではなくして唯一の物である。個事ではなくして獨立の個物である。個事と個物と如何に異なるか。日蝕といふのは太陽と月と地球との位置上の關係から起つた一時的の現象であるが、此筆、此机、此猫、此犬といふのは一定の性質を持続する統一體である。太陽、月、地球も此の如き個物であつて個事は此等の個物の關係に於て現れると考へることができぬ。無論此筆、此猫などは言ふまでもなく、太陽、月、地球の如きものであつても、何處までもその統一を持続するや否や不明である。否何物も永久持續することは困難であらう。太陽、月、地球といふ如きものも、化學的要素の一時的結合であつて、更に現今の物理学にて考へられる如く、元素も破壊し得るものとするならば、すべてが電子の結合といふ事ともなるであらう。然らば電子は如何にして個物と考へられるか。電子はすべて同性質と考へられるならば、電子其者の性質によつて何等の區別はできない。單に一號二號としてその空間、時間上の連續を跡附けるの外はな

からう。而して一つの電子が永久不変にして時間、空間上無限の關係に入り込むといふことは、一方から考へれば、一つの電子は時間、空間的宇宙の全體系に於て、或定められた運命を有つといふことでなければならぬ。電子一號は一號で定められた進路があり、二號は二號にて定められた進路があるといふ事ではなければならぬ。此場合に於ても全體系中に於て定められた唯一の位置といふことが、其物を唯一と考へしめるのである。唯個事と個物と異なるのは、個事とは一つの直線上に於て定められた一點の如きものであつて、個體とは平面上に定められた一直線の如きものである。宇宙體系の進行上に於ける定まつた一縦線である。斯くしてライブニッツの考へた如く個體は連続であり、生じたもの又生ずるものを含むといふことができる。(Chaque de ces substances contient dans sa nature legem continuationis seriei suarum operationum, et tout ce qui lui est arrivé et arrivera) 個體概念の成立するには全體系が直線的ではなくして平面的でなければならぬ。我々が此筆、此机、此猫、此犬といふ如きものを個體として唯一と考へるのも、此の如き考へに基くのである。

個體概念は右に述べた如きものとして、個體は如何なる性質によつて己自身を

他から區別するか。若し電子といふものが物理學者の考へる如く同質のものであるとすれば、電子其者の性質によつて、其一を他から區別することはできない。唯甲と乙との時間、空間上に於ける徑路の差異によつて分つの外はない。之に反し個體其者の性質によつて、一が他のすべてから區別せらるると云ふならば、デモクリトスの原子が形狀大小に於て、ライブニッツの單子が視點や明暗の度に於て、無限に相異なる如く、いづれの個體も同じきものなく、如何に相類似する個體といへども、何等かの性質によつて相異なつた所があると考へなければならぬ。併し單なる性質上の差異といふことは未だ眞の個體概念を與へることはできぬ。すべての物が一つの體系の中に統一せられ、嚴密に全體との關係に於て限定せられて、はじめて唯一の個體といふ如きものが考へられるのである。水が熱して蒸氣となり、冷えて氷となつた時、我々は其の性質の異なるにも關らず、一つの個體と見るのである。之に反し、氷は水よりも硝子に似て居るとしても、氷と硝子とは同一の個體とは考へられないのである。性質上、或個體が限定せられるには、その後統一されたる全體系の考へなければならぬ。

一般概念とは之に反し、ライブニッツの球の例に於ての如く、全體系の上に於て限定せられるのではなく、唯抽象的に若干の内容を限定したものである。如何に多くとも我々が之を盡し得るものである。數學的真理が最も一般的と考へられるのは之によるのであらう。物理學的法則の如きも、我々の具體的經驗の或性質を限定することによつて成立するのである。或る一つの他に類例なき原子があつて、化學者がその性質を知り盡したとしても、その物の個體概念を得たとは云はれない、それにはその原子の歴史が加はらねばならぬ。實在の數が無限であつて、全體を知ることができぬにも關らず、一つの物が個體と考へられるのは、何等かの意味に於て、全體系が知られ居ると考へられる故である。全體との關係を或物の性質の中に入れて見ることによつて、個體概念が成立するのである。全體と動かすべからざる關係に於て立てば立つ程、個體的となるのである。

或物が眞に全體との關係に於て限定せられるには、部分の中に全體の意味が含まれねばならぬ。例へば曲線の各部分に曲率の意味が含まれて居る様なものでなければならぬ。全體は部分に對して單に一般的典型ではなく、部分は全體の單

なる一例ではなく、全體と部分とは内面的關係を有つて居なければならぬ。一平面上に順序なく散在する點も、一曲線を形成する連續點も、點といふ一般概念に對しては、いづれもその一例にすぎぬかも知れぬが、後者に於ては全體と部分との間に内面的關係が成立つて居る。點は單なる點ではなくして、一つの個體となるのである。個體に對する一般は單にその一般的典型ではなく、創造力でなければならぬ。即ち一般の中に特殊的作用を含んで居らねばならぬ。個體はまた單なる個體ではなくして、其中に全體との關係を含んで居なければならぬ。此等の關係は恰も或曲線とその代數方程式との關係の如きものでなければならぬ。或曲線の點といふのは、點の概念に曲線上の位置といふ性質が附加せられたといふ以上、或物を有つ。關係が要素其者の内に内在的である。要素は全體の部分として意義を有するのである。勿論見方によつては類と種との形式による概念的知識は不完全なものであつて、眞理はすべて全體と個體との關係に達すると考へることもできる。兎に角我々は單に或物の性質の枚舉に於て終極の個體概念に達するのではない。却つて逆に背後に横はる全體の概念から個體概念を限定せね

ばならぬのである。而して此時我々は知識の立場を變ずると考へねばならぬ。以上論じた如く、個體概念は全體からの内面的限定によつて之に達することができるならば、我々の經驗的知識に於て我々は眞の個體概念に到達することは不可能であると考へることが出来る。豫定調和を策した神のみ之を知ると云ふべきであらう。併し我々の經驗を統一し、知識を構成し行く上に於て、自ら二つの態度があり得るのである。一つは、具體的經驗をできるだけ一般的要素に分解して、その一々の關係を一般的法則によつて説明し行くのであり、一つは、難多なる經驗を個體と見て、全體の統一を求め、更に之を背後の全體の部分と考へ、何處までも全體の背景を豫想して、綜合的に進み行くのである。恰も彫刻家が大理石から一つの像を刻み出す如く、無限なる全體の上に新なる實在のレリーフを作るのである。具體的經驗の一々の連鎖を一般的因果律によつて考へるといふことと、全體を統一して個體概念を構成するといふこととは決して矛盾するものではない。却つて一々の連鎖を因果的に明にするといふことによつて全體の統一が明となるのである。唯、自然現象に於ては要素の統一の上に何等の新しい實在の姿

を見ることのできない、單に時間、空間の上に於ける物質の盲目的結合と考へるの外はない。然るに精神現象に於ては、ヴントなども心理的因果を以て創造的綜合と考へ居る如く、要素の綜合の上に新なる意義の實在を生ずると考へねばならぬ。否、要素は却つて此統一の上に於てその實在性を有するのである。是故に精神科學に於ては個體概念に基く個性の學問が獨立の基礎を有すると考へることが出来るのである。自然科學の中に於ても生理學や生物學などは統一的發展を論ずると考へられるでもあらうが、此等の統一的概念は説明の問題であつて、説明の基礎とはならぬ。若し之を説明の基礎として用うるならば、一種のテレオロジイに陥るであらう。個體概念に基く精神科學に於て、比較や分析によつて一般的性質や因果的連鎖を明にする事が不必要であるといふのではない。唯單に此等の方法によつてのみ個體知識を明にすることはできぬ、別に全體の直觀より出立する綜合的見方がなければならぬと思ふのである。前者は却つて後者の手段と考へることが出来る。是故に個體的知識を目的とする精神科學に於ては、藝術と同じき創造的想像の力を要すると考へるのである。

ライプニッツの本體論的證明

千六百七十六年の秋、パリにゐたライプニッツがロンドンから和蘭を過ぎて本國に歸る時、ロンドンの方は八日間しか居なかつたが、和蘭では二月程も逗留して遂にハーグに於てスピノーザと會したことは誰も知る事實である。此際ライプニッツはスピノーザと如何なることを話したか。ライプニッツの遺著を出版したFoucher de Careilの見出したライプニッツ自身の記録の中には、スピノーザと食後間談の節、スピノーザの方では *De Witt* 虐殺の日、戸外に出ようとしたが宿の主人が戸を閉ぢて出さなかつたといふ様な話などあり、ライプニッツの方はデカートの運動の法則を論じ、その缺點を指摘し、之に氣付かざりしスピノーザは驚いたといふ如きことが記されてある。ライプニッツは其外 *Theodicee* の中などでもスピノーザとの會合に於て政治談をしたといふ様にいつて居るが、ライプニッツがスピノーザを尋ねたのは爾く哲學上無意義のものでなかつたであらう。シュタインの疑つて居る如く、(L. Stein, *Leibniz und Spinoza*) 急いでハノーヴァーに行かねばならなかつ

た筈のライプニッツがニュートン、ボイル、コリンズ、オルデンブルグなどの文通者に富むロンドンに於てすら八日しか留らないで、*Grievius* と *Spinoza* との外、彼に關係ある何人も居なかつたと思はれる和蘭に二月も費したのは、全くスピノーザに會ふ爲であつたらうと考へられる。パリに居て暫く哲學を遠ざかつて居たライプニッツは再び哲學問題に興味を有し來り、和蘭への船中に於てすらスピノーザに示す爲とも思はれる運動の原理の論文を書いて居たといふから、和蘭に二月も居たのは全くスピノーザの友人 *Schuller* によつてスピノーザの哲學を研究し、且つ同人の紹介によつてスピノーザに逢ふためであつたと考へられる。兎に角ライプニッツ自身の書いた本體論的證明 *Quod ens perfectissimum existit* はスピノーザの議論の内容たることはライプニッツ自身の附記によつて明である。

神の本體論的證明と云へば、今の哲學者は一概に之をスコラ哲學の遺物として一顧の價値もないものと思ふのであるが、ヘーゲルも嘗て之を以て神の存在の有る力なる證明となした如く、余も此論證に深い一面の眞理があると思ふのである。概念といふ語を單に抽象的意義に解し、存在といふ語を單に自然科学的存在の意

義に限定するならば、本體論的證明といふ如きものの誤れる論證なることは言ふまでもないであらう。併し存在の前に當爲がなければならぬ、自然科学的存在も當爲の基礎に於てのみ考へ得るのである、而して體驗の世界に於ては當爲は即ち實在である。デカールが不完全なる我々が完全といふことを考へ得る以上は、完全なるものが存在しなければならぬと云つて居るが、完全とは當爲の要求である、思想が我々の中にあると云ふよりも、我々は思想の中にあるといふべきである、無限なる理想はそれ自身に依つて存在し、我々の思想はその限定に過ぎないと考へることもできるのである。

ライブニッツがスピノーザに會つた時、「最完全者は存在す」といふことを論じて、積極的で、絶對的で何等の限定なき單一なる性質が完全といふことができる。此の如き性質は分析し定義することができぬから、すべての完全なる性質は一主體に結合すると考へることができぬ。何となれば甲と乙とが兩立しないと云ひ得るには、此二者を分析し限定して考へねばならぬ。併し此の如きことは不可能である。さらばとて、一の性質を他と比較しないで、それ自身にて他との不兩立を知る

ことも不可能である。要するに完全なる二つの性質の不兩立を論理的に證明することもできなければ、直覺的に知ることもしできない。故に完全なる性質は一つの主體に結合することが可能である。而して存在といふことも此意味に於て完全といふべき性質の一つであるから、此の如き主體は存在せねばならぬと云つて、デカールの本體論的證明の不足を補うたとライブニッツ自身が記して居る。而してスピノーザは初め之に反對したが、ライブニッツは之を書き示した所が、スピノーザも遂にその論證の確實なることを認めたと附記して居る。(Leibniz, *New Essay concerning Human Understanding*, Translated by Langley, p. 714 ff. を見よ。)

余は余の立場からライブニッツの此證明に多大の興味を見出すのである。シュタインなどは此時代ライブニッツは大分スピノーザに感化されて居たと云ふが、内面的で、すべて物を動的に見るかれの思想の特色がかかる場合にも既に現れて居るのではなからうか。勿論ライブニッツは純粹に論理的に論じたのであらうが、單一にして分つことのできない、即ち他から限定することのできない、それ自身にて無限なる性質とは我々の對象化することのできない、即ち認識對象とすることので

きない知識の構成作用の如きものでなければならぬ、それ自身にて生きたものでなければならぬ、苟も對象化せられ得るものは限定されたものである。完全なる性質とは此の如き對象化することのできない構成的アブリオリなるが故に、我々の思惟を超越して認識以上の世界に屬する、而して反省のできない種々の作用が一つの我に結合する如く、すべての完全なる性質は神の人格的統一に於て結合すると考へることが出来る。 *natura naturans* としてそれ自身の種類に於て無限なる屬性は、意志の形に於て絶対に無限なる本體の絶対的我に結合すると考へることが出来る。而して神の意志によつて世界が出来たと云はれる如く意志は存在の根柢である、完全なる存在は意志であることが出来る。(ライブニッツも *inclining reason* によつて世界が成立すると考へた)。併し勿論右に云つたことはライブニッツの解釋ではない、ライブニッツが斯く考へたといふのではない。

今を去る三百四十餘年の昔ロイスダールの畫によつて偲ばるる和蘭の空、秋將に老いんとするの時、ハークの町の物靜なる畫家の二階に、粗末なるテーブルを挟んで、哲學史上二つの時期を代表する二大哲學者の熱心なる哲學上の對話はゴム

ペルツならねど實に歴史畫家の好畫題といふべきであらう。

昭和三年五月八日 山吹の散る頃讀む

カント著作集刊行豫定目録

本著作集は遍くカントの全著作、書簡、断片等の中より、哲學上永遠的並に現代的價値を有する者、彼の思想發展の上より見て重大なる者其他を選び、カントの思想の全約を覘ふ點に於て學者の遺憾なからんことを期する。各篇は必要に應じて、原著の解説、註釋、索引(原語對照)等を附して出來るだけ讀者に親切ならんことを欲する。

- 1 純粹理性批判上卷 (既刊)……………天野 貞祐譯
- 2 純粹理性批判下卷……………天野 貞祐譯
- 3 實踐理性批判 (既刊)……………波多野 精一譯
宮本 和吉譯
- 4 判斷力批判……………深田 康算譯
- 5 宗教哲學……………安倍 能成譯
- 6 プロレゴメナ (改訂新刊)……………桑木 殿翼譯
天野 貞祐譯

- 7 道德哲學原論 (既刊)……………安倍 能成譯
藤原 正譯
- 8 道德哲學 (新刊)……………白井 成允譯
- 9 法律哲學……………恒藤 恭譯
- 10 論理學……………田邊 重三譯
- 11 人性學……………高橋 穰譯
- 12 一般自然史及天體論……………山本 一清譯
木村 素衛譯
- 13 一般歴史考其他 (新刊)……………田中 經太郎譯
高坂 正顯譯
- 14 神の存在證明の唯一可能なる證據
- 15 認識論及形而上學に關する論文集
- 16 論文雜集
- 17 書簡及断片

哲人叢書刊行に就いて

人類の思想上深き意義を有する「個人」について、その人格、思想の發展、思想の體系などを敘述批判せる著述の集成、それが哲人叢書の目ざすところであります。取扱はれる個人は主として哲學者であります。思想史上意義深き人である以上は、宗教家、藝術家等をもこの中に含めます。その點を顧慮して比較的意味の廣い哲人の語を叢書の名にえらびました。著者はその取扱ふ個人について特に興味を有し特に深く研究せられた方々であつて、その著述がその取扱ふ個人に關する權威書となることを我々は疑ひません。かくてこの叢書が完成に向つて歩を進めるに従ひ、こゝに大きい人類の思想史が權威ある姿で現はれてくる事になりませう。既に著者の確定せるものは、左の如くであります。尙このほかにも權威ある著者を得べく熱心に努力中であります。

既定の分も完成の期日は豫告出来ません。中には今後三四年の研究を以て書かれるものもあります。しかし我々はその書の權威の故に刊行の期の遅れることを恐ばなければならぬと考へて居ります。たゞ讀者諸君の熱心な期待が我々を助けて、これらの書の刊行の期

を一日でも早める様にして下さるならば、我々全體にとつての幸福であらうと思ひます。

ソク	波多野精一
ブラテ	石原謙
ブライノ	波多野精一
デカノ	朝永三郎
カイン	安倍能成
ゲイン	朝永三郎
ヘーゲル	阿部次郎
ブレンゲ	小山鞆繪
コレン	得能文
フレン	高橋里美
ヴン	上野直昭
ルツ	山内得立
ホル	伊藤吉之助
孔子	藤原正
無	字井伯壽

哲學古典叢書刊行に就いて

古典叢書の名は必しも古きに泥むを意味しない。時の古今を問はず、哲學史上に永遠的價値を占める名著、即ち眞の意味に於てクラシカルな著述をば悉く網羅せんとの氣風だからである。もとより我々は此事業が極めて困難なるうして長い年月の事業であることは初から覺悟して居る。此叢書は實行上の必要から豫め順序を設けず、譯者を得るに従つて逐次古今の名著を刊行して行く計畫である。尙各卷必要に応じて原著の解説、註解、索引(原語對照)等を設けて、出來得るだけ讀者に親切ならんことを期するは「カント著作集」と同じである。右叢書中既に確定して刊行し又遠からず刊行の運びに至り得るものは左の如くである。

アリストテレス「詩學」(既刊)

松浦嘉一譯

アリストテレスの詩學は藝術學の淵源として藝術を口にする者の必ず一讀を要する永世不朽の著であり、邦譯の疾くに表はるべくして而も表はれなかつたものであつた。譯者はこの二三年間全く此書の研究に没頭し、親しく原典の意義を探り、懇切な解説と註釋とを附して、この譯書を世に送る。

シラー「美學論集」上卷(既刊)

大庭米治郎譯

シラー「美學論集」下卷

安倍能成譯

文豪シラーが同時に勝れた哲學者であつたことは人の知る所である。此書はシラーの美學的哲學的論文の精華を收め、彼の藝術觀、文化觀、人生觀、道德觀を觀ふに於て殆ど遺憾なし。上卷は「悲劇的快感の根據に就て」悲劇藝術に就て

「優美と尊嚴に就て」悲壯に就て、「崇高に就て」以下數篇を收め、下卷は「美的教育論」と「素樸文學及び情慾文學」の二長篇を收める。

ライブニッツ「形而上學敍説」(既刊)

河野與一譯

「形而上學敍説」ライブニッツ、アルノー往復書簡を收む。この二篇はライブニッツの著述中最も永遠的並に現代的の意義を有すること多きものである。ライブニッツの哲學が新たなる意義を見出されようとする今日に於て、少壯篤學なる譯者によつて我國に於ける最初のライブニッツの翻譯を學界に送り得ることは、我等の深く喜とする所である。

右の外譯者の承諾を得て追て本叢書中に加へらるべき書物は左の如くである。

ヘーゲル「哲學體系綱要」(エンチクロペディ)	伊藤吉之助譯
ヘーゲル「宗教哲學」	石原謙譯
アリストテレス「形而上學」	木場了本譯
アリストテレス「ラオコーン」	三木清譯
ロツツエ「形而上學綱要」	茅野蕭々譯
ライブニッツ「悟性新論」(上・下)	務臺理作譯
ライブニッツ「辨神論」(上・下)	河野與一譯
ライブニッツ「單子論」	河野與一譯
ヒューム「人性論」	河野與一譯
	渡植彦太郎譯

目書學哲行刊店書波岩

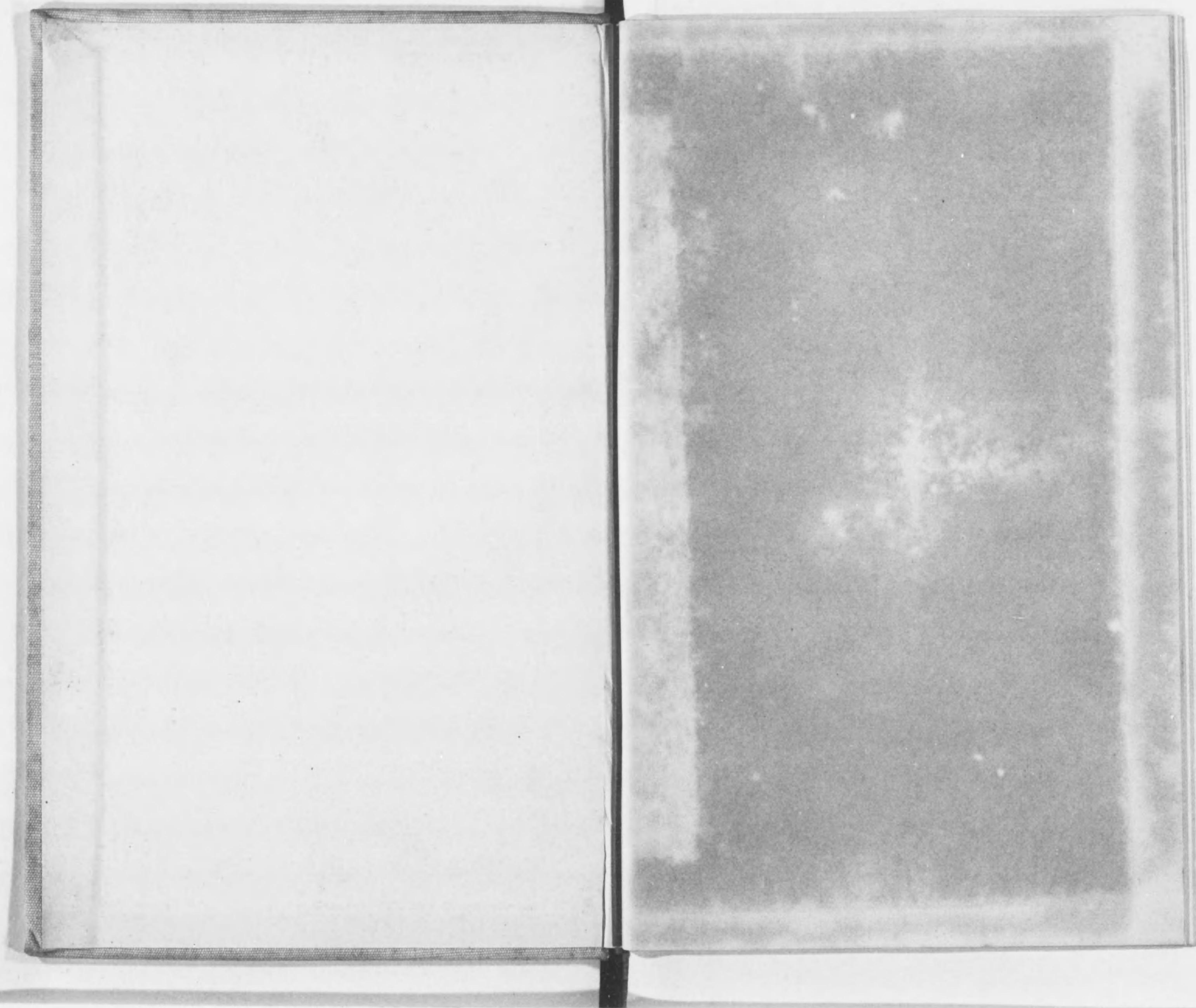
紀平正美著	識論	送料十八錢	深田康算和ケル	小品集	送料十八錢
田邊元著	最近の自然科学	送料十八錢	久保勉譯	和ケル小品集	送料十八錢
宮本和吉著	哲學概論	送料十八錢	久保勉譯	和ケル小品集	送料十八錢
連水澁著	理學	送料十八錢	久保勉譯	和ケル小品集	送料十八錢
安倍能成著	西洋古代哲學史	送料十八錢	阿部次郎譯	對話篇(1)	送料十八錢
阿部次郎著	倫理學の根本問題	送料十八錢	菊池慧一郎譯	プラバイド	送料十八錢
上野直昭著	精神科學の根本問題	送料十八錢	菊池慧一郎譯	プラボクタゴラス	送料十八錢
阿部次郎著	美	送料十八錢	田中秀央譯	希臘天才の諸相	送料十八錢
安倍能成著	西洋近世哲學史	送料十八錢	和辻哲郎譯	アヒスチス	送料十八錢
高橋里美著	現代の哲學	送料十八錢	松浦嘉一譯	アヒスチス	送料十八錢
高橋讀者心	理學	送料十八錢	大庭米治郎譯	シラ美學論集(上)	送料十八錢
			河野與一譯	ニフツ形而上學敍說	送料十八錢
			朝永三十郎著	哲人(1)デカート	送料十八錢

目書學哲行刊店書波岩

西田幾多郎著	山覺に直観と反省	送料二十錢	桑木殿翼著	カントと現代の哲學	送料二十錢
西田幾多郎著	意識の問題	送料十八錢	桑木殿翼著	カントと現代の哲學	送料二十錢
西田幾多郎著	索と體験	送料十八錢	紀平正美著	哲學概論	送料十八錢
西田幾多郎著	藝術と道徳	送料十八錢	紀平正美著	無門關解釋	送料十八錢
阿部次郎著	人格主義	送料十八錢	紀平正美著	無門關解釋	送料十八錢
西田幾多郎著	倫理學の根本問題	送料十八錢	金子大榮著	佛敎概論	送料十八錢
田邊元著	科學概論	送料十八錢	寺澤智了譯	宗敎の發達	送料十八錢
田邊元著	カントの目的論	送料十八錢	高野正治譯	宗敎の發達	送料十八錢
田邊元著	數理哲學研究	送料十八錢	安藤弘譯	藝術の始源	送料十八錢
安倍能成著	カントの實踐哲學	送料十八錢	桑木殿翼著	西洋近世哲學史	送料十八錢
			橫濱社會問題新カント派の社會主義觀	題研究所編	送料十八錢
			左右田喜二郎著	經濟法則の論理的性質	送料十八錢

岩波書店刊行哲學書目

宮本高橋編 波岩哲學辭典 十卷 送料八十四錢	上野小鶴譯 純粹理性批判(上) 送料廿七錢	天野貞祐譯 實踐理性批判 送料廿七錢	波多野精一譯 波岩實踐理性批判 送料廿七錢	宮本和吉譯 波岩實踐理性批判 送料廿七錢	桑木殿翼譯 プロレゴメナ 送料廿七錢	天野貞祐譯 波岩實踐理性批判 送料廿七錢	安原能成譯 道德哲學原論 送料十八錢	藤原正譯 道德哲學原論 送料十八錢	白井成允譯 道徳哲學 送料十八錢	木村實譯 一般歴史考其他 送料十八錢	田中正譯 一般歴史考其他 送料十八錢	村岡省吾著 知識の問題 送料十六錢	ホアンカレ著 科學の價値 送料十八錢	田邊元譯 科學の價値 送料十八錢	ホアンカレ著 科學と方法 送料十八錢	吉田洋一譯 科學と方法 送料十八錢	ウインツェル著 プレルデーエン 送料廿七錢	河東清譯 プレルデーエン 送料廿七錢	リツケルト著 認識の對象 送料十八錢	山内得立譯 大思想家の人生觀 送料廿六錢	オイケン著 大思想家の人生觀 送料廿六錢	安倍能成譯 大思想家の人生觀 送料廿六錢	三木清著 人間の研究 送料十八錢	城戸精太郎著 心理學の問題 送料十八錢	寺田精一著 犯罪心理學 送料十八錢	クロオチエ著 歴史敘述の理論及歴史 送料廿七錢	羽仁五郎譯 歴史敘述の理論及歴史 送料廿七錢	阿部次郎著 三太郎の日記 送料十八錢	安倍能成著 山中雜記 送料十八錢	和辻哲郎著 偶像再興 送料十八錢	吉村冬彦著 冬彦集 送料十八錢	谷川徹三著 感傷と反省 送料十八錢
---------------------------------	-----------------------------	--------------------------	-----------------------------	----------------------------	--------------------------	----------------------------	--------------------------	-------------------------	------------------------	--------------------------	--------------------------	-------------------------	--------------------------	------------------------	--------------------------	-------------------------	-----------------------------	--------------------------	--------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	------------------------	---------------------------	-------------------------	-------------------------------	------------------------------	--------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------



終

